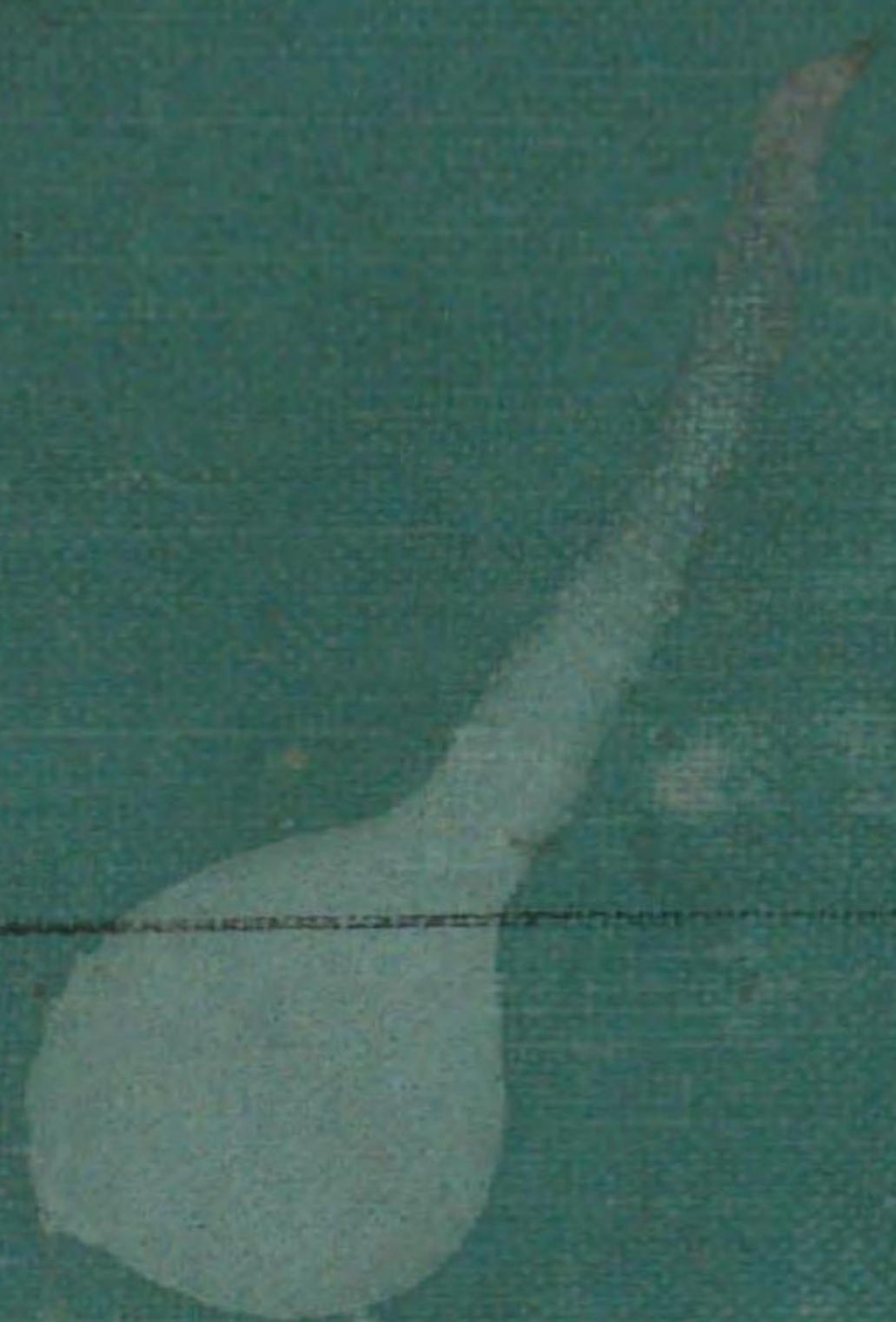


700

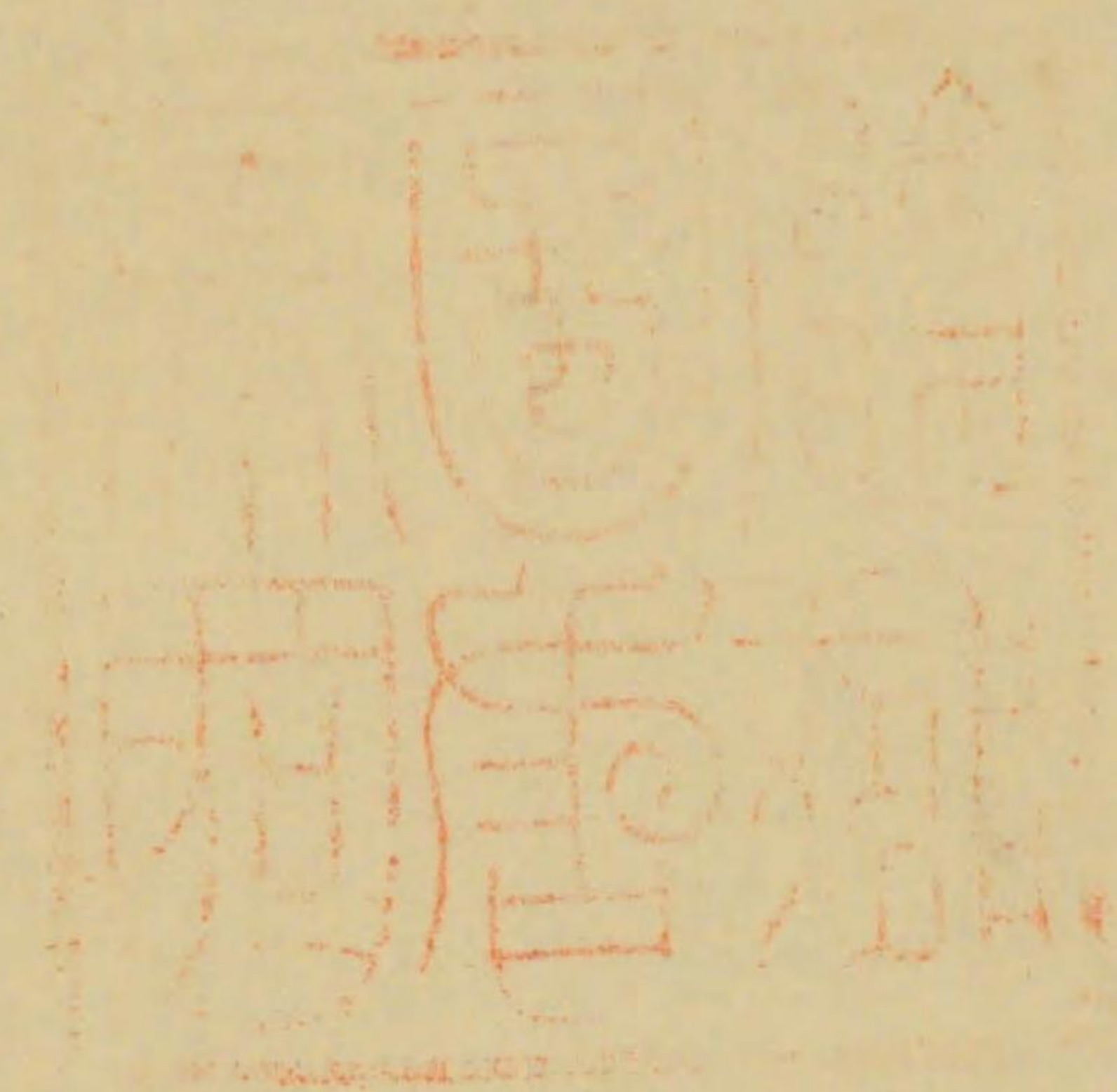
700-148



1200501582169



311



まへがき

昆蟲採集は誰にも簡単にやれる興味深いスポーツであり、且つ崇高な趣味である。斯うした方面に趣味を持つて居ると、その邊を散歩する時でも、或はハイキングに出かけた時でも、その先で變つた昆蟲を記念に集めて來ることが出來て、意義深くその日を過すことが出来る。

標本箱をあけて、そこに納めてある一匹の蟬を見た時、あゝこれはあの時、あの山の頂上に生えて居た松の梢に鳴いて居たのを、やつとの思ひで登つてつかまへたものだつた。その時、見下す足下は千仞の谷底で、肝を冷し乍ら降りて來たのだつた。こちらの蝶は秋草亂れ咲く高原に寝そべつて、澄み渡る青空に浮かぶ白い雲をしつと眺めて居る時、傍に咲く山百合を訪れたものだつた……それからそれへと在りし日の懐しい思ひ出は盡きないであらう。印像の深い立體的の日記である。

昆蟲採集は學者でなければやれないもの、又やる必要の無いものと考へて居る人も少くないが決してさうではない。魚釣りが漁師でなくても楽しめる様なもので、學者は研究の爲に採集をや

り、アマチュアは趣味としてやればいゝのである。釣つた魚は食べる楽しみがあり、採つた



昆蟲は眺める楽しみがある。形態の美それは彫刻的であり、色彩の美それは繪畫的である。如何なる美術家と雖も及ばぬ自然界の藝術品である。

臺灣の蕃界には至る處駐在所がある。何等の植物の無い此の様な處に住む巡查達には、蝶を採るのを楽しみとして居る人が澤山ある。私は或る時臺灣の最北端にあるアヂンコートと云ふ周圍一里程の島へ採集に行つたことがある。此處には内臺航路の安全を護る燈臺があつて、僅かの人達が住んで居るに過ぎないが、燈臺員の家族達は夏になつて草原でバツタ捕りをするのが唯一の楽しみであると云ふことを聞いて氣の毒な感に打たれた。

美術家にしても文學者にしても繪空事や自然を没却した文章では價値が薄い。どんなに高價な畫であつても、出鱈目の蝶があしらつてあつたり、秋草に春型の蝶を止らせたり。甚だしきは花に來ることの絶對にない蝶が花に來て居たりするのが多いので、是等は美しくはあつても科學的には嘘八百である。

昆蟲標本は研究以外に應用上の用途が非常に廣いものである。美しいものだけを寄せ集めて額とするも宜しく、繪畫、圖案等の參考としても甚だ重要な役割を爲すものである。

私は是迄に採集や標本製作に關する著書も二三あり、屢々種々の雑誌や著書の一部にも書いたのであつたが、文字を通じては讀者に思ふことの總てを通ずることの困難であることを痛感し、

それが爲講習會を開いたことも屢々であつたが、全国各地の希望者に満足を與へることは到底出來ないので、此の様な書を公にすることとしたのである。即ち何から何迄寫真で示して解説を附したもので、今迄自分が書いたものを平面的とするならば、これは立體的とでも云ひ度い。又寫真を主としたのは子供にでも見ただけで解る様にと考へたからである。

寫眞の殆ど全部は著者が撮影したものであるが、二三借用したものもある。夫等には責任上明記して置いた。

昆蟲に關することならば喜んで御相談に應ずるし、又當方へ御來訪になれば標本も御目にかけたいと思ふ。御遠慮無く御申出でありたい。

昭和十一年三月

東京板橋區石神井公園

昆蟲趣味の會

加藤正世識す

67	展脚板	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一三四
66	直翅目の標本作り方	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一三三
65	ばつたの捕り方	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一三〇
64	しやうりやうばつた	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一二八
63	いなご	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一二六
62	とのさまばつた	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一二四
61	寄生蠅	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一二三
60	蟬の捕り方	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一二〇
59	あぶらぜみ	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一一八
58	のこぎりくはがた	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一一六
57	樹液管見	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一一四
56	樹液に集る昆虫	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一一三
55	水棲昆虫の飼育	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一一〇
54	採集艇	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一〇八

53	水棲昆虫の採集	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一〇六
2	あめんぼ	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一〇四
51	池	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一〇二
50	蜻蛉の展翅法	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一〇〇
49	蜻蛉の標本作り方(その二)	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	九八
48	蜻蛉の標本作り方(その一)	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	九六
47	禾本科植物の莖	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	九四
46	捕った蜻蛉	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	九二
5	秋晴	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	九〇
44	ぐんばいととんぼ	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	八八
43	うちはやんま	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	八六
42	かはとんぼ	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	八四
41	小川	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	八二
40	食肉性昆虫の採集	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	八〇

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82
高	高	牧	尾	峠	溪	待機中のシホヤアブ	秋を歌ふ	しりあげむし	下	採集旅行の要具	みつくりはばち	ありのすあぶ	初夏所見
原・沼	山	場	根	：	流	：	：	：	草	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
一七〇	一六八	一六六	一六四	一六二	一六〇	一五九	一五八	一五七	一五三	一五七	一六六	一六六	一六四

81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68
大きな昆虫の殺し方	小蛾用展翅板	擴大鏡	平均臺	昆虫針・重裝式標本	小昆虫の標本作り方	打ち落とし採集	つまぐるおほよこばひ	ひらたあぶ	家	すけばはごろも	亂獲採集	網にはいつた蜂	初
秋	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	秋
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
一五三	一六〇	一六九	一六九	一六四	一五三	一五〇	一四八	一四八	一四四	一四二	一四〇	一三九	一三九

123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96
繭・蛹の標本	解體標本(その二)	解體標本(その一)	應用標本	昆蟲生態標本(その二)	昆蟲生態標本(その一)	整理の仕方	ラベル印刷器	ラベル	標本筆筒	標本箱	硬くなつた標本の軟化法	蟲瘿	あわふきむし	飼育蟻	飼育(その二)	飼育(その一)	幼蟲標本の仕上げ方	幼蟲標本の作り方	幼蟲の標本製作用具	芋蟲	はさみむし	冬期採集	初冬瞥見	夜間採集	受け網	燻し	葦と朽木の昆蟲
...
二四八	二四六	二四四	二四二	二四〇	二三八	二二六	二三四	二三〇	二二八	二二六	二二四	二二二	二二〇	二一八	二一六	二一四	二一二	二一〇	二〇八	二〇六	二〇四	二〇二	二〇〇	一九八	一九六	一九四	一九二

120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130
保存薬	蜂の巣	液漬標本	液漬標本箱	寫生器	プレパライトの作り方	プレパライト保存箱	梅雨晴れ(俳句)	日盛り(俳句)	ひぐらし(俳句)	高山昆蟲
二六四	二六〇	二五三	二五二	二六	二八	二二	二	二六	二	二

雑記

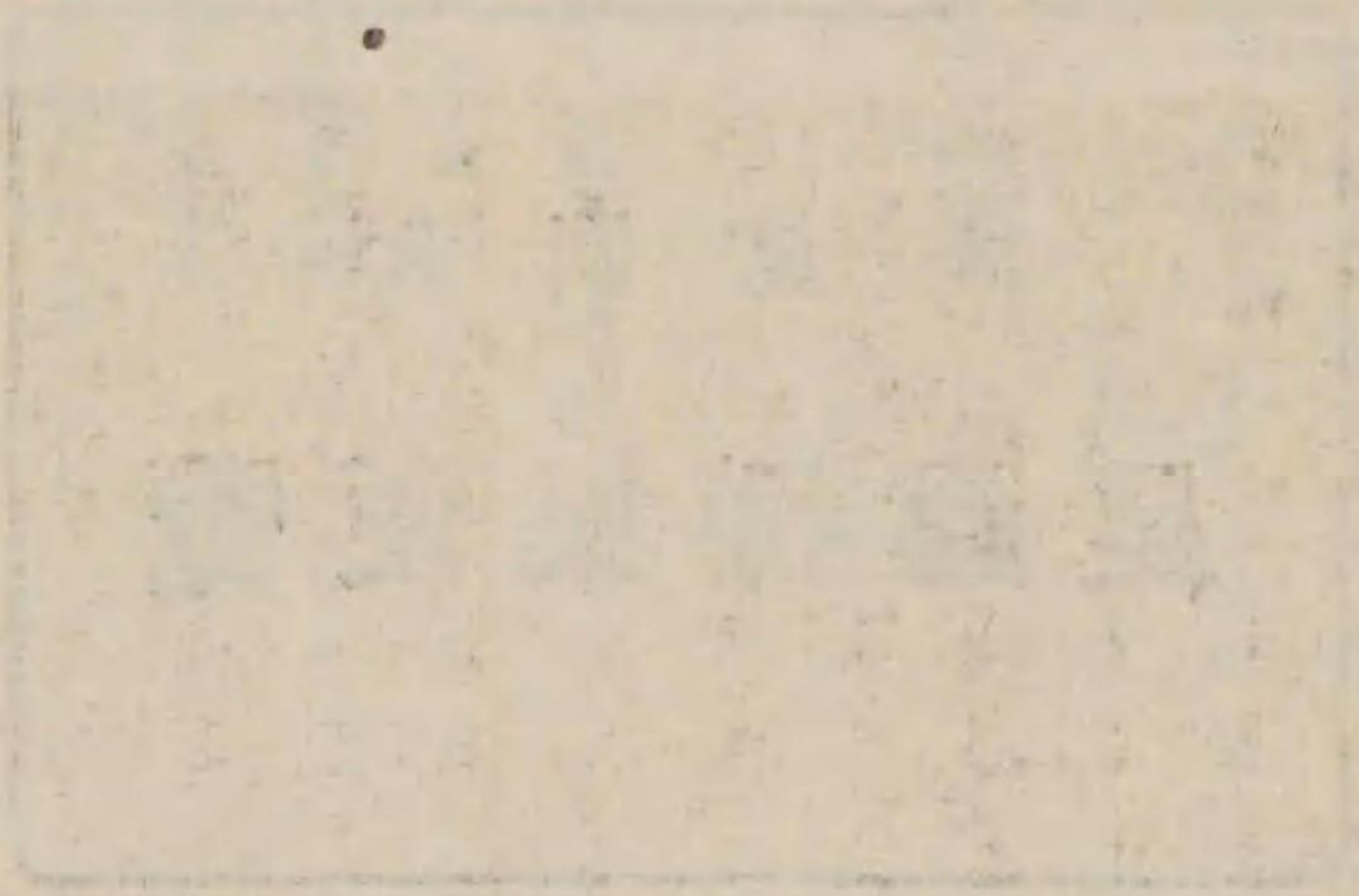
同	初	晩	雨	昆蟲の傳播	高山昆蟲	ひぐらし(俳句)	日盛り(俳句)	梅雨晴れ(俳句)	昆蟲の一番多い時期	奇妙な採集法
(續き)	霜(俳句)	秋(俳句)	霽れ(俳句)	日本の昆蟲の分布	蝶と蛾の區別	昆蟲應用の工藝品	虫と蟲	昆蟲民藝	昆蟲玩具	交換
七	八	六	三	六	四	四	五	五	三	六

寫 眞 圖 解
昆 蟲 採 集 便 覽

擬態・保護色・警戒色の疑問(その一)	……	一八〇
蟬しぐれ(俳句)	……	一八二
擬態・保護色・警戒色の疑問(その二)	……	一八四
同(その三)	……	一八六
採集の指導法(その一)	……	一九四
同(その二)	……	二〇六
同(その三)	……	二〇八
寒さに強い雙翅目	……	二一六
昔の標本	……	二三八
針を刺す位置	……	二三六
採集旅行の乗	……	二四〇
一時的のプレパレート	……	二六〇



秋の花壇を訪れたキアゲハ、ヒメアカタテハ、イチモンジセセリ等



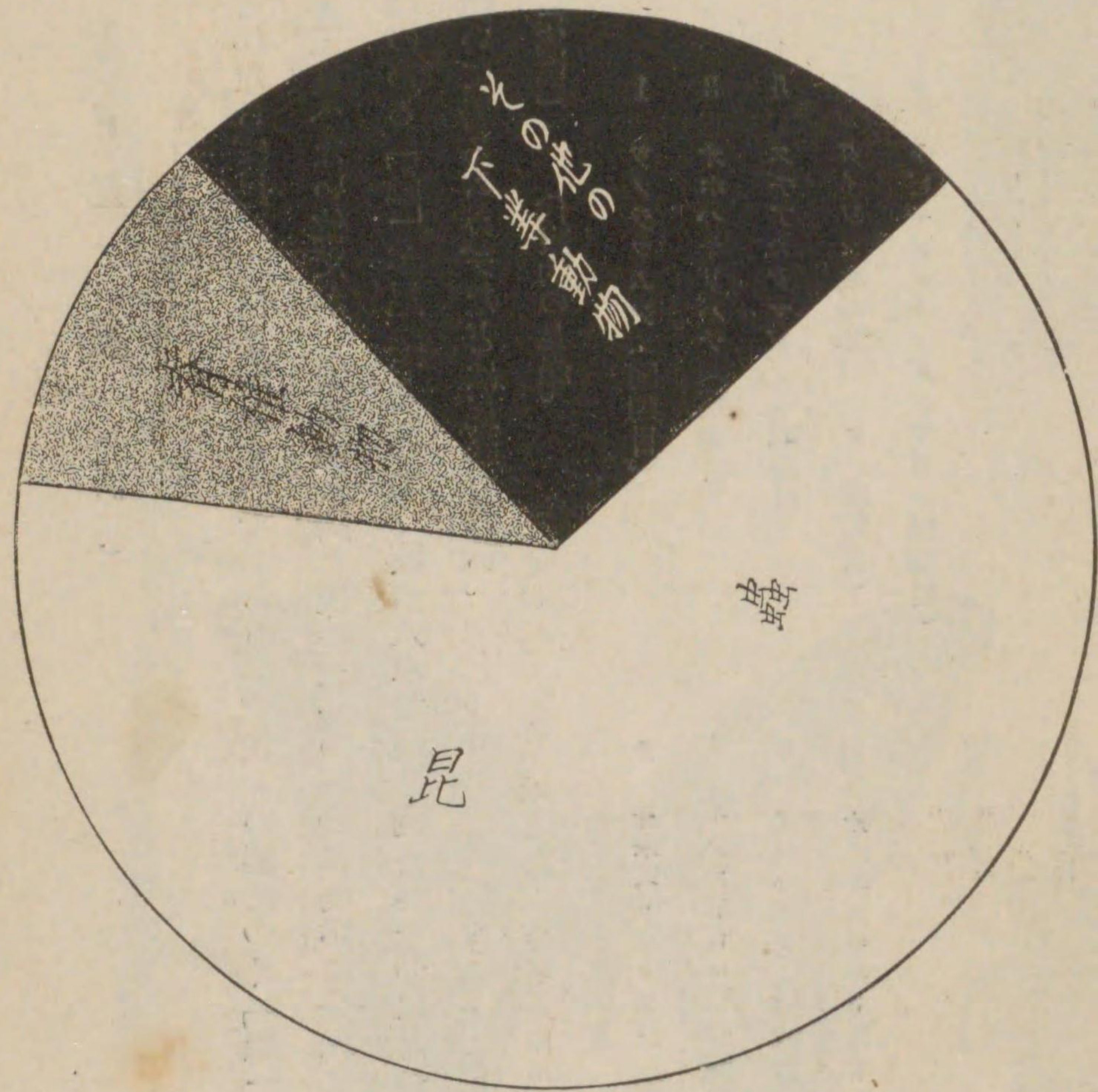
1 昆 蟲 (その一)

地球上に棲む動物の全数を1とすれば、その2/3は昆蟲である。全世界で名の附けられて居る昆蟲は約四十八萬、我が國に産するものだけでも三四萬はある。斯様に昆蟲は種類が多いのであるから、形の奇なるもの、色彩の美しいもの等筆紙に盡し難く、その生活の神秘複雑な事は到底他の動物の及ばぬ處で、深く探れば探る程滾々として興味は盡きないのである。フアーブルは昆蟲の生態を観察して文と爲すことを終世の事業とし、有名な昆蟲記を遺した。

全世界の昆蟲の數

原尾目(アセレントモン)	一、〇〇〇	總尾目(シミ)	三五〇
粘管目(トビムシ)	八二〇	直翅目(ナナフシ、バッタ)	一三、八〇〇
革翅目(ハサミムシ)	六	積翅目(カハゲラ)	六五〇
絶翅目(ゾロテイプス)	六〇	等翅目(シロアリ)	六〇〇
紡脚目(シロアリモドキ)	一、五〇〇	嚙蟲目(チャタテムシ)	六〇〇
食毛目(ハジラミ)	四五〇	蟲目(シラミ)	一二五
蜂蟻目(フユウ)	六〇〇	蜻蛉目(トンボ)	二、六〇〇
總翅目(アザウミマ)	一六、〇〇〇	異翅目(カメムシ)	二二、〇〇〇
同翅目(セミ、ウンカ)	一八〇	脈翅目(カゲロフ)	二、二〇〇
長翅目(シリアゲムシ)	一〇〇、〇〇〇	毛翅目(トビケラ)	一、六〇〇
鱗翅目(テフ、ガ)	七〇、〇〇〇	鞘翅目(カブトムシ)	一九五、〇〇〇
膜翅目(ハチ、アリ)	五一、〇〇〇	摺翅目(ネチレバネ)	一五〇
雙翅目(ハ、アブ)	〇〇	微翅目(ノミ)	三五〇

(據素木博士)



2 昆 蟲 (その二)

それならば昆蟲とはどんなものであらうか。我々の眼につく「蟲」と云ふのは大概昆蟲と云つても差支へない位だが、體は頭と胸と腹の三つの部分に明かに分れて居て六本の肢を持ち、多くは翅のある「蟲」が昆蟲であつて、肢が八本で頭と胸とが一つになつて居る蜘蛛や、頭の次に胴が続いて居るムカデなどは昆蟲でない。

【寫眞】 代表的の昆蟲。

- | | | | |
|---|-------------------|---|------------------|
| 1 | ツノラフムシ (同翅目) | 2 | オホヘリカメムシ (異翅目) |
| 3 | オホハキリバチ (膜翅目) | 4 | モンカゲロフ (蜉蝣目) |
| 5 | スヂアカクマゼミ (同翅目) | 6 | アゲハテフ (鱗翅目) |
| 7 | タイワンオホザウムシ (鞘翅目) | 8 | オホキカマキリモドキ (脈翅目) |
| 9 | トビモンオホエダシヤク (鱗翅目) | | |



3 昆虫の分類

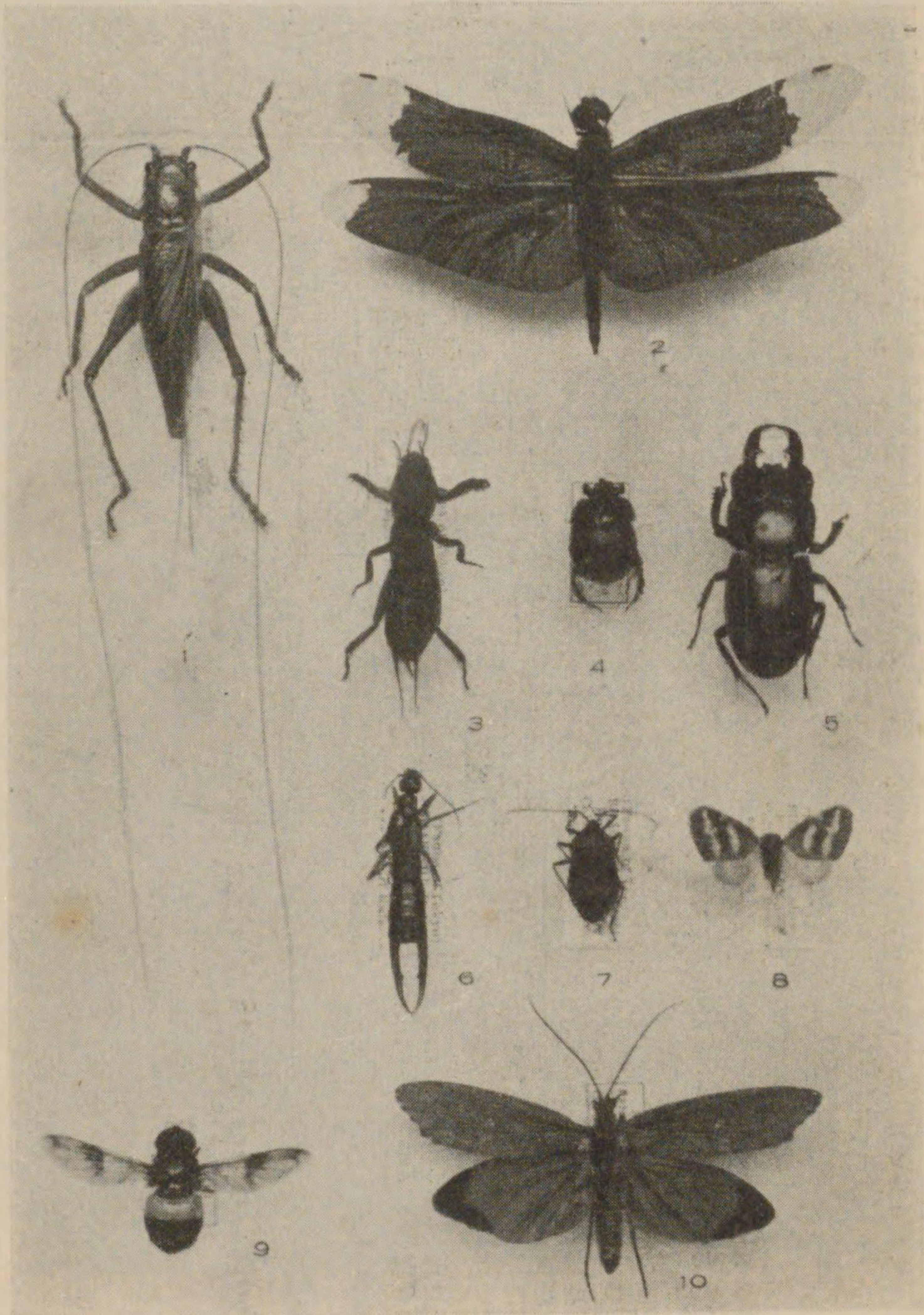
蝶・蜂蜻蛉皆昆虫である。是等の昆虫の分類法は學者に依つて色々であるが、初めての人には次の表に依つて簡單に見分けられるであらう。

類昆虫

翅の無いもの	翅の有るもの
全く變態をしない	翅は二對
翅は一對後翅は平均棍となつて居る	口は液を吸ふ様になつて居る
翅に鱗粉がある	翅は革質
翅は胸に接して出て居るもの	翅は膜質
口は頭端に出で居るもの	翅に毛が無い
腹端に缺がある	翅脈は網狀
體全體に硬い	翅脈は粗い
翅に細毛がある	後翅は縦に疊まれる
翅に毛が無い	翅脈は水棲
翅脈は網狀	幼蟲は陸棲
翅脈は粗い	幼蟲は水棲
後翅は縦に疊まれる	蜻蛉目
翅脈は水棲	膜翅目
幼蟲は陸棲	毛翅目
幼蟲は水棲	鞘翅目
蜻蛉目	革翅目
膜翅目	異翅目
毛翅目	同翅目
鞘翅目	鱗翅目
革翅目	雙翅目
異翅目	微翅目
同翅目	彈尾目
鱗翅目	
雙翅目	
微翅目	
彈尾目	

【寫眞】 代表的の昆虫 (その二)

- 1 コロギス(直翅目)
- 2 テフトンボ(蜻蛉目)
- 3 ケラ(直翅目)
- 4 ムネアカコガネ(鞘翅目)
- 5 ヒラタクハガタ(鞘翅目)
- 6 オホハサミムシ(革翅目)
- 7 ナシカメムシ(異翅目)
- 8 ベツカフハゴロモ(同翅目)
- 9 シロスヂベツカフハナアブ(雙翅目)
- 10 ツマゲロトビケラ(毛翅目)



昆蟲採集は最も高尚な娛樂である。緑深き森蔭に、碧水緩かに流れる山間に網を友として自然に親むことは、他の如何なるものも及ばない愉快なものである。採集そのものは身體のより良き運動であり、採集品は人工の及ばぬ神の藝術品である。彫刻品の如きカプトムシ、ツノゼミあり熱帯の昆蟲は極彩色の油繪に比すべく、温帯の蝶は水彩畫の淡彩に似た趣きがある。眞夏を讀へる蟬の聲、秋の夜長を歌ひ明かす鳴蟲の數々は人生に一掬の潤ひを與へるものである。

【寫眞】 武州石老山にて。

奇妙な採集法

私は時々死んだ昆蟲を拾ふことがある。山路等でよく見つけるが、中には完全なものも少ない。鳥に殺されたもの、自然に天命の盡きたもの等原因は種々あらうが、時々珍しいものが見つかると馬鹿に出来ない。又流れ等でも珍蟲の溺死體を發見することがあるが、この方が體は完全である。

ヒキガヘルは夕方ノソノソと出歩いて色々な昆蟲を捕つて食べる。そこで澤山食べた頃を見計らつて煙草のヤニを甜めさせると、胃の中にはいつて居る蟲を皆吐き出すと云ふ。未だやつて見た事はないが實験者の話では珍しいものが時々捕れると云ふ。鶉飼に似た採集法である。



5 五月の頃

池畔に淡紫色の藤の花が緑色の若葉に交つて氣高い美しさを見せる頃、クマバチが盛に活動を初める。或ものは羽音高く花から花へ蜜を求め、或るものは中空高く吊り下げられた様に停つては急に飛び去つて行く。

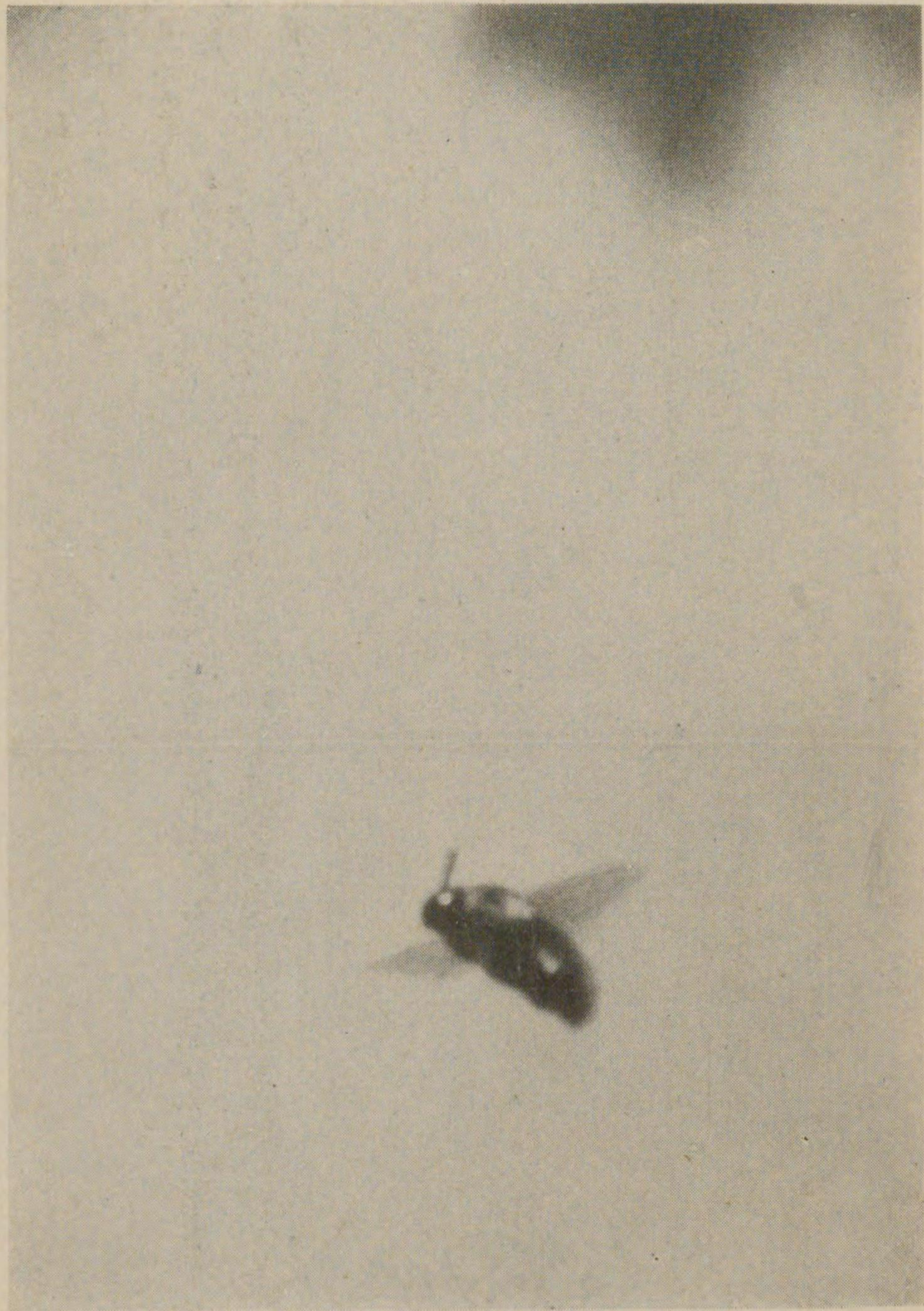
〔寫眞〕

初夏の光を全身に受けて、中空高く飛びつゝあるクマバチ。

昭和十年五月 石神井三寶寺池畔にて

昆虫の一番多い時期

平地で一番昆虫の多い時期は五月から六月へかけてである。新緑の候になると若葉を食べて居る昆虫も親となり、或は活動して居る。臺灣では四月頃から六月頃にかけて、内地の山地では六七月が最も豊富な時期である。



6 採集の準備

蟲界の神祕を探り神の藝術品を觀賞する唯一の道は採集にある。昆蟲採集にはどんな準備が必要か。人々に依て、又専門に依て多少の相違があるが、著者の常に用ひて居るものを標準とし紹介しやう。採集道具は簡にして素なるを最良とし、辨慶の七つ道具式に身に纏つて歩く事は、能率の上らぬものと心得ねばならない。

昆蟲が網にはいる度毎に背中のリュクサツクを下して道具を取り出す如きは愚かなことで、毒管でもピンセットでも手を入れよばすぐに出し得る如く準備して置かなければならない。此の爲には左方へ（學生用のカバン）を掛けてその中へ必需品を入れて置くに限るのである。

【寫眞】 著者の採集姿。

○ 梅雨晴れや初蟬の聲枝高し

初物は何でも高いと相場が極つて居るが、出初めのニイニイゼミも一二匹の頃は随分高い梢に鳴いて居るものだ。澤山出る頃には手でも捕れる様になる。



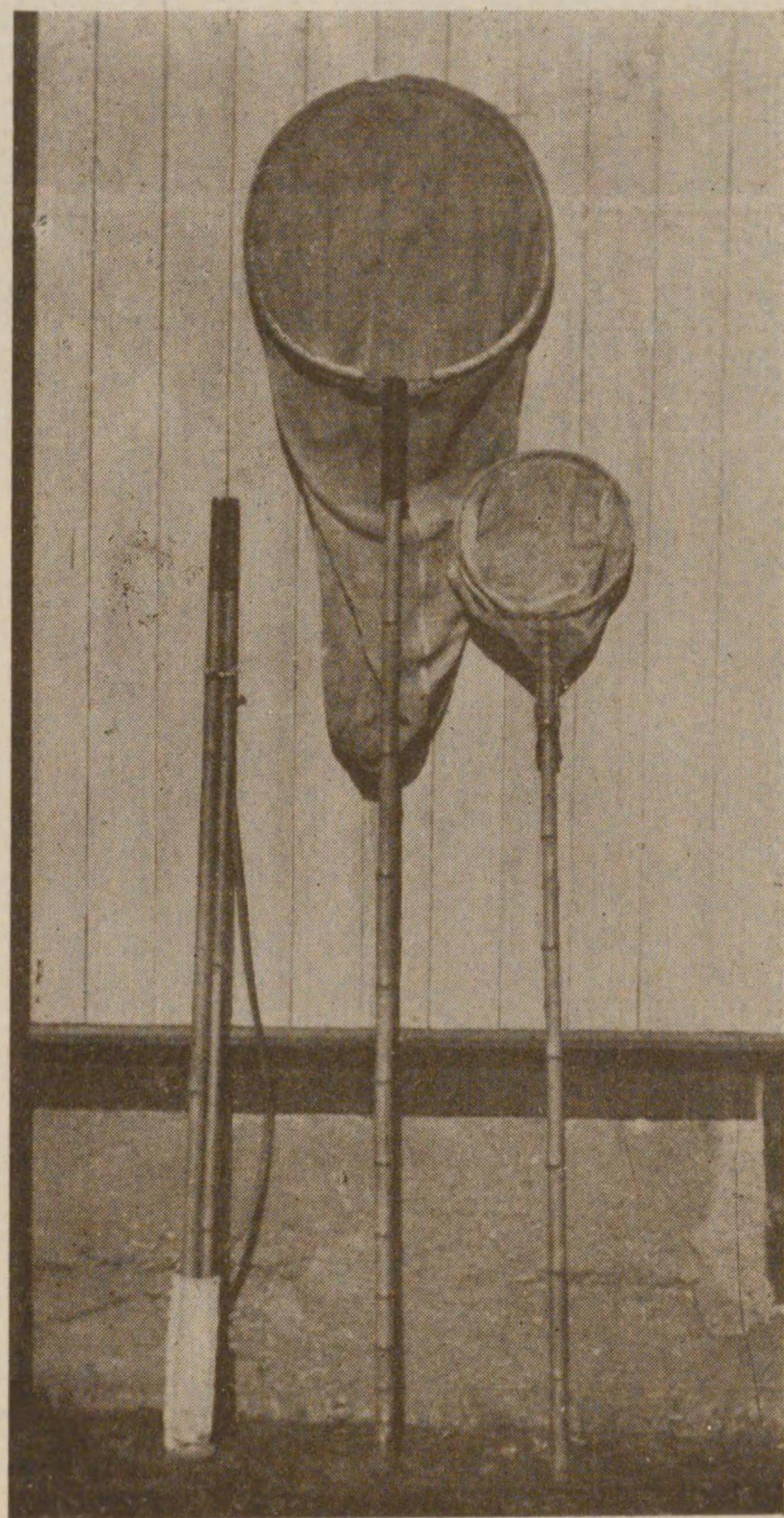
7 捕蟲網・蟬竿

昆蟲採集に最も必要なのは捕蟲網で、これが無いと殆ど仕事が出来ない。八番線を直径一尺五寸位な環にして竹の柄に取り付け、寒冷紗か白蚊帳の囊を直径の一倍半位な深さに作つて縫ひ附ければ出来る。囊の底は次第に細くして、先を圓形にする様にするのが理想的である。柄の長さには使ふ人の背の高さに依てきめればよい。杵の二つ又は四つに折れる便利なものがあるが、著者は手製の丈夫なものを愛用して居る。

水棲昆蟲用の水網は直径を小さく、浅くして水がよく抜ける蚊帳の様なもので作らなければならぬ。

高い處に居る蟬や蜻蛉は是非共もち竿で捕らなければならぬ。私は魚釣りの継ぎ竿にバンドをつけてかついで行くが、時々汽車の中等で釣れましたかと聞かれて苦笑することがある。

〔寫眞〕 (右) 水網 (中) 捕蟲網 (左) 蟬竿



8 歌 ぶ 蟬

うつたうしい梅雨もあがる頃になると、高い梢でニイニイゼミが鳴き始める。もう夏だと云ふ感じが力強く胸を打つ。

ニイニイゼミはいくら鳴いても喧しくない。悠暢なその聲は寧ろ夏の伴奏としてふさわしいものであらう。

山間に聴く此の蟬の聲は一種の哀調を感じる。

静かさや岩にしみ入る蟬の聲 芭蕉

静寂そのものゝ様な山奥を唯一人旅行してニイニイゼミの鳴聲を聞いた人でないと、此の句の真髓に觸れることは難かしからう。

【寫眞】 梢に歌ふニイニイゼミ。體の色が餘りにもよく樹皮に以て居るのでよく探さないと姿が見當らないかも知れない。

樹に止つて居る蟬はもち竿で捕るのが一番であるが、普通種ならば網でも差支へない。蟬の側面から（風のある時は風下から）樹の皮を引掻く様にして掬へばいゝのである。琉球や臺灣に産するクサゼミ類は植物の葉上に止つて居るから是非共網が必要で、是等は亂獲式で捕るのである。



採集道具中で甚だ重要なものである。廣口罎・コップ等でも代用品が出来る。硝子製のものは重いのと毀れ易いので、著者は總セルロイド製を愛用して居る。一般に底に薬を入れる様に出来て居るが、青酸加里は潮解して中を汚くするので、考へた末内側に硝子管を装置してその中へ薬品を入れることにした。これならば絶対安全である。

子供用としては青酸加里は危険であるから揮發油・エーテル・アンモニア等を用ひるが良い。綿に浸して入れるのである。

〔寫眞〕 セルロイド製毒壘。

○ 日盛りや兒にせがまれて油蟬

眞夏の午後二時、庭先には犬が長い舌を出してだらしなく寝そべつて居る。土は乾々に干からびて草の葉が細く巻いてしまつて居る。此の暑さに輪をかけて鳴き立てる油蟬こそ將に夏の王者であらう。



採集に缺くべからざる要具である。採集家は常に一本位はポケットに忍ばせて置くだけの用意がなくてはならない。その邊の採集には三本位を準備して、A・B・C等の符號をつけて置き、甲蟲、蠅、蛾等を別々に入れなければならぬ。強い蟲は弱い蟲を目茶目茶にするから。

採集旅行には十本位必要で、夜間採集でもやるとそれでも間に合はない位である。

毒管の構造には色々あるが此の寫眞の様に底の圓いものが丈夫で最良である。寸法は全長十二糎、直徑三糎。然しMQの空き罎でも何でも間に合ふものは幾らもある。底の處が縊れて玉になつて居る昆蟲専用の毒管は、その部分が非常に弱くなつて居るから使はない方がいゝ。

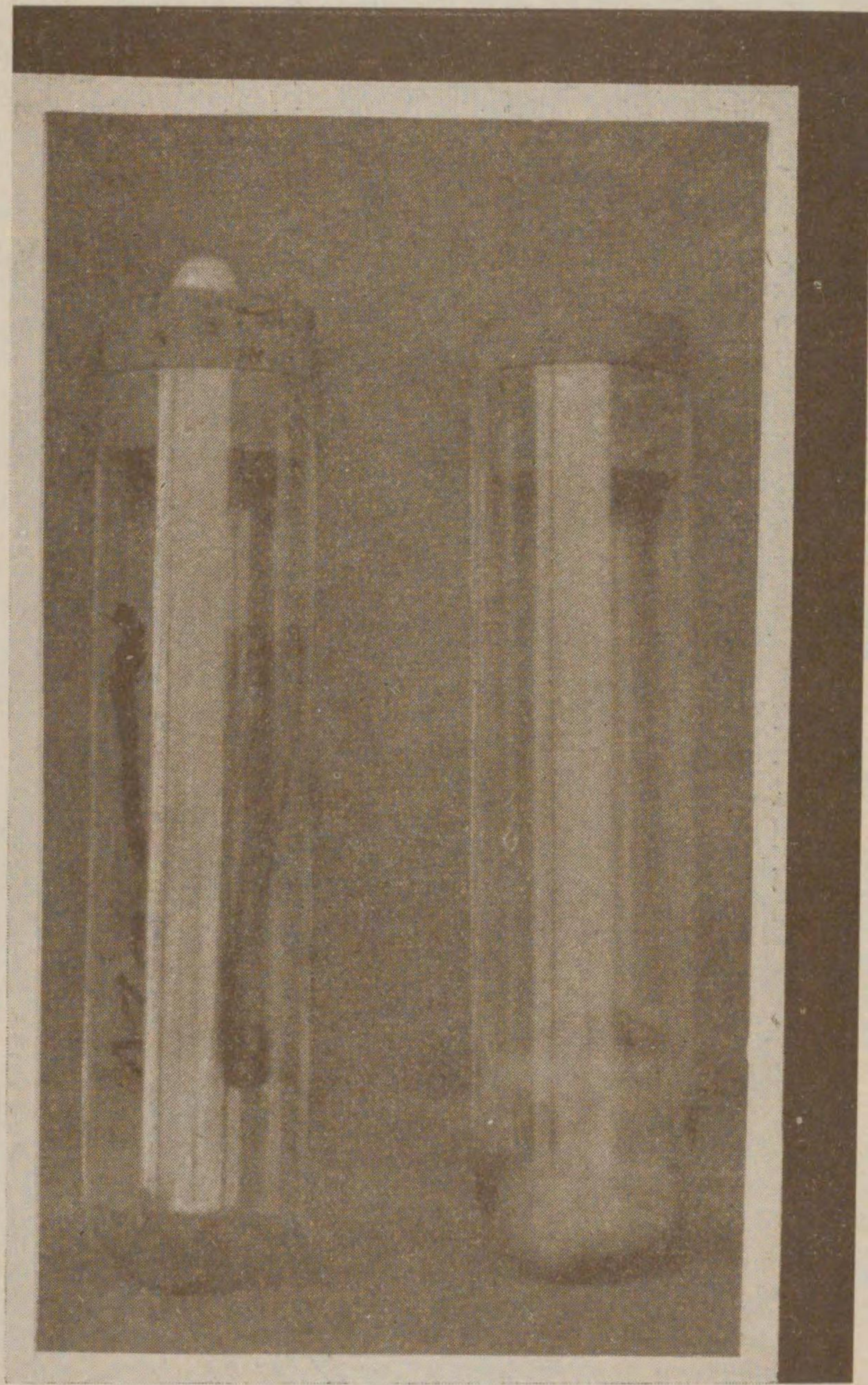
毒藥は普通罎の底に紙包みとして押し込んで置くのであるが、コルクの中央に孔をあけて、小型の管罎を下向きに挿してその中へ毒を入れる方法もある。

〔寫眞〕

(左) コルクに毒藥を裝置したもの

(右) 底に裝置したもの。

左圖の様にすれば、少し口の廣い罎ならば管罎でなくとも利用することが出来る。



II 小蟲の捕り方

こんなやり方もある。

毒管で止つて居るものをふせるのであるが、蠅の様な逃げ易いものには適當でない。

毒管は必ず空のものを使ふ事。中へはいつたまま傾むけるとこぼれ落ちる恐れがある。又毒管の中に細く切つた長い紙を入れて置けば、それに邪魔されて一旦はいつたものが再び口の方へ出て来ないし、又互に接觸して傷つけ合ふこともない。

【寫眞】 花に止つた小蟲を毒管で捕る。

○ ひぐらしや浴衣涼しき縁の端

一風呂浴びて聴くヒグラシの聲は一日の汗と疲れを醫す一服の清涼劑である。

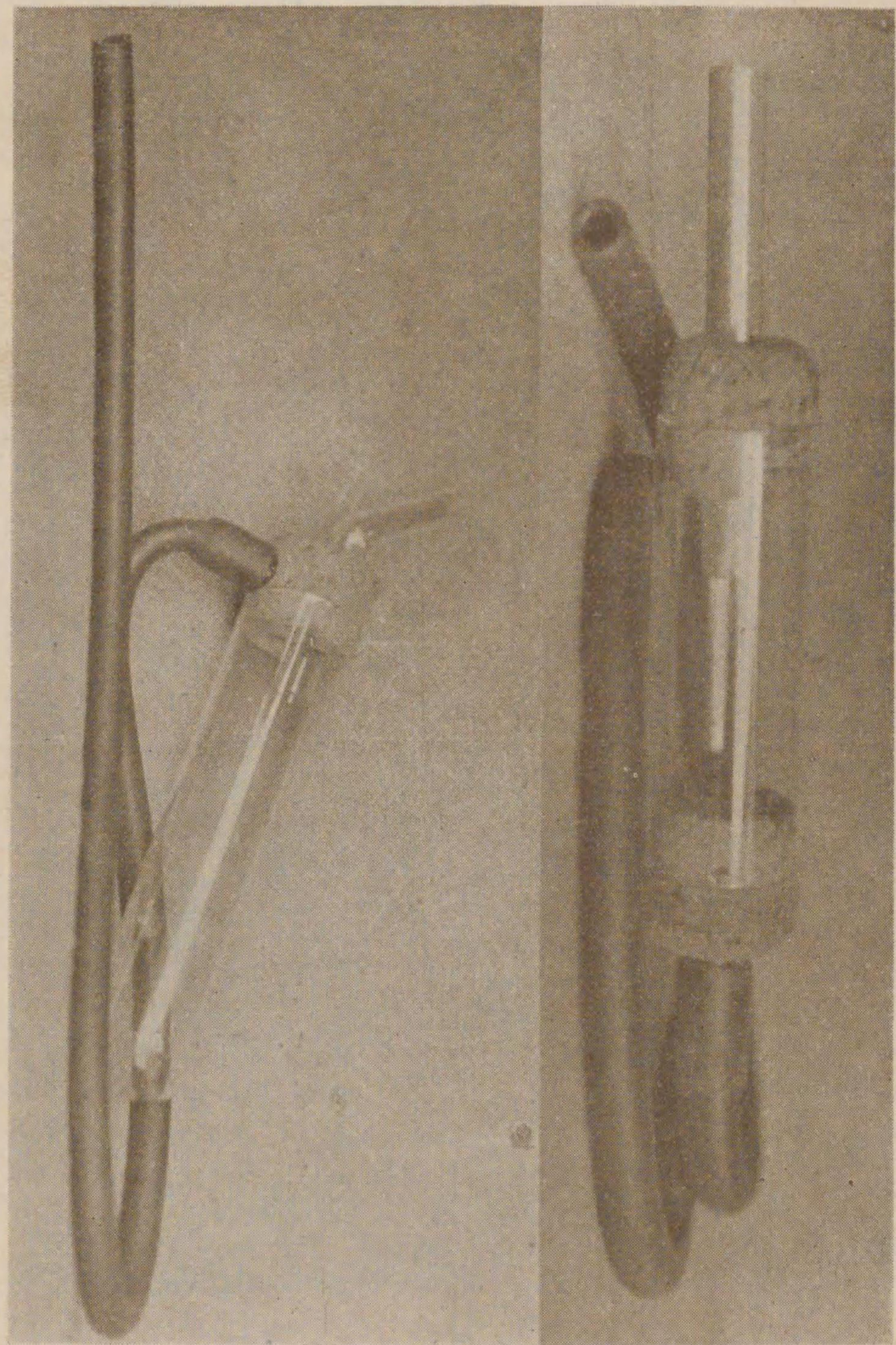


12 吸蟲管・吸蟲壘

澤山の小蟲を一時に片端から收容する便利な道具である。寫眞は著者の改良したもので左方のコルクに硝子管を通し、右方のコルクには口の處まで硝子管を挿し込み、外方にはゴム管をつないで置く。コルクの面には細かい金網を取り付けてあるので、吸ひ込んだ小蟲が口の中へはいらない。

これを更に改作したものに吸蟲壘がある。これはコルク栓に吸ひ込む管と蟲の入る管と兩方装置してあるもので、別に同じ大きさのコルク栓に毒藥を装置したものを準備して置き、澤山の小蟲を吸ひ込んだらば手早く栓をはめ換へるのである。そうすると中のものは逃げられること無く死んでしまふ。吸蟲管ではよほど上手にやらないと逃げられるが、壘の方ならばその心配がない。吸蟲壘の管壘を別に一本用意して置けば他方を殺して居る間に別のものを吸蟲壘として使用出来るから便利である。然し此の場合に毒氣があるといけないから、吸蟲壘とする際に二三回息を吹き込んで、中の空氣を換へてから用ひる方がいい。

【寫眞】 (上) 吸蟲管 (下) 吸蟲壘。



草の根際をかきわけてじつと見て居ると、色々な昆虫がぞろ／＼と面白い様に這ひ出して来る。アヲバアリガタハネカクシ、メダカハネカクシ、ヨツボシテンタウムシダマシ、シラホシカメムシ、ハムシの或る種、ウンカ類等。時にはアシナガサシガメの様な珍しいものも採集出来る。蠅等は吸蟲管で片端から吸ひ込んでしまふのである。

根際の昆虫は亂獲採集でも絶対に捕れない。此の方法が第一である。

〔寫眞〕 吸蟲管で蠅の小蟲を捕る。

高山 昆虫

高山性の昆虫は等温線と密接の關係を有し、北に行くに従つて標高を減じて来る。或る昆虫等は本州の山地に産するも北海道は平地に多いと云ふ様な例が決して少くない。

富士山は内地最高の山であるが、日本アルプス等と違つて高山性の昆虫は殆ど發見されない。それは富士山が孤立して居る關係であらう。又頂上には澤山の昆虫が發見されるが、それは何れも平地性のもので、晝間起る上昇氣流に持ち上げられたものである。



捕つた昆蟲を一時刺して置く爲のもので、蝶は必ず横向きに刺し、蟬の様な重い體のものは兩側を針で支へて置かなければならない。

箱は普通桐で軽く出来て居て、内側にコルクの様なものを貼り、針を刺し易くしてある。寫真に示したものは一方にポケットを作り、三角紙とそれに包んだ小蟲を容れる様にしてある。

昆蟲の傳播

處變れば品變る昆蟲の内にも、全世界何處にも居るものがある。シラミ、トコジラミ、イヘバヘ、キンバヘ等交通機關又は人體に附着して行き互つたものもあり、ワモンゴキブリ、コワモンゴキブリ、チヤバネゴキブリ等の様に船舶と共に移住したものもある。又自身の強力な飛翔力に依つて自らを空中輸送するギンヤンマ、ウスバキトンボ、ヒメアカタテハ等もある。ハナアブも世界共有の種であるがどうして行き互つたかは不明である。

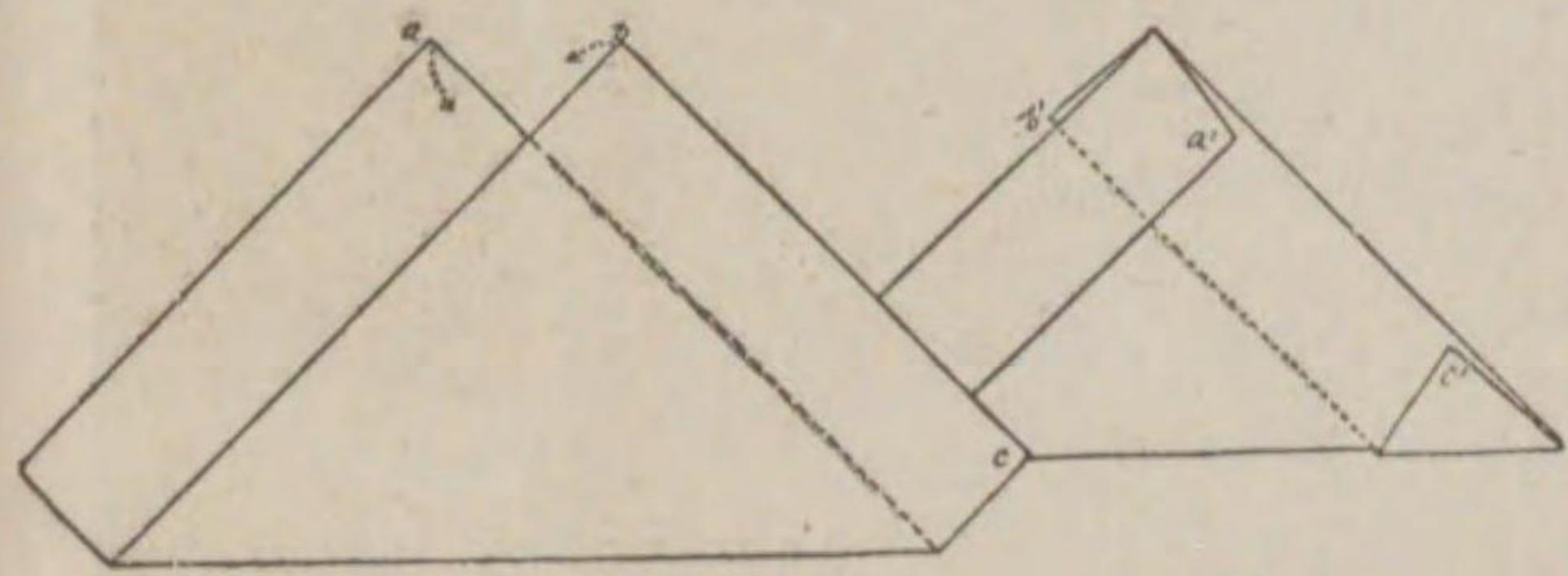
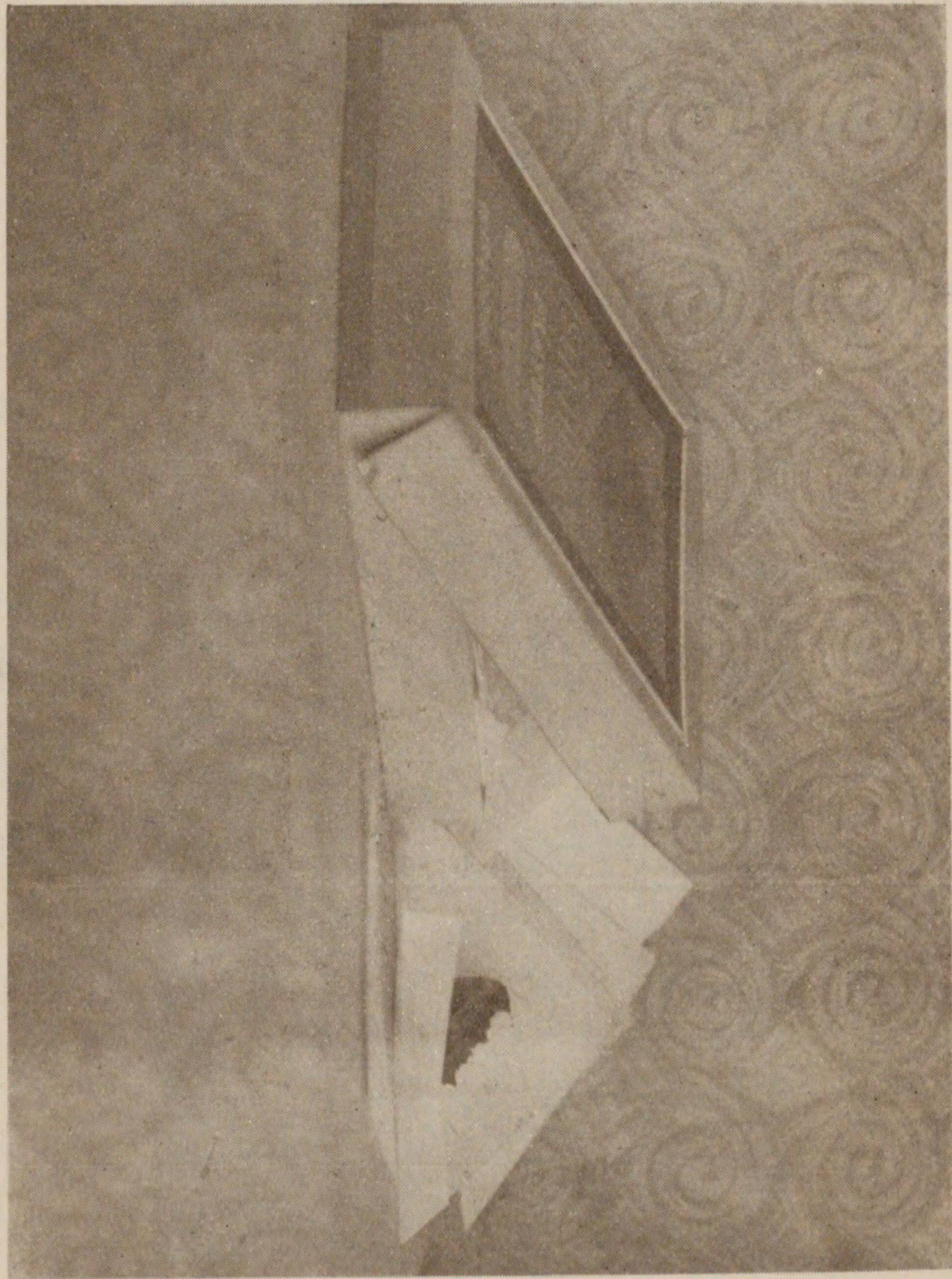
一般に植物の害蟲が外國に入り込むと原産地の様に外敵が居ないので猛威を振ふ事が少くない。それが爲各國共植物検査所があつて嚴重に豫防して居るのであるが、米國へ渡つたマメコガネの様な事になると、その撲滅が容易な事ではないのである。



蝶、蜻蛉等を包むに用ひる重要品。不要の紙を長方形に圖の様に折つて作る。

これを適當な空箱に入れて持つて行き、採集品を容れるのである。採集旅行の際や、包んだまゝで長い間保存する場合には採集地・日附等を詳細に記入して置かなければならない。三角紙を入れる爲に三角罐と稱する便利なものがある。これは腰に着けて採集品を入れるのである。三角紙の材料は何でもよい。不要の紙で充分に間に合ふ。濕氣の抜けないパラフィン紙やセロファンよりは古雑誌等の方が良い。

【寫眞】 三角紙と乾板の空箱を利用して作った三角紙入れ。



(三角紙の折り方)

長方形の紙を左圖の様に折り、出張つた兩端を向ふとこちらに折りかへせば右圖の様になる。
 $a = a', b = b', c = c'$ を對照して折り方を試みられたい。

× × × × × × × ×

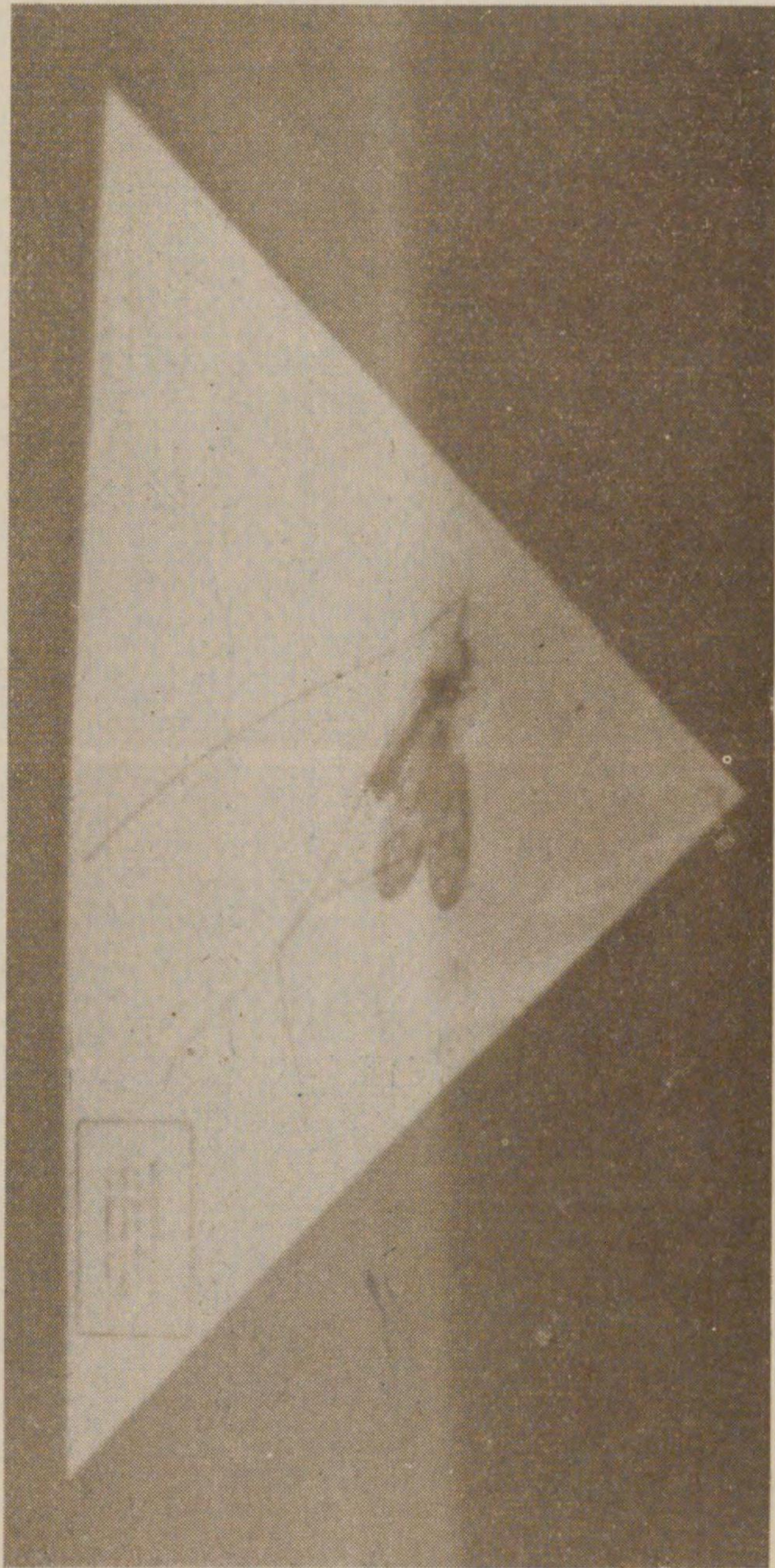
セルロイドの様な紙がある。よく菓子箱や果物籠の覆ひになつて居るが、これを標本製作用に應用すると便利である。

一度使つて皺の出来たセロファンは、水につけて充分軟かにして硝子板上に伸して貼りつけ、(水貼り) そのまゝ乾燥させれば綺麗になる。

白い厚紙で、底邊の長さ一〇厘米位な二等邊直角三角形の臺紙を作り、その上にガガンボを横向きに置き、その上からセロファンで覆ひ、裏面に折り曲げて貼りつけて置くと、ガガンボの標本が出来る。元來ガガンボは肢が折れ易くて困るものであるが、此の方法でやれば取扱ひに便利であり、たとへ折れても失ふことがない。又セロファンは透明であるから、そのまゝ研究することが出来る。此の標本にする前にガガンボは一旦他の三角紙に包み長い肢は適宜に曲げて三角形の範圍内に收め、充分乾燥させることを要する。

セロファンは濕氣を發散させないから、生の標本を包んで置いてはいけない。必ず乾燥してから用ひることである。

〔寫眞〕 セロファンをかぶせて作ったガガンボの標本



17 ピンセット

昆蟲を取扱ふのに無くてならぬものはピンセットである。これは目的に依て型が色々あるが、此處に示した様なものがあれば充分である。

針刺しピンセット 標本に針を刺し、或は箱に整理する場合に用ひるもの。(寫真中央)

製作用ピンセット 微小な昆蟲を取扱ふ爲の先の細いもの。(同上)

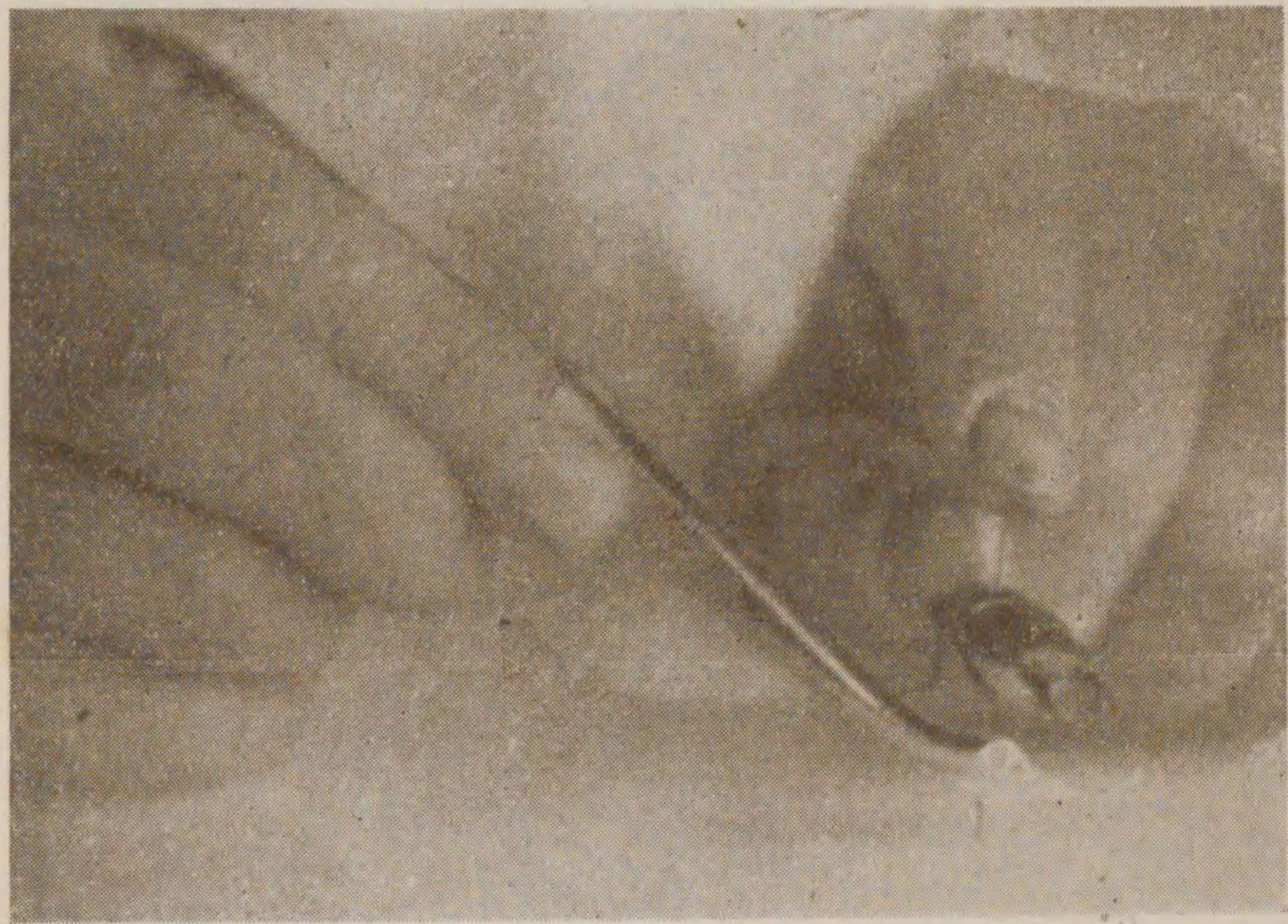
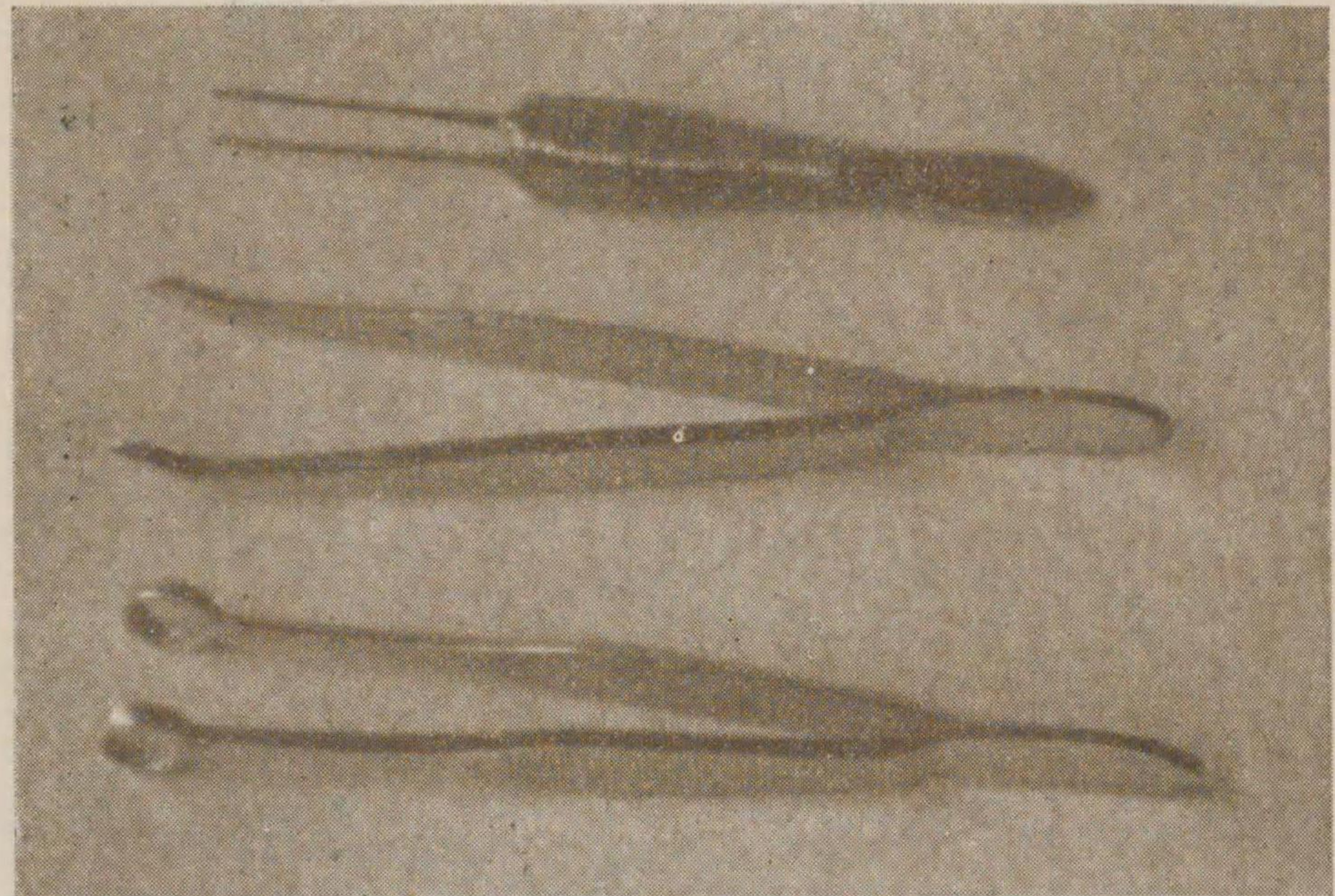
網附捕蟲ピンセット 先が環になつて居てそれに目の細かい網を張つてある。これは水網に入つた小形の水棲昆蟲や、水槽中の甲蟲等を捕へるのに甚だ便利である。(同下)

捕蟲ピンセット 先が匙形になつて居るもので、小蟲を挟むのに便利。

下圖は針刺しピンセットの使い方を示したもので、針の頭を左の指で押へ、右手にピンセットを持つて針の下部を強く挟んで刺すのである。

○ 雨霽れて鳴くみんなの勇ましき

驟雨一過雨に洗はれたる梧桐の葉の陽光に映えて美し。



四季とりどりの花を作つて置くと、その時期の昆蟲がかはるがはる訪れて、絶えず我々を慰めて呉れる。早春梅の花の開く頃には越冬したハナアブ類が久方振りに姿を見せ、早出のキアブ等も時々飛んで来る。

春から秋にかけては来る者を迎ふるに暇無く、一日我が庭の花壇に立てば、蝶、蜂、虻等入れかはり立かはり訪れて来るであらう。薄暮のあはて者、スズメガを以て終りかと思へばさに非ず夜蛾の種類は夜に入ると共に活動を始めて我物顔に飛び廻るのである。斯くて再び夜明けとなれば、早起のマルハナバチ類の營々たる姿が見られやう。

〔寫眞〕 秋の花壇を訪れたヒメアカタテハ。

○ 秋ふけて唯一匹の法師蟬

柿が眞赤に色附いた。その下の方には大根がズラリと干してある。もう蟬も終つたと思ふ頃聴く生き残りの皺枯れたツクツクボウシも懐しいものである。



19 くるばねつりあぶ

カナムグラの花にクロバネツリアブが止つて居た。寫さうと思つてピントを合せて居ると、中々じつとして居らずあちこちと飛び廻るので遂にシャツターが切れず、止めやうかと思つて居る間に隣りのトマトの葉に止つたので寫して見た。

眞黒な紺色に光る翅、黄色い毛の生えた胸、白いバンドを持つた腹。夏にふさわしい様な姿の虻である。

ツリアブの類には三つの型がある。一、口吻の長いピロウドツリアブ類。二、口吻の短かいクロバネツリアブ類。三、腹部の細長いハラボソツリアブ類。

勞せずして昆蟲を採集する方法

- 一 室内採集 採集家を訪問して欲しい標本をねだつて物にすること。
 - 二 郵便採集 遠隔の土地同志交換に依つて昆蟲を集める方法。
 - 三 購入採集 標本を買ひ集める方法であるが、標本屋のものは産地が怪しいのが多いから餘程注意しなければならぬ。
- 其の他借りつばなしと云ふ手もあるが、迷惑のかゝる様なことは決して爲すべきではない。



最も多く昆虫の集るのは花である。花は美しい色、高き香りを以て蟲を誘ひ、甘き蜜を與へてその代償として花粉を媒介させる。造化の妙でなくて何であらうか。

日暮れに咲く夕顔、月見草、カラスウリ等はその頃活動を始めるスズメガのみに依て實を結ぶと云つても良しからう。然し中にはハナムグリ類の様に花を訪れても花粉を食つてしまふギヤングもある。

【寫眞】 蜂類の澤山集るエゴノキの花。

高い樹に花が咲いて居る時、捕蟲網で花そのまゝを蔽ひ、ガサ／＼と動かす時は止つて居た昆虫が皆網の中へはいつて来る。殊に山でそれをやると色々な美しいハナムグリや、甲蟲を澤山に獲られる。殊に臺灣では珍らしいハナムグリ類を斯うして澤山に捕ることが出来る。

○ 霜降りて鳴く音細りぬまだらすず

昭和十年十一月十四日、朝の霜甚だし。初氷張る。草間にすだく蟲の音のいと細りゆくを覺ゆ。



夏の頃生垣や畑の隅にはびこつて困るカナムグラは、採集家に取つて寶庫とも云ふべき花である。貧乏カツラ等と祿でもない名前を附けられた此の草の花は餘り見ばえのしないこまぐらしたものであるが、色々な蝶や蠅や虻が引切りなしに集つて来る。

アゲハテフ、アラスデアゲハ等も此の花が好きと見えて澤山に飛んで来る。

【寫眞】 カナムグラの花にモンシロテフが止つて居る處。

日本の昆蟲の分布

日本は北から南に長く横たはつて居るので、棲息する昆蟲も種類が甚だ豊富である。島の位置から見れば、アジア大陸に接して居るので、舊北洲系統の昆蟲が棲息する筈であるが、實際は南方の東洋洲系統のものが多數に混じて居るのである。アゲハテフ科の大部分、蟬類等に特に著しいのであつて、四國九州等になると臺灣と共通種が多く、意外の感に打たれるものである。リウキウムラサキ、メスアカムラサキ、ナガサキアゲハ、ミカドアゲハ、コフキヒメイトトンボ、ハツチヤウトンボ、トゲライイトンボ、オホヅコバネコホロギ、ダイワンクツワムシ、ニイニゼミ、クマゼミ等何れも日本内地に産する熱帯性昆蟲の代表者と云へやう。



22 蝶の採り方

花を訪れた蝶を採るには、風下の方に廻つて横から掬ふのである。

なぜ風下に網を持つて来るかと云ふと、風の爲に囊が膨れるので採り易いからである。止むを得ない場合には風上でもいゝが、その場合には風の速度以上の速度で網を振らなければならぬ。

網にはいつたならば囊を翻して横にたらし、逃げられない様にする。

【写真】

(上) 掬つて網をひるがへす。(中) カカリヤの花に來たアゲハテフ。アゲハの類は始終翅を動かし乍ら蜜を吸つて居る。(下) 網の上から胸を壓して殺す。



23 地上に止つた蝶

網の底をつまんで靜にかぶせると、蝶は上へ飛び上るから、つまんで底を横の方に曲げる。アヲバセセリやタテハ類の様にすばやいものでは、勢よく上からかぶせないと逃げられること疑無し。

【寫眞】 カタバミの花に止つたモンシロテフを捕る。

蝶と蛾の區別

蝶は翅を立て、止り蛾は擴けるのが特徴である。一般に知られて居る。處が決してそうではない。本書の寫眞に見られる通り、ヒメアカタテハもキアゲハもミヤマセリもすつかり翅を擴げて止つて居る。是等は時として立て、居ることもあるが、中には絶対に立たないダイミヤウセリ、シロセリ、スミナガシの様なものもある。

一方蛾の方にもイカリモンガや小形のシヤムトリガの様翅を直立するものがあるから、一概に翅の如何に依て蝶と蛾を區別することは出来ないのである。又蝶と蛾とを區別するはつきりとした境の無いことも知つて頂きたい。



うまく蝶を網にしたならば決して口を上向けることなく、網の下から蝶の胸を壓へて（此の時必ず翅を合せて直立する位置にしなければならぬ）殺すのである。（望頁下圖）初めての人は口を上にして中へ手を突込んでつかまへやうとする爲に、逃げられたり翅が破れたりするものである。

蝶に限らず總ての昆蟲は網にはいつた際上へ上へと逃げる癖があるからこれを利用して網を逆さにして中へ追ひ込むことを要する。

寫眞は蝶の殺し方を示したもので、網の上から此の様な位置になる様に胸を壓へるのである。

昆蟲應用の工藝品

天然の美しさを具へた昆蟲そのものを工藝品に應用することが最近研究されつゝある。最もよく見受けられるものは蝶の類で、これは色の配合に依つて非常に美しいものが出来る。鱗粉展寫の繪葉書、體だけ紙に印刷して、實物の翅だけを硝子板の間に挟んだ盆等商品として市場に出て居るが、多くは觸角を何か他のものを用ひてあるので、蝶であり乍ら先の細い蛾の様なものになつて居て實に不自然な感じがする。有機ガラスの中へ昆蟲をそのまま封ずる工藝品は大きな成功と云へやう。文鎮、帶留、バラソルの柄等になつて居る。南米産の硬い美麗なハムシでネクタイピンやカフス釦が出来て居るが、臺灣あたりの中にも出来さうな氣がする。

昆蟲全形でなくとも、頭とか腹とか一部分だけ應用しても面白い工藝品が出来ると思ふ。



25 早出の蝶

その名に反して平地に多いミヤマセセリは、コツバメと共に四月上旬から現はれ、枯野の路傍に可憐な姿を見せて居る。

待ち焦れて居た春の一日、未だ若草の小さな路上に此の蝶を見る時は、何となく懐しいものである。

〔寫眞〕 ミヤマセセリ

此の寫眞の様な止り方をして居る場合は、上から急速に網をかぶせるのが安全で、横に翔ふ時は草が邪魔をするから逃げられることがある。

總じてセセリテフの類は展翅が難かしい。探つてすぐよりは一日後に處置する方がやり易い様である。



木立、林の間等餘り日の當らない處に多い蝶。

至る處の平地、山地等に普通に見られる。

平地では樹液に集るが、山へ行くと路上の馬糞に多い。

又面白いことに山地のものは色が非常に黒味勝つて居ることだ。

〔寫眞〕

櫟の樹に止つて居るキマダラヒカゲ。

ヒカゲの類は一般に酒が好きだ。悪い酒を林の中等に撒いて置くと澤山に集つて来る。琉球ではコノハテフを捕るのに焼酎を撒くさうであるが、酒の他に發酵した果物等もいゝ餌である。オホムラサキを誘ふには後者が一番の様に思はれる。

樹に止つて居る蝶は一寸採り難いものだ。中位のものには横から掬つて良いが、オホムラサキやゴマダラテフ等は網の口を止つて居る上から當てがつて中へ飛び込ますのが安全である。



27 展翅板

寫眞は展翅板の構造を示したものである。

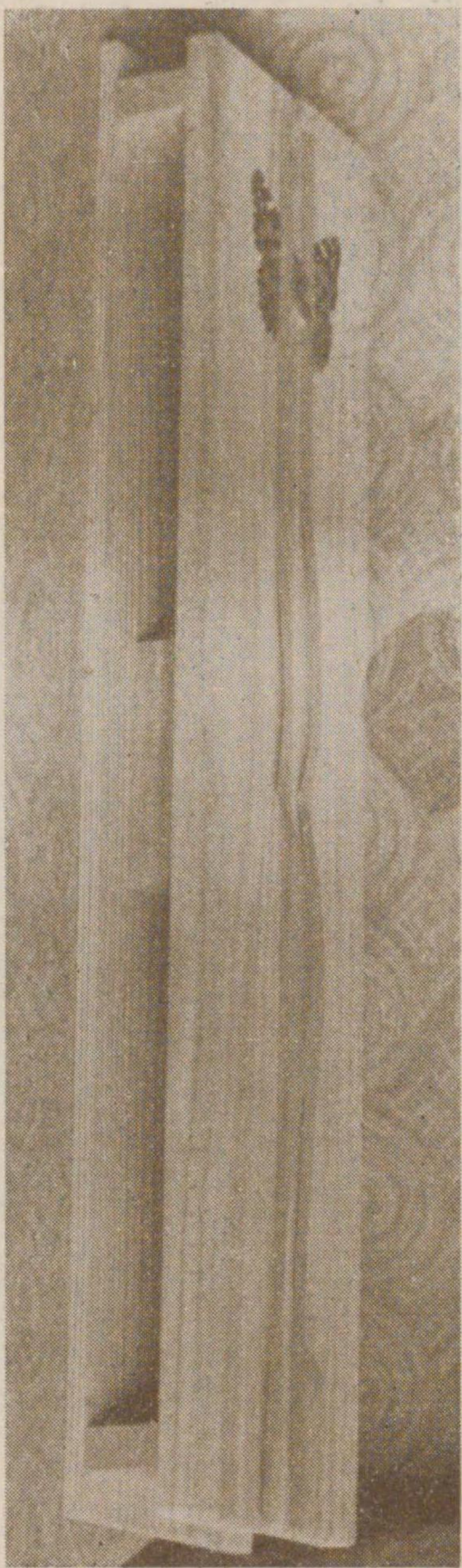
寫眞の展翅板は標準型であるが、菓子箱等の廢物で簡単に出來ると思ふ。手工の時間に男の生徒に展翅板を作らせ、女の子供に捕蟲網の袋を縫はせて協力採集させたならば意義深いものがあるらう。

展翅をする時には、左の手で押へ紙（ハトロン紙の廢物を細く切つて用ひるのが最良）を引く様にし乍ら押へ、右手に針を持って翅を動かす。

虫 と 蟲

『虫』とは蛇の事で、音はキと云ふ。蛇の象形文字なのである。それであるから『昆蟲』を『昆虫』と書くのは誤りで、『こんちゆう』とは讀めないが、虫を蟲の略字として用ひるならば『こんちゆう』と讀んでも差支へはあるまい。

『蟲』の方は昆蟲、蜘蛛、其他その近縁のものに用ふる文字で、チウと發音する。



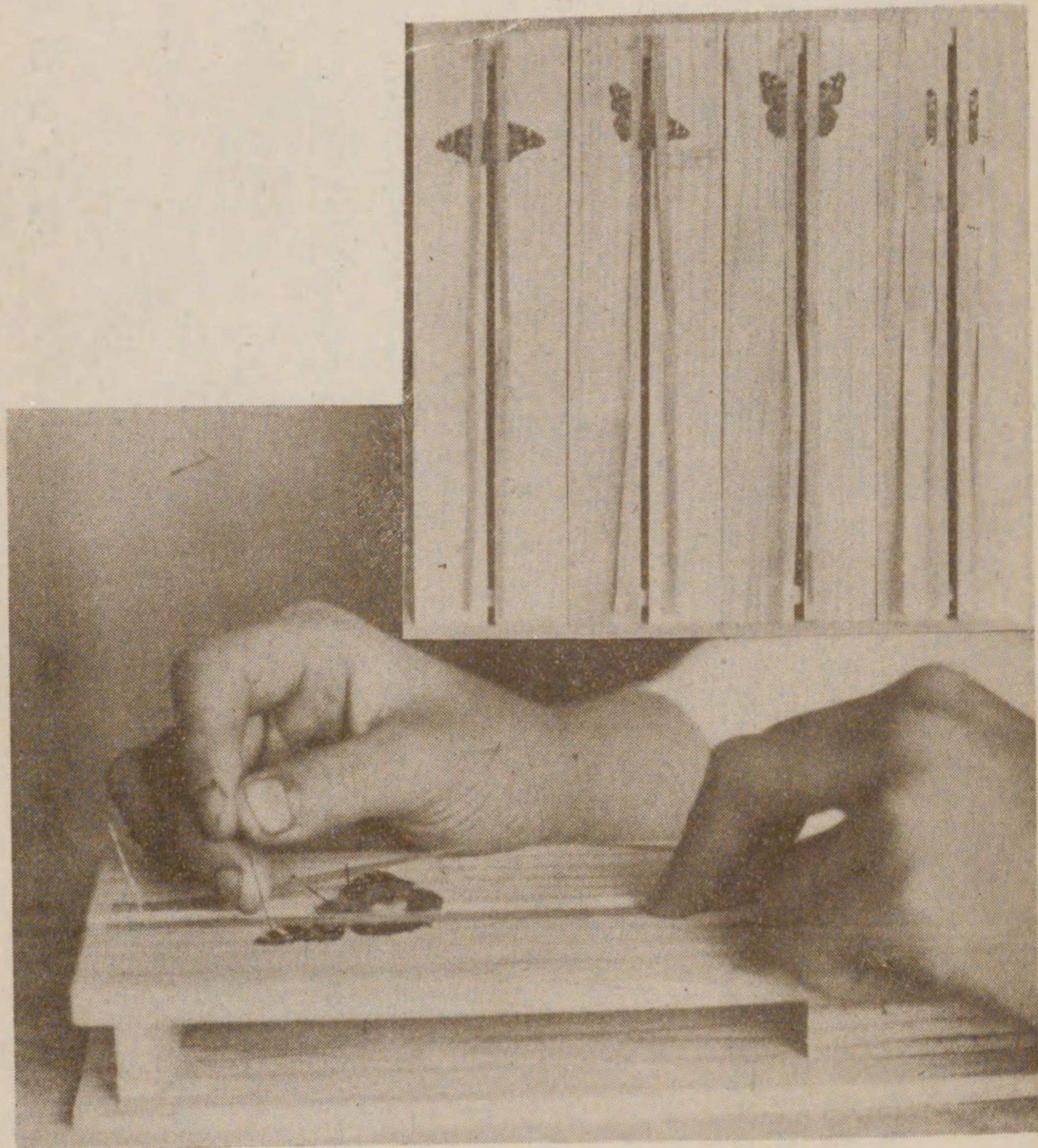
寫眞の左から

- 1 蝶の翅が展翅板の面と平らになる様に刺す。丈夫な細い紙の溝を両側に針で留める。
- 2 (イ)先の細い縫針の様な針で左翅の前縁を引かけ、上方へ引き上げる。(ロ)後翅を同様の方法で上方に引き上げる。

3 右翅を前と同様の方法で上方へ上げる。此の時前翅の後縁は左右一直線になる様に位置をきめなければならぬ。

4 幅の広い紙で翅の両側を押へる。斯うしないと乾燥するにつれてそり上るものである。そして日附の小札を附して塵のかゝらない場所に置く。

斯うして一週間もたてばこのまゝの形に固るが、その間に害虫や黴にやられない様に注意しなければならぬ。



甲蟲以外の昆蟲は成るべく展翅して標本とするのがいゝ。殊に翅脈等を研究する場合には展翅してないと判らぬものである。

展翅の際翅の形は大體蝶を標準として、前翅の後縁が左右一直線になる様にしたならばいゝのである。然しものに依ては多少手加減して形を整へる方がいゝ。

〔寫眞〕

『右列上より』オホスカシバ・スズメバチ・ツノトンボ

『左列上より』ヒゲラシ・ヤブキリ・オホカハゲラ

昆蟲民藝

昆蟲を集めて居るとそれに關聯して玩具だの繪だのと云ふ様なものにまで關心を持つ様になる。私は旅行先だのデパートだの、又は各他の會員諸君に依頼したりして玩具を集めて居るが各地方に依つて持味があり、中々面白いものである。竹を用ひたものが多く、蟬、バッタ、カマキリ、トンボ等が主で、その他の材料では銀杏の實、松かさ等を用ひたもの、木彫、セルロイド等がある。是等は何れも近代的の所謂民藝とも云ふべきものであるが、古來からの張子、土製等のものは又違つた味がある。



30 鱗粉展寫

蝶の鱗粉をそのまま繪とする方法で、繪葉書、美術品等に應用されて居る。色々な場所に應用して面白いものが出來やう。

作り方の順序を説明すれば。

1 ライスペーパーの様な薄い紙に糊（アラビヤゴム、澱粉性の糊等）をムラ無く塗り、その半分の方に蝶の翅をバラ／＼に取り外して丁度展翹する位置に貼りつけ、

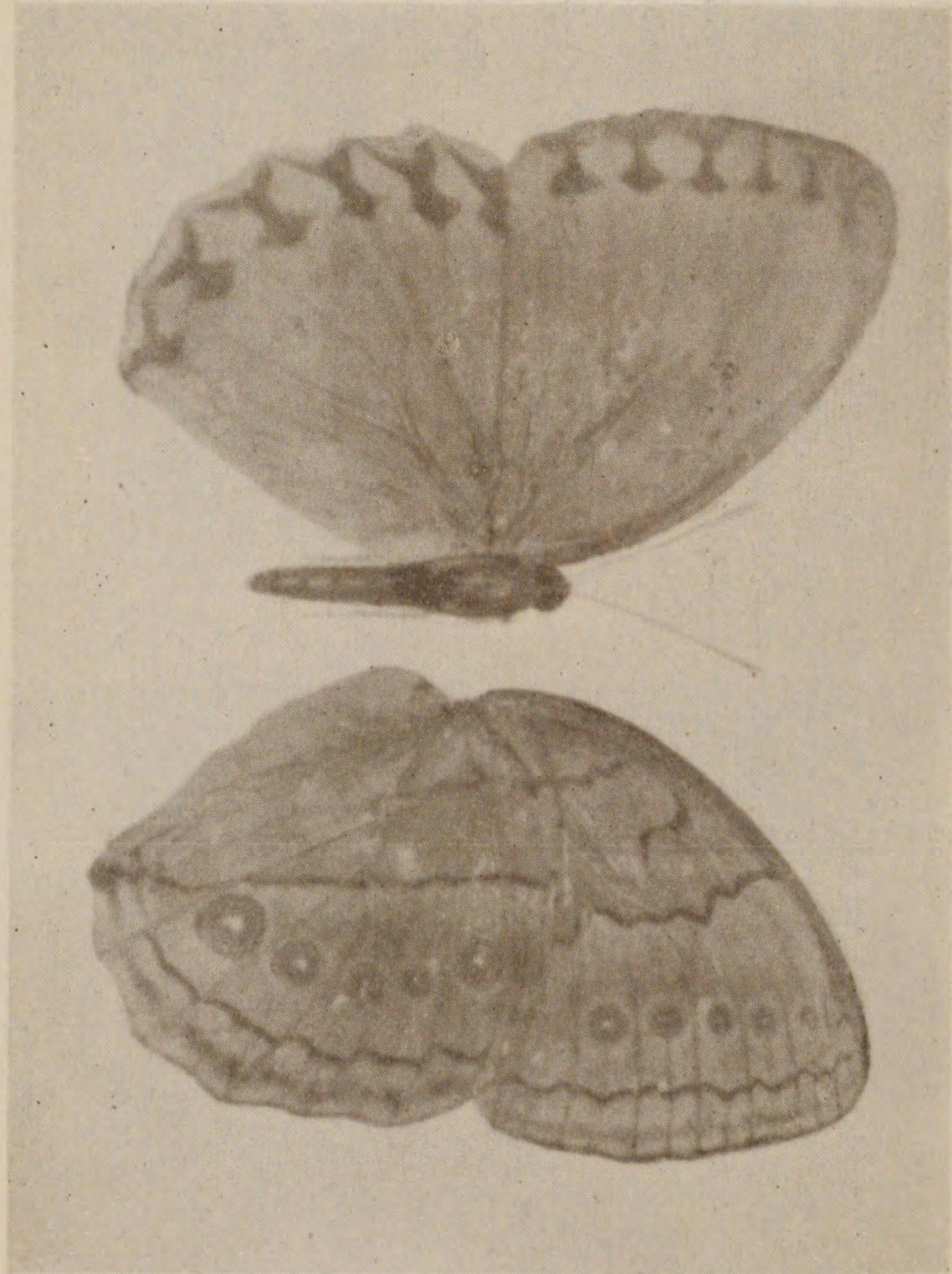
2 残り半分の糊のついた紙をその上にかぶせて新聞紙等の間に挿みよく壓へて、すつかり糊が行き互る様にする。これを重いものゝ下に入れて一日も置くとよく乾くから、翅のとはりに切り抜く。 3 ピンセットで表面と裏面をはがすと

4 両面が同時に出來て、

5 眞の翅は骨組みだけが残る。

出來たものは胴體と觸角とを着色寫生してそれに貼りつけければ良いので、若しも糊がかすれた處は繪の具で補色すればいゝのである。

寫眞は鱗粉展寫をしたワモンテフ。



木の芽がそろ／＼色附く頃になると、今迄ひそんで居た色々な昆虫が活動を始め出す。出たばかりの木の芽には既にアブラムシが群つて居り、それに卵を産む爲ヒラタアブやテナタウムシが集つて来る。

足もとの枯草の間からセスヂツチイナゴが飛び出した。長い冬をどこかで過した奴だ。日當りのいゝ斜面には冬を越したボロ／＼のヒラドシテフが止つて居る。

間もなく賑かな蟲の世界がめぐり来るのだ。

【寫眞】

枯草に止つて居るシホヤトンボとセスヂツチイナゴ。

昆虫玩具

玩具には特別に記す様なものはない。大きな玩具屋で手に入るものもあるし、町外れの駄菓子屋でなければ賣つて居ないものもある。又子供の頃浅草あたりでよく見かけた、觸角を捲くと飛び揚る蝶も此の頃銀座に進出して居る。關西の方で賣つて居る陶製の昆虫標本と云ふのがある。これは色々な昆虫の形を土で作つて色を塗つた寫實的のもので、中々よくは出来て居るが、玩具にもならず、理科の参考品にも役に立たない中途半端のものである。

名古屋や伊勢の虻、蟬、蜂等も此の仲間に入れて良からう。



畑の昆蟲は多くの場合その作物の害蟲である。従て採集し得る種類は少いが、農作物の害蟲を研究するには最も適當な場所で我が國の様な農業國では、是非そうした方面の調査をすることが必要である。

菜や大根の畑にはモンシロテフやナガメが集つて居り、芋畑には無氣味な芋蟲を發見するであらう。

又水田で稻を掬へばウンカ、カメムシの類が澤山にはいつて來る。

〔寫眞〕 芋畑

交換

北海道に居て臺灣の昆蟲を集め、東京に居乍ら南洋の標本を手に入れるには購入は別として交換に依るのが最も手輕である。交換を申し込むには相手方に當方の提供品と希望品とを申し出で、受諾されたならば完全なものに採集地名、年月日、其の他を詳細記入して發送するのである。



大豆の葉には色々な害虫がついて、網の目の様になつて居るのをよく見るものだ。ヒメコガネ、マメコガネ、或は毒蟲として知られて居るマメハンメウ等その本尊だ。

ヨンプバツタも時々仲間入りして居るのを見かけるが、これは大豆に限らず甘藷畑にも多い。

〔寫眞〕

大豆の葉を食つて居るオンブバツタ。♂が♀に比べて非常に小さく、交尾してゐる姿がおんぶして居る様なので此の名がある。

近頃有名になつた昆虫二つ

(その一) マメコガネは近年アメリカに密航して大繁殖を極め、色々な植物に害を與へて居る。日本では野生の植物に少し居る位だがアメリカでは農作物でも果樹でも何でも御座れで、その損害の甚しい處から、わざ／＼日本に敵蟲を採りに來た位で、現在でも寄生蠅や寄生蜂を送つて居る筈である。向ふでは Japanese beetle と呼ばれ、非常に恐れられて居る。なぜ日本では大した害をしないかと云ふと、敵蟲の爲に一〇〇パーセント發生する處を三〇パーセント位、想像であるがに制限されて均衡を保つて居るからで、全く敵蟲の居ない米國では一〇〇パーセントに發生して暴れ廻つて居るのである。

(その二) 隣邦滿洲國では不老長壽の藥と稱してゴミシダマシの一種を生きたまま、飲むと云ふ事だ。失業者が愚にもつかない事を考へ出して商賣の材料にして居るのかも知れまいから迂闊にこんな眞似はしない事だ。



直翅目の多くは夏から秋にかけて親になる。春の終り頃になると、雑草の間から夫等の子供が親に似た姿でノソノソと現はれて来る。

草原には大きな頭をしたバッタやコホロギが棲んで居り、林の中等にはキリギリス科のものが多い。

【寫眞】 ヤブキリの子供。もう一回脱皮すると親になる。

直翅目の幼蟲は成蟲同様内臓を出して標本にする。小さなものは液浸が面倒でない。

直翅目の幼蟲の中には形が非常に面白いものがある。親になるとその邊に普通なつまらぬ種類でも、幼蟲時代には何か珍種のような感じのものが少くない。飼育して見るのも面白からう。飼育中特に注意しなければならぬことは、時々霧を吹いてやることで乾燥し過ぎると完全に脱皮が出来ない。

昆蟲は人間と同じものが好き

人間の中には酒の好きな者がある。コノハテフ、ヒカゲテフ等は酒が大好きで、撒き散すと集つて来る人間は甘い物が好きだ。大概な昆蟲に蜂蜜を與へると喜んで食べる。幼蟲でさへも。スズムシ等は食ひ過ぎて死んでしまふ。



菜種の花は割合に早く花を開き、花虻やヒラタアブの類が好んで集るものである。最も普通に來るものを擧げて見ると、ハナアブ、モモブトハナアブ、ノラハナアブ、アヲハナアブ、メバヘ類、ヒメベツカフバヘ、ダイミヤウハナバチ、ヒゲナガハナバチ、ビロウドツリアブ、ムツボシヒラタアブ、コヒラタアブ、モンシロテフ等、恰も迎ひ得た春の女神を壽ぐが如くに亂舞して居るのである。

【寫眞】 飛び乍ら菜の花の蜜を吸つて居るビロウドツリアブ。

昆蟲は人間と同じものが好き (續き)

人間はいゝ香ひを好む。色々な花が芳香を放つのは決して人間の爲ではない。昆蟲を引き寄せて甘い蜜を與へ花粉を媒介させる様に出來て居るのである。

人間は美しい色彩を好む。花の美しいのは人間が眺める爲に出來て居るのではない。これが爲に多くの昆蟲はひきつけられるのである。

人間の中には煙草の好きな者が甚だ多い。然し昆蟲は大嫌だ。その煙に會へば忽ち命が危くなる。けれども中には葉卷や紙卷を食ふタバコシバムシの様な變り者も居る。若し我々が彼等が食ふ量に比例しただけの量を食べたら、先づ生きては居られない。バット三本で命を落す者もある位だから。



畑の一隅に積み上げられ枯草、藁等も昆蟲の好棲息場所である。その中は常に暖いので秋から冬にかけてはゴミムシ、コホロギ等様々な昆蟲が霜を避けて隠れて居る。又有名な害蟲ズムシは冬の間を稲の莖中に潜んで過し、翌春羽化して苗代に卵を産むのである。従て此の様な隠れ家をつき止めることは應用昆蟲學上から云つても重要な事である。

【寫眞】 積上げられた枯草

唯一匹の蟬を追ひ廻すこと一週間

臺灣へ行つて未だ日の浅い或る日の事、假寓して居た家へは一寸採集に行つて來ると云つて私と妻と二人、竹崎(嘉義郡)から三里程離れた大坑山と云ふ山へ行つた、(此の山には分教場もあり、住家も可成りあるので、色々便宜がいゝ上に、昆蟲も豊富なのでいつも此處を採集地として居た)その時間きなれない蟬の聲がするのでよく見ると小さな可愛らしい姿が認められ、どうやらツマガゴゼミらしいので何とかして採りたいものと苦心したが、季の木の枝先に止るので中々採れず、どうしても手に入れなければ歸らぬと分教場へ泊り込んで頑張ること七日、遂に捕獲して引き揚げたのであつた。歸つて見ると一同心配の最中で、若しや道を間違つて遭難したのではないだらうかと、方々の駐在所へ電話をかけるやら、搜索隊を出すと云ふ相談の眞最中であつた。その蟬はタイワンツマガゴゼミで、今でも標本を見る度に思ひ出す。



地面に深さ一尺位の穴を掘つて置くと夜の間に歩く昆蟲が澤山に落ち込んで居る。ゴミムシやヲサムシ類が多いがコホロギも澤山採れる。穴の中に西瓜の皮等を入れて置くと更に面白い。此の方法の大仕掛なものを害蟲驅除に應用することがある。北海道や臺灣でバツタが大発生をしたり、南洋の方から空を蔽ふて飛んで来る飛蝗が降りた場合、大急ぎで塹壕を掘つてその中へ落ち込んだものを焼き殺してしまふのである。

〔寫眞〕 庭の一隅に設けた落し穴。

朝鮮人と間違へられた話

(その一) 斗六の製糖會社に居るO氏の訪問を兼ねて、妻と一緒に竹崎から約五里の路を七つ道具肩に採集に出掛けた。その邊は田舎のことゝて採集家の姿は始めてらしく、後でO氏に聞けば不逞鮮人だと思つて臺灣人の巡査が尾行して居て、O氏から聞かされて退散したとの事だつた。臺灣人が不逞鮮人と見る位だから餘程日本人離れがして居たに違ひない。

(その二) 數年前岐阜のN氏と採集姿甲斐々々しく彦根の城下を歩いて居ると、朝鮮人だ朝鮮人だと子供達がぞろ／＼あとをついて來るので、ふと隣のN氏を見ると白服にズボンの先を靴下の中に入れて脊を少しく曲げて歩いて居るので、これでは止むを得ないとあきらめた事があつた。



腐つた肉ばかりを食物として居る昆蟲が澤山ある。シデムシ、ハネカクシ、エンママシ、食肉性のコガネムシ類等。

廣口の硝子罎或は不要の空き罐の口が地面と平らになる様に埋めてその中に蛇、蛙、魚等の臭くなつた屍體、又は肉等を容れて置くと、是等の蟲が翌日驚く程澤山にはいつて居る。平地、畑、林間、山地等に依て獲物も幾分違ふ。

中の昆蟲は一旦清水の中に投じて洗つてから熱湯をかけて殺す。此の類は腐敗し易いからそれを防ぐ爲に酒精とフォルマリンを半々に混ぜた液に一時間程漬けてから標本にするがよい。此の方法はカブトムシやクハガタムシの様なものにも用ひて結果がよいものである。

【寫眞】
(上) 廣口罎 (下) 地面に埋めた罎



臺所の残り物を庭の一隅に積み重ねて置くと、やがて色々な昆虫が集つて来る。コウカアブやキンバへは別としてハネカクシ、ヒラタシデムシ等澤山の種類が獲られる。これは不汚で吸蟲管で吸ふことが出来ないから捕蟲ピンセットで一匹宛捕獲するのである。

【寫眞】 芥の中から蟲を捕る。

採集旅行の失敗

或る時自轉車の荷臺に採集籠をしぼりつけて山から飛ばして來ると、途中で毒管が躍つた爲コルクが抜けて折角捕つた珍蟲が殆ど飛び出して泣くに泣かれぬ思ひをしたことがあつた。これは京都貴船から歸る時の出來事。その以前臺灣でも同じ様な失敗をやつた事があつた。草山と云ふ温泉は臺北から程遠からぬ處の山地にあるが、自轉車で行くに歸りは下りなので卅分もあれば歸れるから、いつも自轉車を利用して居たが、うっかり籠を荷物臺に縛り附けて歸つてから毒管をあげて見ると、蛾の類は皆背中が赤禿になつて居た。これは或る人の實話だが、山の中で四つ折の捕蟲網の枠がこはれてしまつて寶の山に入り乍ら手を空うして歸つたと云ふ。餘り便利に出來たものは構造が弱い缺點がある。これも或る人の經驗談。此の人は小蛾を専門に研究して居るので、専用の展翅板に澤山の獲物を展翅して置いた處、一夜の内に蟻に體だけ食はれてしまつた。それに似た話。私は或る日臺灣の竹崎(阿里山鐵道の登り口)で珍らしい蟬を採つて展翅して置いた處、ワモンゴキブリに體だけ食はれてしまつた。



4 食肉性昆蟲の採集

路傍に打ち捨てられた動物の屍體、糞等々は色々珍しい昆蟲が集つて居るものである。嘔吐を催す様な悪臭も彼等にとつては蒲焼にも等しいものである。臭氣紛々たる時代にはシデムシ、エンマムシ、ハネカクシ等が集つて來るが、干乾びて來ると、カツヲブシムシがやつて來る。一番手軽に試みやうと思へば魚屋から大きな魚の頭を貰つて來て棄て、置くことである。

牛馬の糞に集るコガネムシ科の甲蟲は非常に形が面白いので全國に澤山のファンを持つて居る山地を旅行して是等のものを發見したならば少々辛棒して掻き廻して見るがいゝ。センテコガネの類を初めとしてマグソコガネ、一本の長い角を持つたツノコガネ等が現はれ出し、地面に於いて居る穴を掘り進んで行くと、五本の角を持つたゴホンダイコクや、犀の様な形をしたダイコココガネ、コグダイコク等はいつて居る。

臺灣や滿洲では糞球を轉すスカラベの類が面白い習性を見せて呉れる。兎に角糞蟲は汚い奴乍ら興味深い昆蟲である。

【寫眞】 鼠の死骸を食ふクロシデムシ。



41 小 川

田畑の間を流れる小川にはカハトンボ、ハグロトンボ等陽光に四翅を輝かせ、暖かな岸にはオホミヅスマシ、ミヅスマシの類が、或は右に、或は左にくるくると渦を巻き、アメンボやオホアメンボ等も其處此處に愉快さうな滑走を續けて居る。

川岸の叢にはカハゲラ、トビケラ等 川から生れた種々なる昆虫が憩つて居るものである。岸邊の柳には綺麗なヤナギハムシやヤナギルリハムシが獲られやう。

【寫眞】 水草に憩ふハグロトンボの雌雄。

○ 黄蝶一つ咲き残りたる鬼あざみ

石神井池畔の林中にて所見。

○ 秋深し軒端に集ふ足つるし

越冬せんとして暖かき場所を求むる足長蜂の出入り繁し。「足つるし」はアシナガバチの一名。



42 かはとんぼ

カハトンボは何處にでも普通に見られるものであるが、中々美しい種類で、橙赤色の翅を水に映して暖かに飛んで居る姿は一幅の繪である。

雌は翅が透明で、それと同じ形の雄をヤナギトンボと云ふ。これは別種にして居る學者もあるけれども同じ種類である。

【寫眞】 河骨の葉に憩ふカハトンボ。

水面に止つて居るカハトンボ類は中々採集し難いものである。どうしても一旦飛び立たせてから掬はなければ網を濡らしたり、標本を台無しにしたりするものだ。

カハトンボの普通種は翅の前縁に不透明の部分があるが紀州方面に産するものに全く透明のものがある。ヤナギトンボとカハトンボの中間に来る型であらうと思ふ。



43 うちはやんま

尾の先に圓いうちはをつけた蜻蛉。棒の先に幾分尾を擧げ氣味にして止つて居る姿は如何にも輕快さうで期待中の八八式輕爆機を思はせるものがある。

探らうとして近づけば既に飛び去り、程遠からぬ棒の先に止る。けれども前から廻れば何處を睨らんで居るのか、易々とつかまへられる。うちはの大きいのは雄、小さいのは雌。臺灣には此の種と他にクロウチハヤンマ、タイワンウチハヤンマの三種が居る。

【寫眞】 トマト畑の竹に止つたウチハヤンマ。

標本の害蟲

標本を食ふ蟲がある。防蟲劑が無くなつた標本は餘程注意しないと忽ち食ひ荒されるから注意が肝要である。最も甚だしく加害するものはヒメマルカツラブシムシの幼蟲で、これにかゝつてたまらない。褐色の毛の生えた六ミリ位の蟲がその正體である。成蟲は體長三ミリ位の圓い甲蟲で、好んでアスター等の花に集るものであるから、その様なものは捕殺するが良い。標本箱の下の方に褐色の粉が積るのはコナチャタテの仕業である。此の方は蟲體の内部を食ふので未だ始末がよい。ホソカタムシの一種が非常な加害をすることを最近發見した。今迄にやられたのは紙包みの蛾だけだが、成蟲がやるのである。



此の蜻蛉はどこにも居る普通のものではないが、東京附近では石神井、善福寺、井の頭等に多い。雄の中後兩脛節が白い團扇状に擴がつて居るのが特徴で、ピョン／＼と躍る様な飛び方をする。春から初夏にかけて見ることが出来る。

【寫眞】 ゲンバイイトンボの交尾の姿勢。

何處にも普通に居るヒメイトンボは個體に依て體色の變化が著しい。普通は體が黒色で青色のバンドのあるものが多いが、尾端の赤色のもの、總體に黄色、橙色、赤等がある。

體の眞赤なアカイトンボは琉球や臺灣に産し、熱帶的のものであるが、石神井三寶寺池には甚だ多い。

標本の害蟲 (續き)

體長五ミリ位、栗色の甲蟲でヘウホンムシと云ふがある。觸角の長い天牛に似た小さな蟲だが、これは餘り昆蟲にはつかないで、蟹の乾燥標本を盛に害するものである。十一月頃電燈下に成蟲を獲ることが出来る。以上は主な害蟲で、是等を豫防するには充分にナフタリンの様な防蟲劑を入れて置かなければならない。次にまだ生の内に害する蟻やゴキブリ(特にワモンゴキブリ)がある。是等は臺灣で特にひどいギヤングであるから、展翅中の昆蟲は充分注意しなければならない。



綺麗に澄んだ秋空にアキアカネが群飛して居り、トマト畑の竹の先には一本残らず止つて居る。家の前に撒いた水溜りには尾つなかりが幾組もやつて来て卵を産んで居る。

アキアカネは十二月近くまで元気で飛び廻つて居る。冬を越すヲツネトンボは別として蜻蛉の内で一番遅くまで見られる種類である。

〔寫眞〕

竿の先に止らうとするアキアカネ。

〔ナツアカネとアキアカネ〕

此の兩種は非常によく似て居るが胸の横を見ると、ナツアカネは三本の黒い條が長く走つて居るのにアキアカネの方は中央の條だけ中途で終つて居る。

一般にアカネの類は同種であり乍ら夏出るものと秋出るものと二つの系統があつて、夏のは色が淡く、黄色味を帯びて居るのに反し、秋のものは赤味が強い。

最も普通の例——アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、キトンボ等。



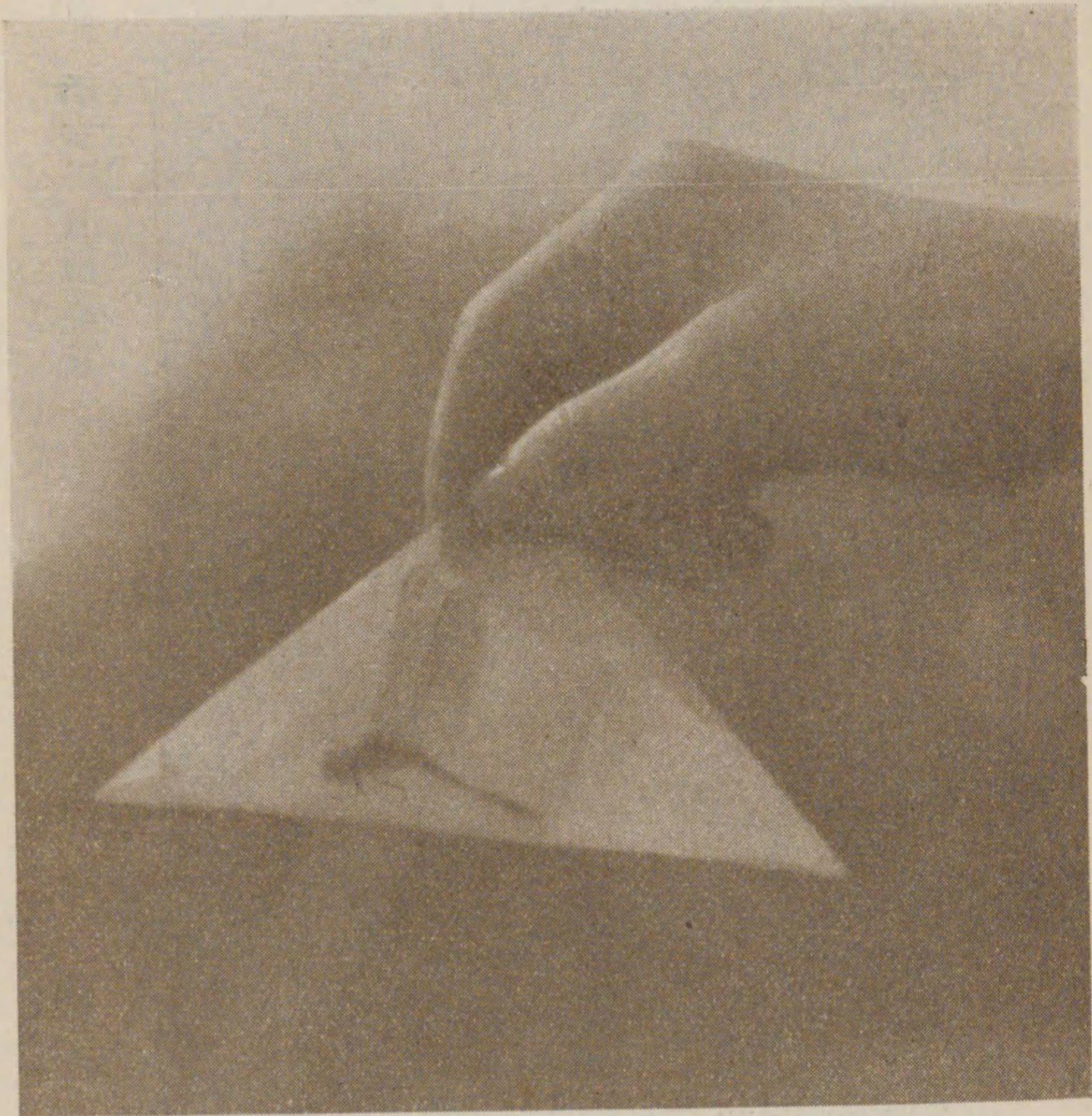
46 捕った蜻蛉

蜻蛉は生きたまゝ三角紙包みとしてそのまま持ち歸る。殺してしまふとすぐに色が變つたり腐つたりするので良くない。三日間位は此のまゝで死なないから長くない旅行ならば生きたまゝ持ち歸へられる。

【寫眞】 三角紙に包んだアキアカネ。

竹 蜻 蛉

「トンボ」とは飛ん棒から來た名前ださうで、棒が飛ぶ様に見えるからであらう。玩具の竹蜻蛉は千八百年も前に日本人が發明したもので、紀の國屋文左衛門に依つて外國へ輸出されたが、明治初年に絲を巻いて引くと翅だけ飛んでゆくヘリコプター (Helicopter) に形をかへて逆輸入されて今でも淺草あたりで時々見られるが、汽船のスクリューや飛行機のプロペラーが日本人の發明した竹蜻蛉に源を發して居るのは面白いことである。



蜻蛉の腹部やナフシの體は後で折れ易くなるので、それを防ぐ爲に禾本科植物の花梗を挿して標本にする。秋になると野原に色々な禾本科植物が穂を出すから、その充分熟したものを澤山採つて置いて用ひる。ヤンマの様に大きなものから、イトトンボの様に細いもの迄あるから色々な太さのものを準備するがいゝ。

【寫眞】 チカラグサ、エノコログサ、ススキ等の花梗。

蟬

- み山吹くかぜのひびきになりけりこずゑにならふ蝸のこゑ 藤 原 定 家
- 蝸の鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける 古 今 集
- 夕影に。來鳴く。蝸甚くも。日毎に鳴けど。飽かぬ聲かも。 萬 葉 集
- 黙もあらむ。時も來鳴かむ。蝸の物思ふ時に。鳴きつつもとな。 同
- 空蟬のからは木毎に止むれど、魂の行方を見ぬぞ悲しき。 同
- 蟬の翅一重に薄き夏衣馴れは紕りなん物にはあらぬ 躬 恒



48 蜻蛉の標本作り方 (その一)

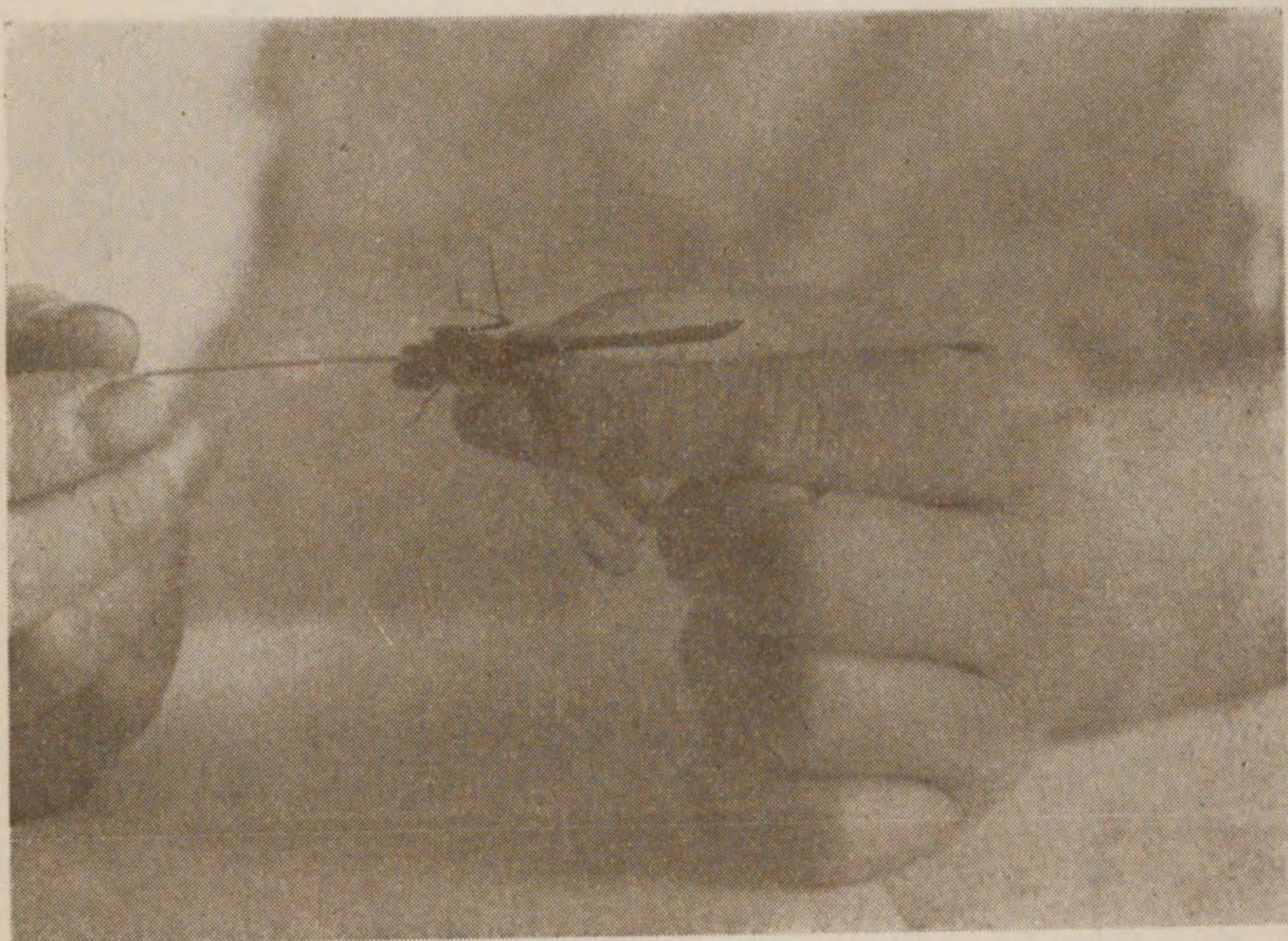
禾本科植物の花梗（今後蕊と呼ぶ）の先を斜めに切り、蜻蛉の胸から腹部へ挿し込む。
左手の母指で蜻蛉の頭を自分の右手に来る様に持ち、右手に蕊を持つて靜かに挿し込むのである。

ヤンマの類では時々色を保存する爲太い紙振りを黄色く塗つて挿し込むことがある。此の場合には腹部を切開して内臓を出し、その處から胸へ挿し込み片方を腹中へ收めて切り口を合せるのである。黄色いバンドのある種類は中々綺麗に出来る。

【寫眞】 莖を挿し込んで居る處。

名稱の調べ方

初めて捕つた昆蟲が何であるかを調べやうとして本をあけても、初めての人には中々どれに當るか判らないことが多い、殊に擴大した圖や色の着いて居ないものは猶更である。それで、先づ大體の形を見て圖鑑を開き、カミキリならば甲蟲の部、形が細かいか、太いか、觸角が長いかどうか、背面の斑紋等段々に範圍を狭くして似たものがあつたら記載と合せて行き、最後に寸法を測つて見るのである。然し大きさは大體の標準で、必しも標準にならない事が多い。



49 蜻蛉の標本作り方 (その二)

蕊が腹の先までとどいたならば、

- 1 頭の處で蕊を鋏ではさんで
- 2 頭の長さだけ引き出し
- 3 頭の處で切る
- 4 残った蕊をピンセットで押し込むと、すつかり體中に納まるから外部からは全く見えなくなる。

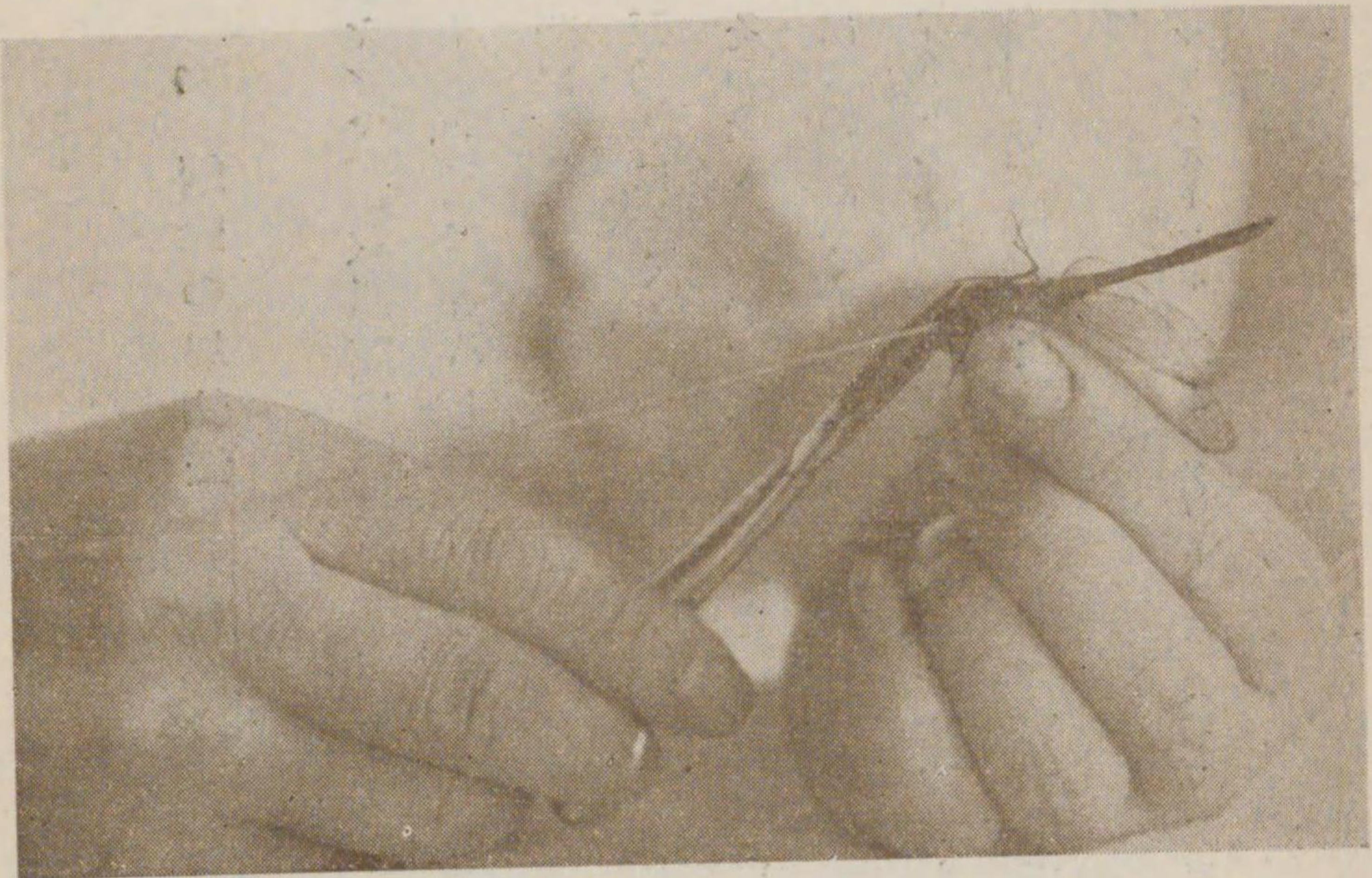
針は胸部の中央に刺し、中の蕊諸共貫くのである。

【寫眞】

(上) 蕊を挿す (下) 餘った蕊を切り捨てる。

鑑定依頼

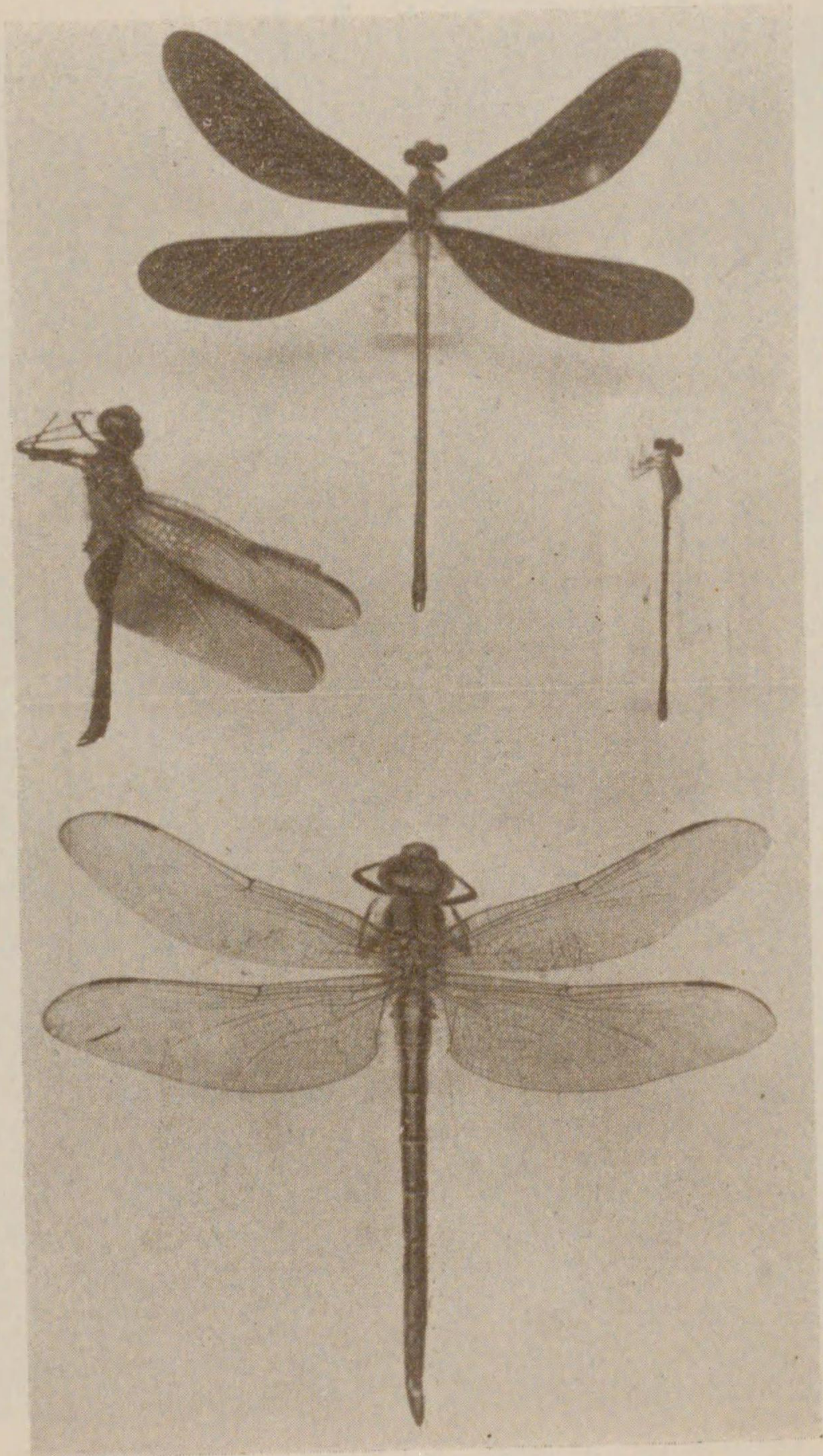
標本の鑑定を依頼するには、同じ種類を自分の方に控へに置き、同じ番號を附して一方を送るのである。依頼を受けた方では番號に依つて判つたものを通知して来る。著者の場合では判らないものは夫々専門家に廻して調べて貰ふことにして居る。中には名前を附けて標本を返へせと云つて来る人もあるがその様な申出では應じられない。又返信料は必ず依頼状に同封すべきである。



- 1 ヤンマ、蜻蛉の類は後翅の前縁が左右一直線になる様に位置をきめる。
- 2 イトトンボ、カハトンボ等では後翅の前縁が一直線では形が悪いから、少しく「へ」の字形になる様にする。
- 3 三角紙に長く包んで置いて固くなつた標本は、蝶の様に湿して展翅することが出来るが、そのまゝの形で寫真に見る様に横刺しにしてもいい。その場合には右向きか左向きか一方にきめて置く方がよい。
- 4 イトトンボの類は研究用として液漬標本も必要である。又此の類の小形のものは無理に針を刺さずに臺紙に貼る方がいい。寫真はセルロイド板に貼つたもの。

【寫真】

(上) アヲハダトンボ (下) アヲトンボ (右) アカイトトンボ (左) キトンボ



51 池

静かな池の面をじつと見て居ると、小さなミヅカメムシや、細長いイトアメンボが弱々と歩いて来る。

時々底の方から色々なゲンゴロウやガムシが上つて来ては腹の先に空気の泡をつけて潜つて行く、マツモムシが逆さになつて泳いで居る。

池には色々な水棲昆虫が棲んで居る。又蜻蛉の幼虫も多い。藻の間、岸邊の草の根等を掘ふと是等の昆虫が澤山網にはいつて来る。

【寫眞】 アメンボと睡蓮 石神井三寶寺池にて (小林秀太郎君撮影)

○ 夜もすがらまがふ螢のひかりさへわかればをしき東雲のそら 藤原定家



波紋を描き乍ら滑走するアメンボは静寂さに一抹の生氣を與へるものである。

生れたてから親になる迄水面を家とする浮草の様な生活をして居る此の昆蟲は、我々と大した交渉も持たないが、靜かに水の面を滑つて居る姿をじつと眺めて居ると如何にも愉快な氣持になる。

緩かな流れや古い池に居る肢の長いオホアメンボや、その他ヒメアメンボ、アメンボ等最も普通の種類で山間の、溪流には體の圓い翅の無いシマアメンボが泳いで居る。

此の類に海に棲むウミアメンボの類がある。沖合遙かの海面を滑走してプランクトン等を食として居るものである。

【寫眞】 池の面を泳ぐアメンボ。

(小林秀太郎君撮影)

アメンボ類は中々捕り難いものである。掬ふ事は絶對に駄目で、水網で上からバサツと勢よくかぶせて、暫くそのままにして居ると中で弱るから、然る後網を上向きに掬ひ上げれば良い。

標本にする時には展翅板で肢を伸す方がいゝ。前肢はそのままでいゝから、中後兩肢をX形になる様にするのである。小形のものには粘着すること申すまでもない。



水棲昆蟲は水面に棲むミズスマシやアメンボの様なものから、水中を泳ぐマツモムシ、コマツモムシ等、或は水底に居ては時々呼吸しに浮んで来るゲンゴロウ、コミヅムシ等場所に依て一様でないし、又藻に止つて居るものも澤山あるから、色々な處を掬つて見なければならぬ。水網にはいつた蟲は網附捕蟲ピンセットでつかまへて壘に移すのである。直ちに毒管に入れな

いで一度生かして持ち歸るか或は酒精管に浸けて後標本にするが良い。

水棲昆蟲は冬でも澤山に採集が出来る。

【寫眞】
水棲昆蟲の採集。三寶寺池にて

藥になる昆蟲
昆蟲趣味の會で全國から募集したもの。赤蜻蛉（アキアカネ？）扁桃腺炎、百日咳、焙烙で沙り、粉末として咽喉につける。腫物、甘草と共に煎じて飲む、イナゴ 陣痛強烈なる時、煎用、血の道、煮て食ふ。イボタの蟲（イボタガの幼蟲）肺病及び胃病、黒焼を服用、ウヂ（蠅の幼蟲）横根、生でつける。蟲の起きた時、黒焼にして飲む。
カヒコ 中風、オシヤリとなつたものを粉末として煎用。



近所に水棲昆蟲の豊富な大きな池か沼があつたならば、此の様な形のボートそなを具へて置くこと便利である。これは著者の手製品で、全長約四米突、兩側に補助浮箱フカ箱を取り付けてあるので、上で立つてもどうしても絶対安全である。下の寫眞は石神井三寶寺池で採集中の處、上は石神井池を帆走中の光景で、池が広いから目的場所迄は帆走するのである。使用後は直ちに引揚げて臺車に載せ構内に運んで來ることにして居る。

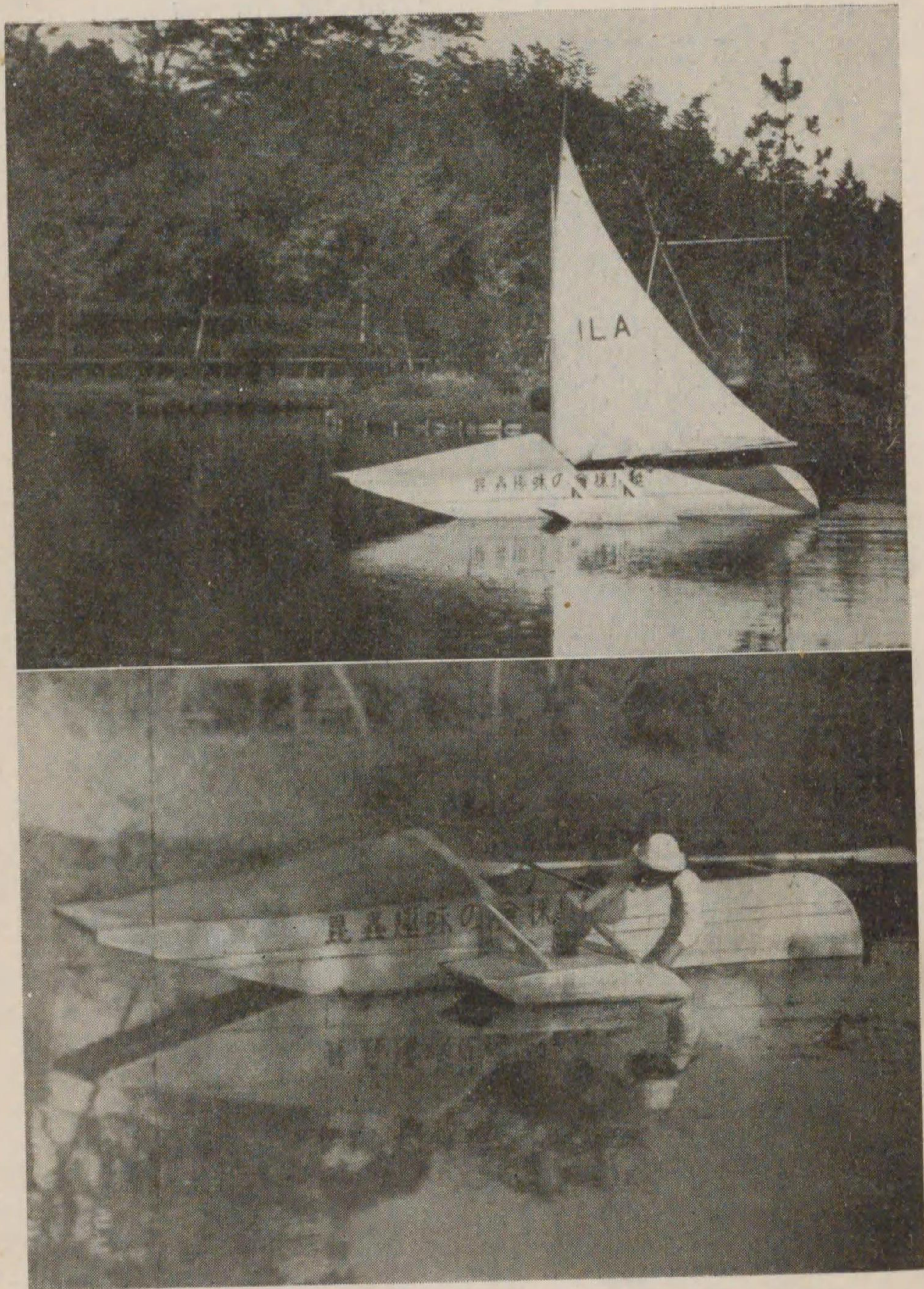
藥になる昆蟲 (續き)

カマキリ 釘を刺した時 飯粒で練つて傷口に貼る。脚氣 黒焼を飯粒で練つて足の裏に貼る。瘰癧 飯粒で練つてつける。

コホロギ チブス 五六匹をアルコールに浸けそれをガーゼで二重に包み、絞り汁をカプセルに入れて飲む。

蟬殻 小兒の疳、耳の遠い人、夜啼 ヌケガラを煎用。瘡類 ヌケガラを種油につけて塗る。耳だ

れ 胡麻の油につけて置いてその汁をつける。
蝶 傷 クロアゲハを飯粒で練つて患部に貼る。
ナンキンムシ 眼病 生血を局所に數回つける。



金魚鉢或は廣口の硝子壺に藻を入れて水棲昆蟲を放して置く。これは習性を観察するばかりでなく中々面白い娯樂にもなる。夏など室内の飾りとして熱帯魚等の及びもつかない趣きがある。水棲昆蟲はどれも友食ひしたがる性質があるから、餘り多數は放せない。成蟲の飼育はさほど難かしいことはなく、ゲンゴロウ等は半年以上も餌をやらすとも生きて居るが、水を呼吸して居る幼蟲は時々水を換へてやらないと直ちに死んでしまふ。

薬になる昆蟲 (續き)

蜂蜜 唇の荒、口中のたぐれ。||筆で塗る。鷺口瘡||重曹を加へて稀め、ガーゼに浸して患所を拭ふ。
蠅 眼球の傷害に頭部三つ位に人乳四五滴を加へて潰したる液を一日二三回患部に滴下する。
蝨 とげをさした時飯粒で練つて患部に貼る。
孫太郎蟲 (ヘビトンの幼蟲) 子供の疳の薬。
ミノムシ 心臓病||茶園に居るものを捕り、焙りて粉末として服用。
ヒメアメンボ 解熱劑||干して粉末として用ひる。チブスに特效ありと云ふ。
二三のものを除いては本當にきくか何うかは保證の限りでないが、この様な薬を用ひて居る地方が日本の何所かにあることを知つて頂きたい。



櫟、柳等の皮から出る樹液は或る種の昆蟲の好物であつて、夏日林の中を見廻ると種々雑多のものが頭を突き合せて仲よく汗を吸つて居るのを見るであらう。

その最も多いものは甲蟲であつてカナブン、カブトムシ、クハガタムシ、コメツキムシ、ハナムグリ等は常に見る處である。蝶の内ではゴマダラテフ、オホムラサキ、キマダラヒカゲ、ルリタテハ、ヒラドシテフ等が見られ、ベツカフ、ハナアブ、ハチモドキハナアブ等も樹液に多い。

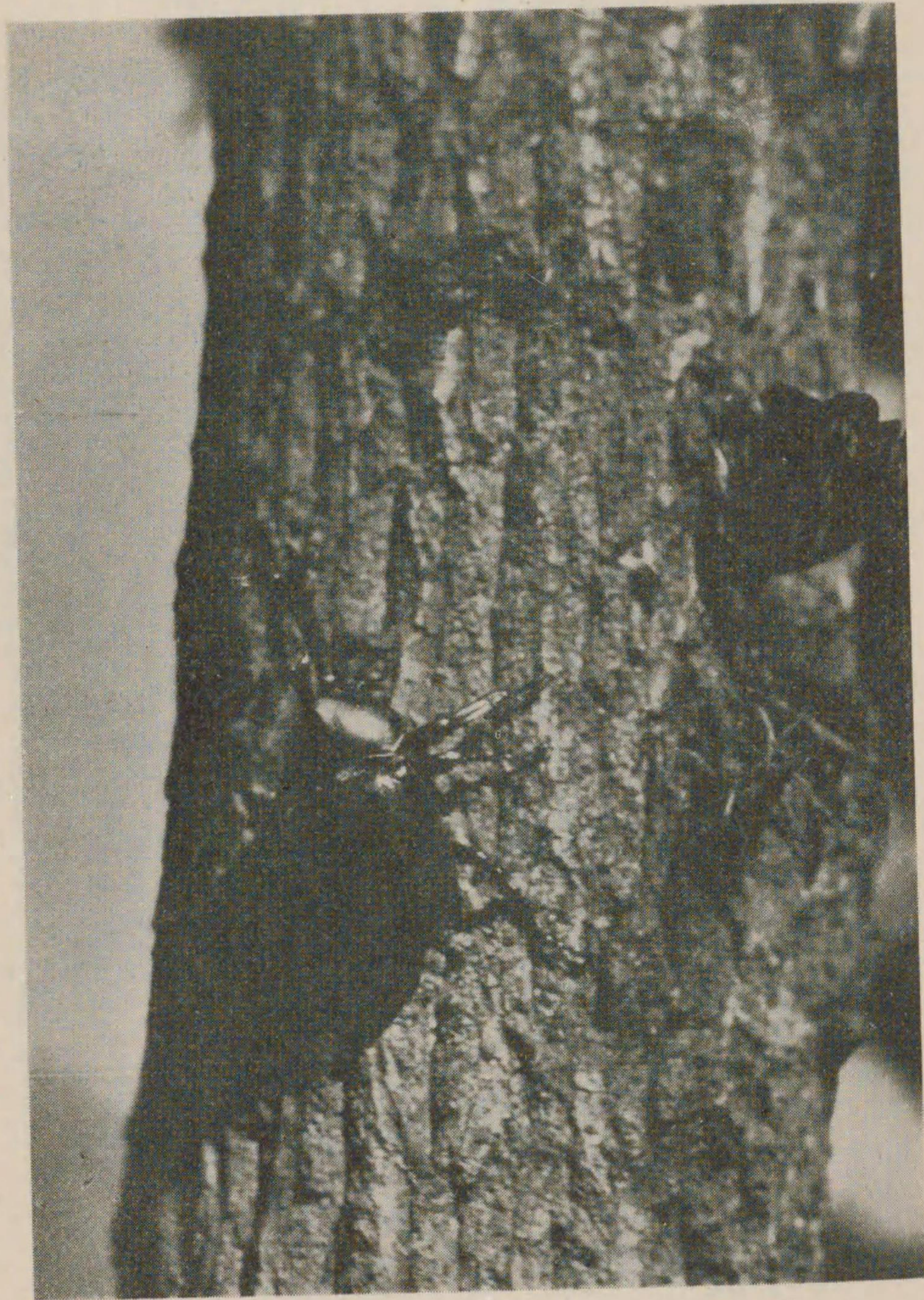
櫟の大木を大きな石等で打つと、上の方に止つて居たカブト、クハガタの類がバラ／＼と落ちて来るものである。

秋になつて是等の蟲が姿を消す頃は樹液も出なくなるのが面白い。

【寫眞】

櫟の樹液に集るゴマダラテフ、カブトムシ、蠅、サビキコリ等。

樹液は自然に流れるのであるが、出さうな木に傷をつけて置いても日ならずして蟲が集つて来る。



或る夏の朝カメラを下げて家の前へ出て見ると一本の櫟の幹に昨夜來たらしいクロカナブンが朝日の昇つて居るのも知らぬげに餘念なく頭を突き込んで流れ出る汁を嘗めて居る。早起のオホキンバへやアシナガヤセバへなどが、臆病らしく飛んでは止り、又戻つては汁を吸つて居る。未だ居た。餘りに樹の皮に似た色をして居るので氣附かなかつたが、サビキコリも仲間入りして居る。

【寫眞】

(右上) シマバへ (左) クロカナブン (その右) 蠅の一種 (その下) サビキコリ 其他大勢はピントを外れて居るので見えない。

蜂蜜採集

人工の樹液として蜂蜜採集と云ふ方法がある。黒砂糖に酒を入れてドロ／＼に煮つめ、これを櫟の様な木の皮に刷毛で塗つて置くのである。夕方にこれを行ひ、懐中電燈をつけて巡回して採集するのである。集まるものは主に蛾である。これは夜間採集と同様に曇天の日が最適である。

又この方法を多雪が積つた時にやつても色々な蛾が採れる。冬の間落葉の下に潜んで居たものが、蜂蜜の香りに引かされて集まつて來るものゝ、寒さの爲に動けなくなつてしまふのである。



私は子供の頃よくノコギリクハガタを二匹捕つて来ては相撲を取らせたものだ。長い角で噛み合つては相手を引くりかへしてしまふ。

相手が起き上れなくて藻掻いて居る間に勝つた方は別に誇らしさうな様子もなくノソノソと這て行く。

此の類は中々鬪争性が強いものだ。色の赤い方が強いと云ふが私は未だそこまで調べて見たことはない。

【寫眞】

ノコギリクハガタが這ひ上つてゆく處。歩行中の肢の位置がよく判る。

(本州で採れるクハガタ類)

コクハガタ、スヂクハガタ、アカアシクハガタ、ヒラタクハガタ、ノコギリクハガタ、ミヤマクハガタ、ヒメクハガタ、オホクハガタ、ルリクハガタ、マダラクハガタ、ツヤハダクハガタ、チビクハガタ等。



眞夏に出て暑さに環をかけた様な鳴聲を立て、見るからに暑苦しい姿をして日本國中隅から隈まで無暗に澤山居る蟬はこれである。

蟬暑し松切らばやと思ふまで

こんなに迷惑がられた油蟬が昭和の今日滋賀縣の或る校庭で餘り鳴き立てゝ演説が聞えないと云ふので消防のホースで追ひ散らされてしまった。

【寫眞】 アブラゼミ

食用になる昆蟲

昆蟲趣味の會で全國から藥用食用の昆蟲を募集した處左の様なものが集つた。珍味に飽いたならばこれを試みるも變つてゐて面白からうし、來客にすゝめて度臆を抜くのも愉快であらう。エビやカニを食べることを考へれば、その親類筋の昆蟲だつて食べられない事はない。同じ親類にしてもクモやムカデは一寸手が出せまいが。

【直翅目】

イナゴ(コバネイナゴ、ハネナガイナゴ兩種) Ⅱ全國的。最も味の美なるものであるらしい。カマキリ、ヒゲナガササキリ、クサキリ、クビキリバツタ、エンマコホロギ(イナゴより少し軟かく脂が多い) オンブバツタ(シャウブの香がある)



60 蟬の捕り方

蟬は高い樹の上に止るので中々網では捕り難いが、トリモチで捕れば、わけなく採集出来る。翅についたトリモチは脱脂綿に揮發油をつけて三回程綿を取かへ乍ら拭ふ時は初め通りの綺麗な翅になる。此の時體について居る白い粉に揮發油がつかない様に注意を要する。白い粉は臘なので、揮發油に合ふととけてしまふのである。

【寫眞】 もち竿から蟬を取る處。

蟬を標本にする時、針は中胸背の後方、X字形隆起と稱する部分の少し前方に刺し、成るべく展翅して標本にする。教育用としては腹面を上にしたものと兩方作るが良い。

食用になる昆蟲 (續き)

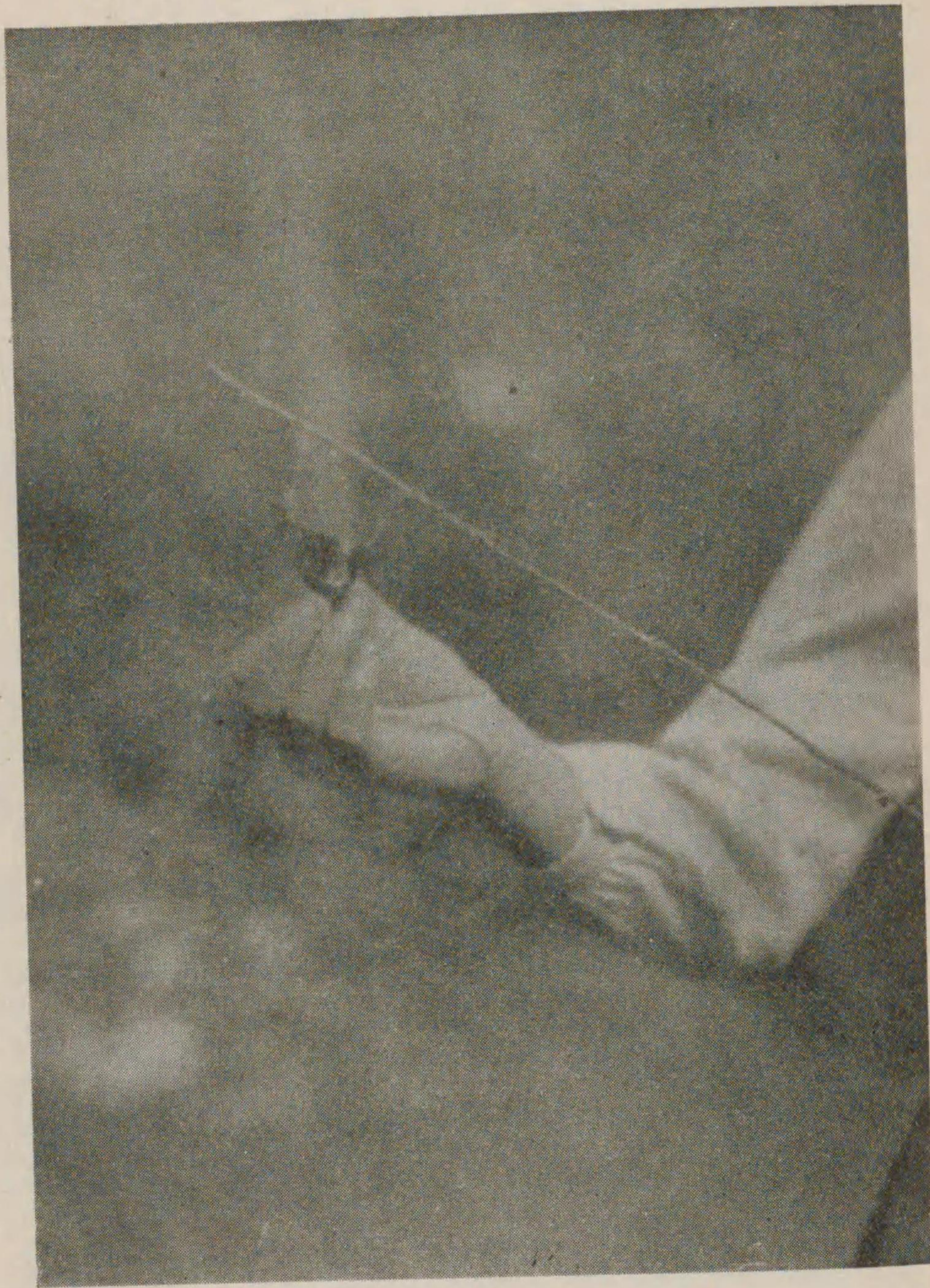
【蜻蛉目】

ヤゴ(仔蟲) 小魚と共に味噌煮にするか、又はエビと共に鹽で炒る。

【同翅目】 アブラゼミ、エゾゼミ 翅を取つて砂糖醬油で炒りつける。蟬の仔蟲 上等な支那料理に用ひられる。

【鞘翅目】 ガムシ 砂糖醬油で炒り或は串に刺してつけ焼にする。カミキリムシの幼蟲(鐵砲蟲) 串焼きにして砂糖醬油をつける。

【膜翅目】 蜂の子(主にスズメバチ科) 長野縣では罐詰にして賣つて居る。



ハリバへの類は種々の幼蟲又は稀に成蟲に寄生するものである。

或る日の朝家の附近を散歩して居ると、櫟の幹に一匹のカシハマイマイの幼蟲が無氣味な姿で止つて居る。標本にしようと思つて手を出さうとすると、一匹のハリバへ（ブランコヤドリバへと云ふ）がその廻りをぐる／＼這ひ廻つて居て、手を出しても逃げないので、これは卵を産むに違ひないと思つて、よく見て居ると、やがて頭の近くに近寄つて腹を下げると太い長い産卵管を突き出し、毛の根本に一つづゝ卵を産みつけた。

此の幼蟲をそつと持て歸ると、蠅はいつまでも飛び乍ら家までついて來たが、その内に氣がついたと見えて羽音高く逃げてしまつた。

蠅の卵は間も無く孵化して體內へ食ひ込み遂に寄主を殺してしまふ。蛆は日ならずして成長して土中に潜り込み、蛹化する。斯くして來年カシハマイマイ或はマイマイガ（ブランコケムシ）が現はれる頃蠅になつて卵を産むのである。石神井の森の中で、是等の毛蟲を調べて見た處八割位は寄生蠅の卵を産みつけられて居た。

【寫眞】 カシハマイマイの幼蟲に産卵中のブランコヤドリバへ。寄生蠅の類は分類上胸部に生えて居る剛毛が重要であるので、標本に作る際折れない様にしなければならぬ。



子供達に親しみの深い昆虫である。ヤンマ釣り、蟬捕り、バツタ捕り、此の三つは子供の夏の自然相手の遊戯である。トノサマバツタの飛ぶのを見ると筈に棒の柄をつけて夢中になつて追ひ廻して居る腕白坊主の姿を思ひ出す。

後肢を翅に摺りつけてカサ〜と鳴き、飛び立つて降りる時には急に翅の動かし方をかへてパツパツパツと云ふ。どちらも發音である。

トノサマバツタは時として大群を爲し、所謂飛蝗となつて農作物を襲ふことがある。

【寫眞】 今將に飛び立たんとするトノサマバツタ。

河原にだけ棲むカハラバツタは、體翅の色土砂の如く、止つて居るとわからないが、後翅が美しい藤色をして居るので飛び出すとすぐ目につく、然し降りれば又解らなくなる。八九月頃河原の砂上で捕ることが出来る。



翅の長いのをハネナガイナゴ、短かいものをコバネイナゴと云ふ。稲の害虫であるが、稲に限らず禾本科ならば色々なものを食つて居る。

イナゴを煮て食べるとうまい相だ。昆虫の内うちで最も多く人に食はれるのはこれである。秋になると乾物屋かんぶつやの店に山と積まれて都の人に御目見えするが、どうも餘り食欲かふつうをそゝる様な姿ではな
5。

【寫眞】 草に止つて居るコバネイナゴ。

イナゴ位の大きさの直翅目は内臓を取る方が美しい標本とすることが出来る。此の類は時として後で肢の色が赤くなることがあるものだ。フォルマリンの爲かとも思ふ。イナゴモドキ、ツマガロイナゴ等はイナゴに近い種類である。



神主さんの烏帽子の様な頭をして居るのでネギ様と云ふ。

肢の先を一緒に持つて居るとおじぎを繰返すのでコマツキバツタとも呼ばれる。

雄は體が細くて中々活潑で、飛ぶ時にキチ／＼と云ふ音を出すので、東京の子供はキチキチバツタと呼んで居る。中々速くてつかまへやうとすればキチ／＼と云ひ乍ら飛び去つてしまふ。

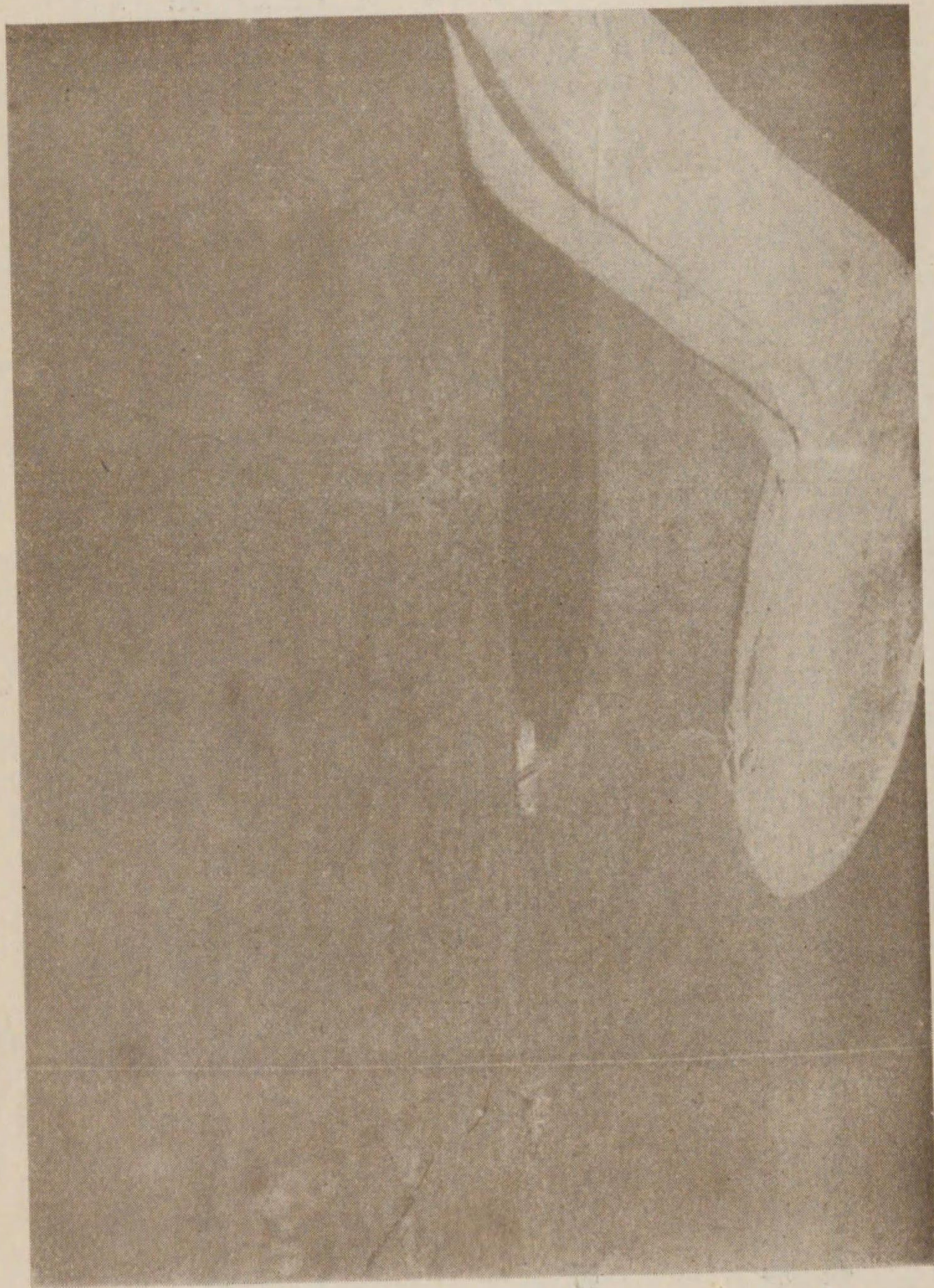
雌は雄の何倍もある様な形をして居て遅鈍だ。

【寫眞】 シヤウリヤウバツタの雌

バツタの類は夏の終り頃から秋にかけて原野に全盛である。多くは禾本科植物を食物として居るが、ミヤマフキバツタやタイワンオホバツタの様に雜草を食ふものもある。

畑の附近や雜草中に多いヒシバツタの背面は菱形をして居るが前胸背が伸びたもので、ハネナガヒシバツタやトゲヒシバツタになると、更に後方へ細長く伸びて居る。此の様な小形種は別に内臓を取らず、そのまま標本にしているのである。





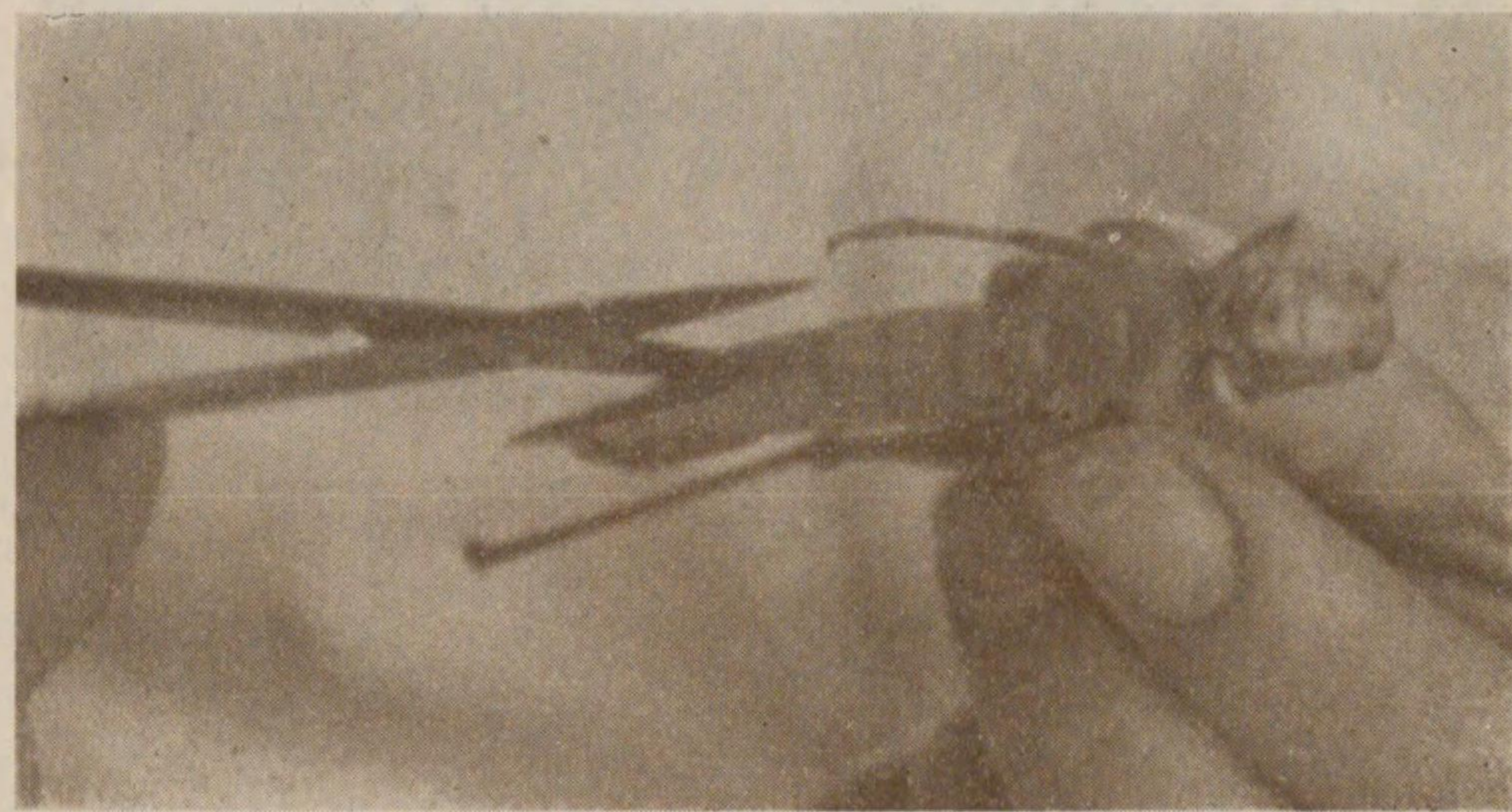
(129)

65 ばつたの捕り方

草原を飛んでは降り、飛んでは降りするバツタは中々捕り難いものである。これは止つた前の方を捕蟲網で素早くかぶせれば、大概捉へることが出来る。

【寫眞】 網をかぶせやうとする處。

(下圖) バツタの腹部を切開して標本を作る處。次頁へ。



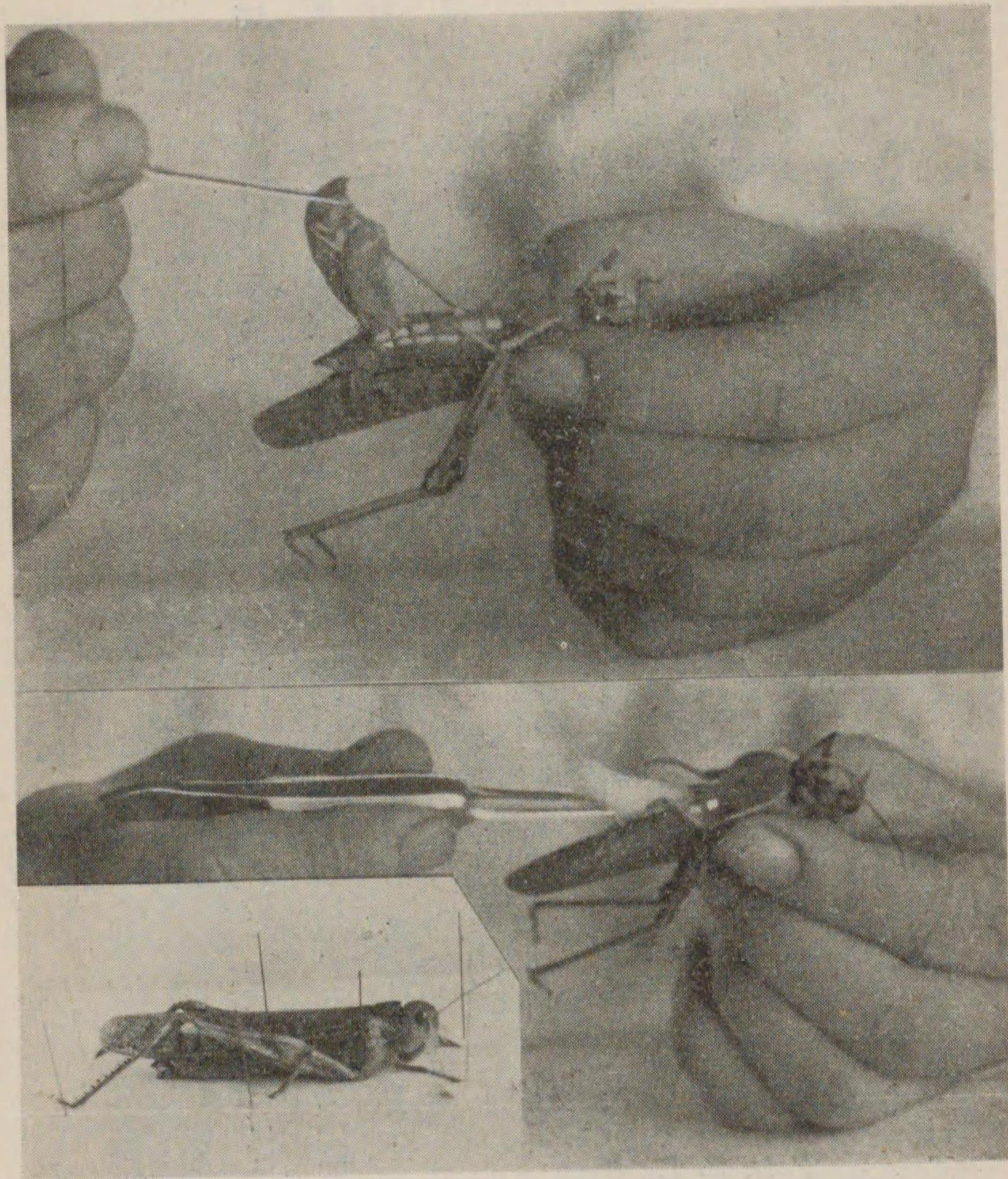
(130)

昆虫の内で此の類位厄介なものはない。それが爲にアマチュアで此の類を集めて居る人は誠に少ないが、作り方さへ上手にやれば中々見事な標本が出来から是非試みられたい。

直翅目の昆虫は何れも多量に内臓を有する爲腐敗して見る影も無くなるものである。それで、先づ内臓を除去するのであるが、その方法は寫眞に依つて、

- 1 腹部の最後から二番目の關節に鉗を入れて第一節附近まで切開し（二三〇頁参照）
- 2 細いピンセットで内臓を摘出し、
- 3 脱脂綿を腹部の大きさより少しく小さく丸めてフォルマリンをつけて腹部の中へ入れ、切り口をよく合せて置く。
- 4 整理板或は展脚板の上で脚部を整理して乾燥する。

キリギリス、カマキリ等は腹部の皮膚が軟いから破らない様に注意を要する。スズムシや小形のコホロギは切開しないで差支へない。マダラスズ、ヒシバツタ等の様に一層小さなものは臺紙に粘着するのである。

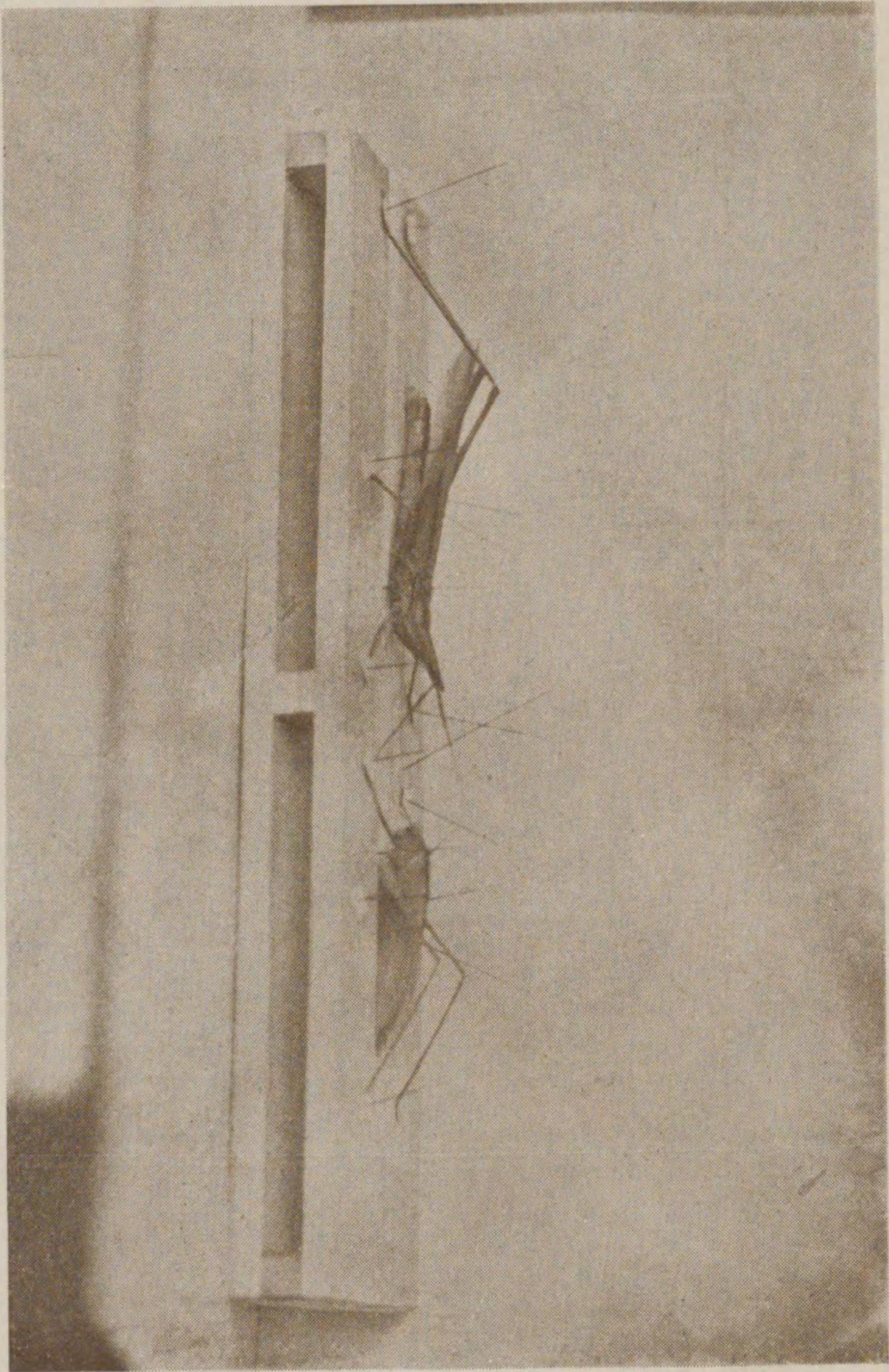


直翅目や鞘翅目の肢や觸角を整理する爲には針がよく刺さる様に軟かい材料で作つた乾燥板と云ふものがある、又展脚板を淺くした展脚板を作つてその溝中に針を刺し、表面の板上に肢を延して留針で固定するものもいゝ。前頁下の寫眞は乾燥板上を使用したもの。

〔寫眞〕 展脚板上のクダマキモドキ(右)とシヤウリヤウバツタ(左)

學名

生物の學名は屬名 (Genus) と種名 (species) から出來て居る。屬名は我々の姓、種名は名に當るもので通常屬名はギリシヤ語、種名はラテン語又はラテン語化した外國語で組立て、その次に命名者の姓を書き記すのである。たとへばニイニイゼミの學名 *Platypleura kamperi* (Fabricius) の屬名 *Platypleura* は扁たい側板(前胸の兩側が平たく突出して居る意味)、種名の *kamperi* は有名な旅行家で、博物學者の *Kaempfer* 氏の姓を記念としたもので、同氏が日本産の標本を歐洲に齎したのである。Fabricius は命名者、() をつけるのは最初命名した時と屬名が變更された事を意味するもので、發表當時は *Tettigonia* なる屬名が用ひられたのである。昔は一屬に澤山の種を含まして居つたのであるが、最近研究の進むに連れて多數の屬を創設して細かく分類する様になつた。屬名は差支へなき限り新しきものを用ひ、種名は最も古く命名せられたものを採用するのが通例である。



八月も末の頃になると、庭の芙蓉に淡紅の花が開く。

大きな緑色の葉の間から三つ四つ、白い蕊びらを見せて何物かを待ちわび顔に開いて居ると、イチモンジセセリやコアヲハナムグリがどこからともなく集まつて来る。

私は子供の頃芝公園の芙蓉が咲く頃になると、よく出掛けては蟲捕りをしたものであつた。芙蓉の花を見ると其の頃の事が思ひ出される。

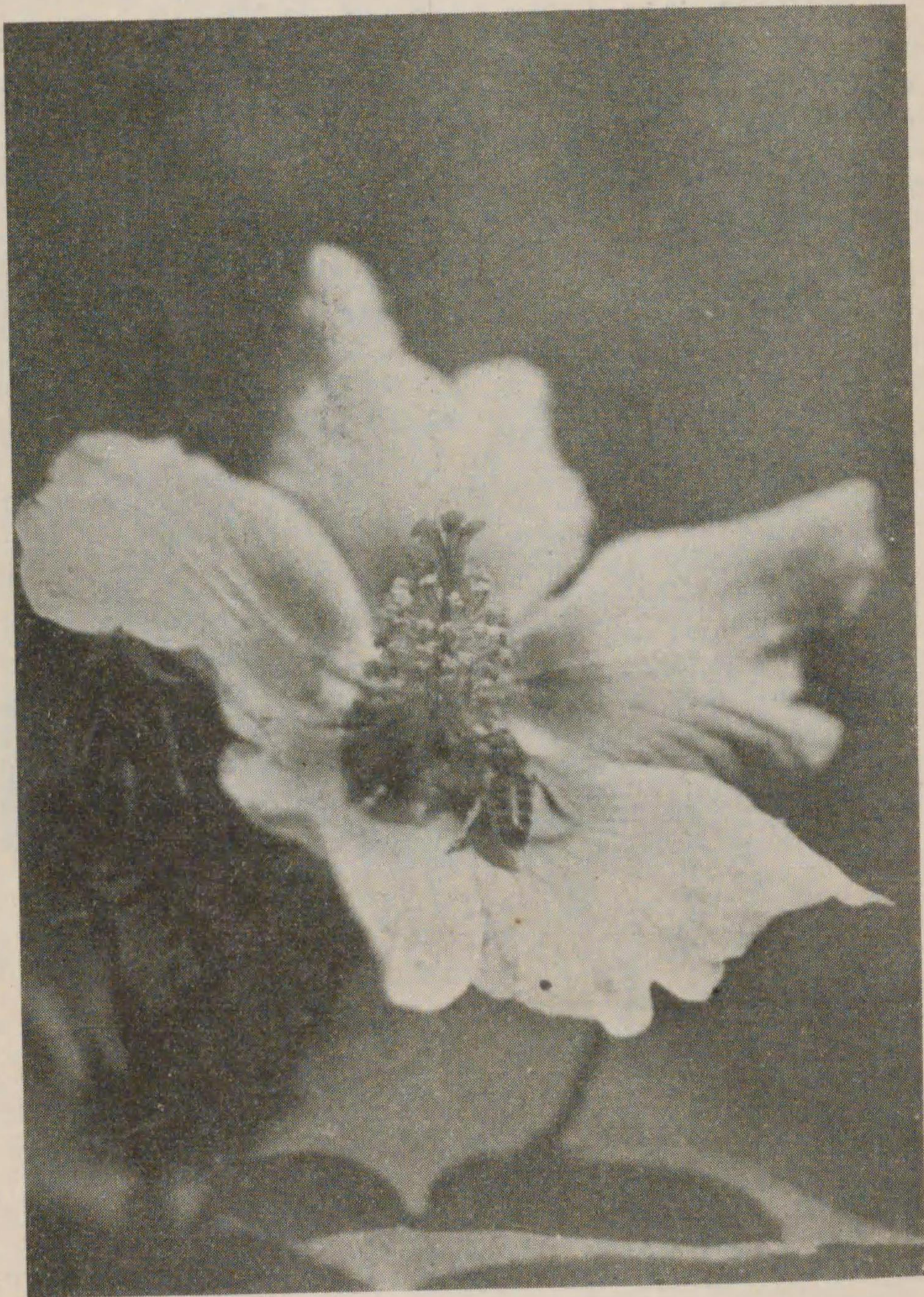
【寫眞】

芙蓉の花を訪れたミツバチ。飛んで来て止つた瞬間、未だ翅を動かして居る。

花に止つて居る蜂は網附捕蟲ピンセットで捕獲するのが最も良い。殊に花壇等ではうつかり網を使ふと花を台無しにするから氣をつけなければならない。蜂が蜜を吸つて居る時は容易に逃げないから、樂に捕ることが出来る。

採集に没頭し過ぎる勿れ

いくら滋養分でも過ぎれば害がある。昆蟲採集や研究は非常にいゝ事ではあるが、學業まで投げ捨てて没頭してはいけない。學業の餘暇に、活動寫眞や野球に行く程度でやつて頂きたいのである。將來専門に研究する決心ならば猶の事充分基礎の勉強が肝要である。蟲ばかり捕つて居るから成績が悪いと云はれぬ様、呉々も御願ひする。



69 網にはいつた蜂

蜂はうつかりすると刺されると御要心！
網にしたものは毒管をかぶせるのがいゝ。一般に蜂の類は青酸加里に弱いから見る間に死んでしまふ。

【寫眞】 網にはいつた蜂を毒管でふせる處。

學 名 (その二)

亞屬Ⅱ一つの屬を更に體の構造に依つて幾つかに分類することがある。別屬にする程特徴が顯著でない場合に亞屬 (Subgenus) として區別される。たとへばサクラコガネ、ドウガネ等は何れも *Anomala* 屬であるが前者を *Anomala* 後者を *Euchlora* と云ふ亞屬に分けてある。普通學名を書く場合亞屬名は書かないことが多いが、兩方を併記する時には亞屬を () の中に入れる。即ちサクラコガネ *Anomala* (*Anomala*) *daimiana* Harold ドウガネ *Anomala* (*Euchlora*) *cuprea* Hope と書べ。



70 亂獲採集

丈夫な網で草や木の葉を無暗に掬ふ時はその中に色々な昆虫がはいるものである。著者は斯うして珍しい昆虫を澤山に採集した。私の所蔵する小形の昆虫の大部分は斯うして集めたものである。

網にはいつたならば毒管で手早く受けるか吸蟲管で吸ひ込むもよく、最も便利なやり方は網の底をそのまま毒壘の中へ押し込んで蓋をしてしまふので、斯うやつて一二分もすれば中にはいつた全部が死んでしまふから、ゆつくり擴げて必要のものを吸蟲管で撰り取ればよいのである。然し此の時は未だ假死の状態にあるのであるから、三角紙に包んでそのまま再び毒壘に投じ、完全に殺さなければならぬ。

〔寫眞〕 亂獲採集。この方法をスウィーピング (Sweeping) と云ふ。



71 すけばはごろも

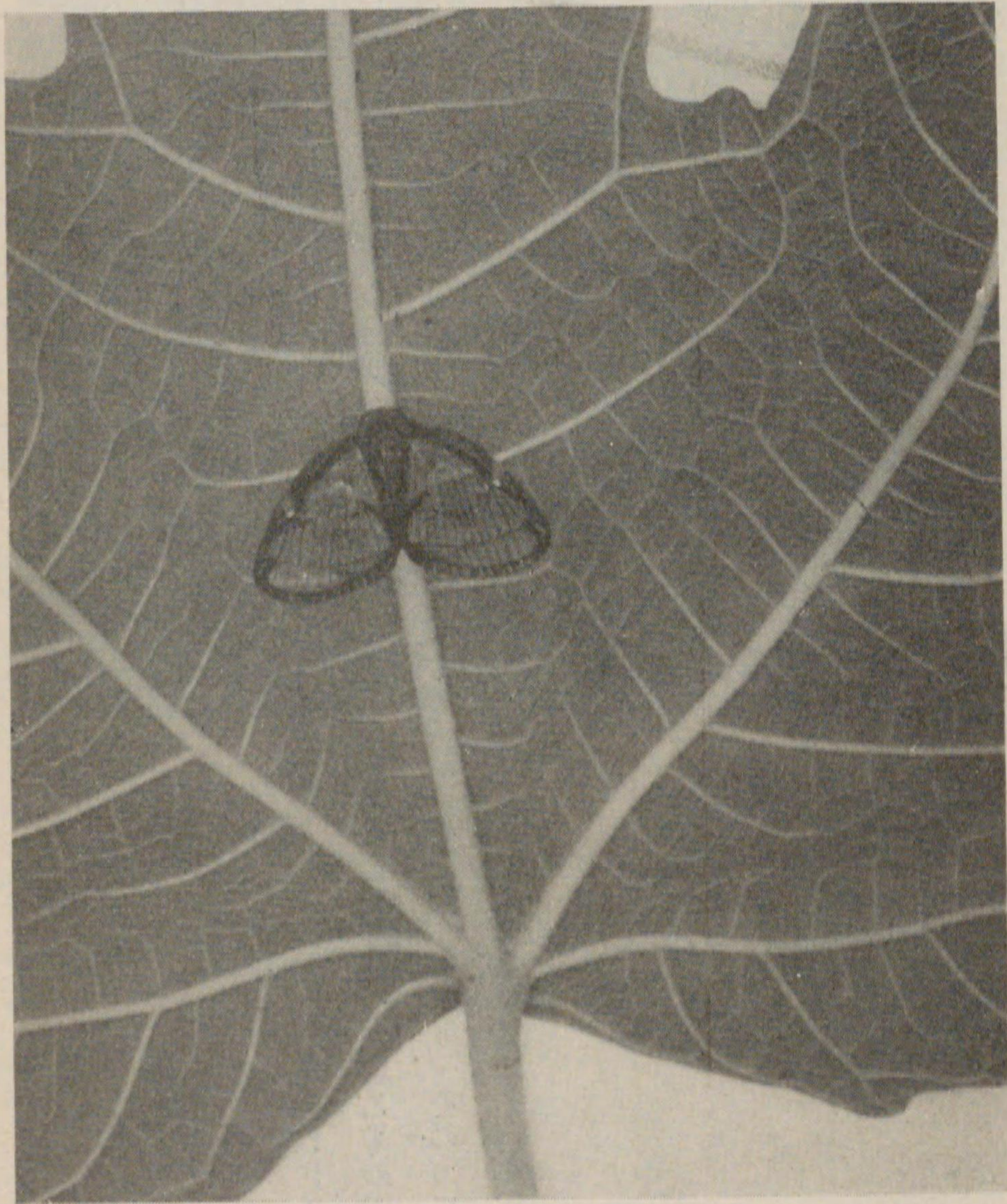
ウンカの種類である。八月半頃から発生し、種々な植物——特に桑、クサギ、カナムグラ等の莖に半ば群棲的に見られる。

幼蟲は體丸く尾端に白い長い毛を有し、常にこれを孔雀の尾の様に擴げて居る。

これに近いものに、總體暗褐色で前翅に二條の灰白帯のあるベツカフハゴロモ、これに似て、非常に小形のヒメベツカフハゴロモ、大形で色黒く横帯の不明瞭なアミガサハゴロモの三種が内地に産する。同じ様な場所に多い淡綠色のアヲバハゴロモは可成り縁の遠い種類である。

採集は亂獲又は捕蟲網中へ叩き落す方法が良く、小蛾用展翅板で、微針を用ひて展翅し、重裝式とする。

〔寫眞〕 イチジユクの葉裏に止つて居るスケバハゴロモ。



コレラやチブスの媒介をする厄介な昆虫であるが、昆虫である以上採集しないわけにも行かない。食物を嘗め廻る奴は多くの場合雌で、雄は天井や入口の附近を飛び廻つて居るものである。蠅に限らず昆虫の雌は雄よりも食ひ辛棒が多い。それは體に卵を持つて居り、その方に養分を送らなければならないからである。甚だしいものになると雄だけ口が退化して居ても食へないものもある。

〔寫眞〕 日當りのいゝ板塀に止るイヘバヘ。或る春の日の朝。

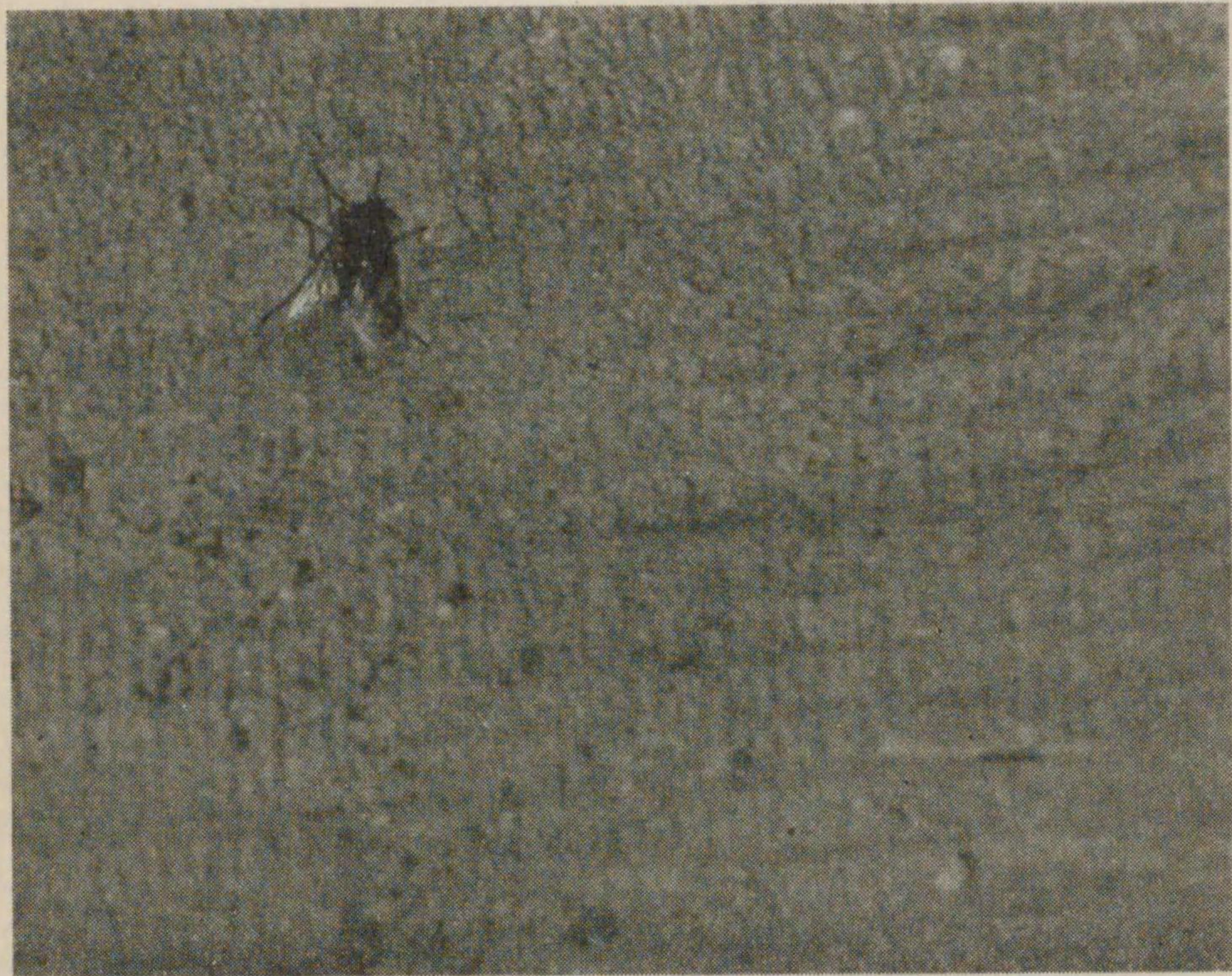
(室内の蠅)

座敷——イヘバヘ、オホイヘバヘ、ヒメイヘバヘ。

臺所——右の他にシヤウジャウバヘ、キンバヘ。

便所——クロバヘ、シマバヘ、コウカバヘ。

蠅の種類が多く採集出来る家は自慢にならぬ。



73 ひらたあぶ

赤い頭、金色の胸、黄色と黒のだんだらのある腹。

ヒラタアブは可憐な昆虫である。

一鉢の草花を軒先に出して置くと何處からともなくやつて来る。

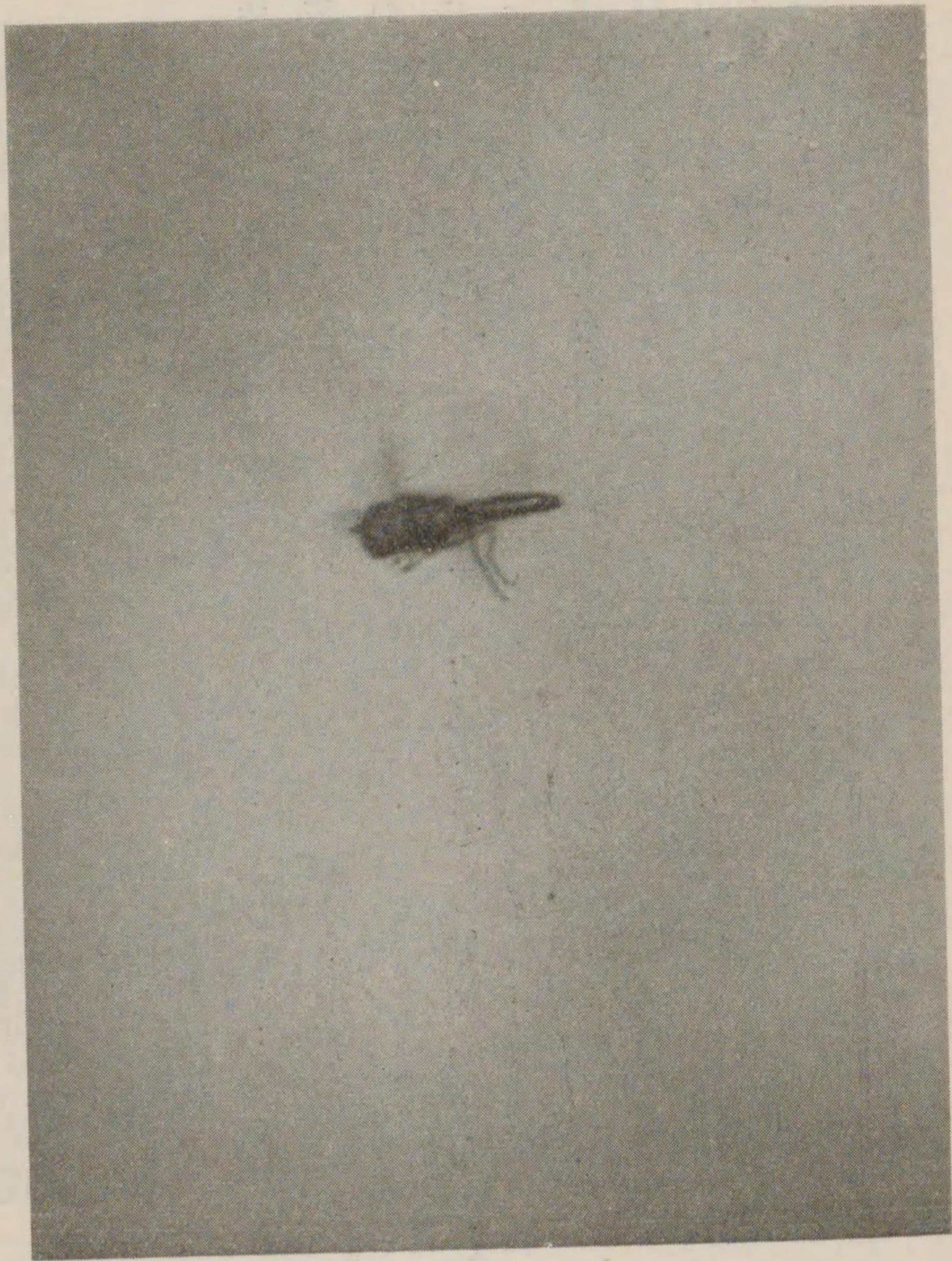
肢を引き寄せてじつと止つた様に飛んで居る姿は、若葉の茂る木の下道等でよく見かける處である。

【寫眞】 ヒラタアブの飛翔。

ヒラタアブ類は腹の斑紋で分類する場合が多いが、個體的に變化が多いから當てにはならない。山に居るものは平地産と異なる場合が多いから、同じ様に見えても捕つて来る方がいゝ。

昆虫の天然記念物

昆虫の中には天然記念物として保護されて居るものが二三ある。山梨縣下の源氏螢の如きは寧ろ名勝としての見知から保護を受けて居るが、大山(鳥取縣)のキマダラルリツバメは珍種でゐるが爲で、日本は此の屬 *Aphanaeus* の北限なのである。又茨城縣片庭のヒメハルゼミは古來から大蟬と呼ばれて土地の名所となつて居たが、三本の椎の老樹のみにしか發生しないので天然記念物として保護を受けることになつた。



日本産のヨコバヒの内では最大のものである。種々な植物、野菜等を害するが数が少ないので大した被害はない、生きて居る時は黄緑色であるが、死後は橙色に變る。私は標本が變色しない様に色々の方法を講じて見たが未だ成功しない。

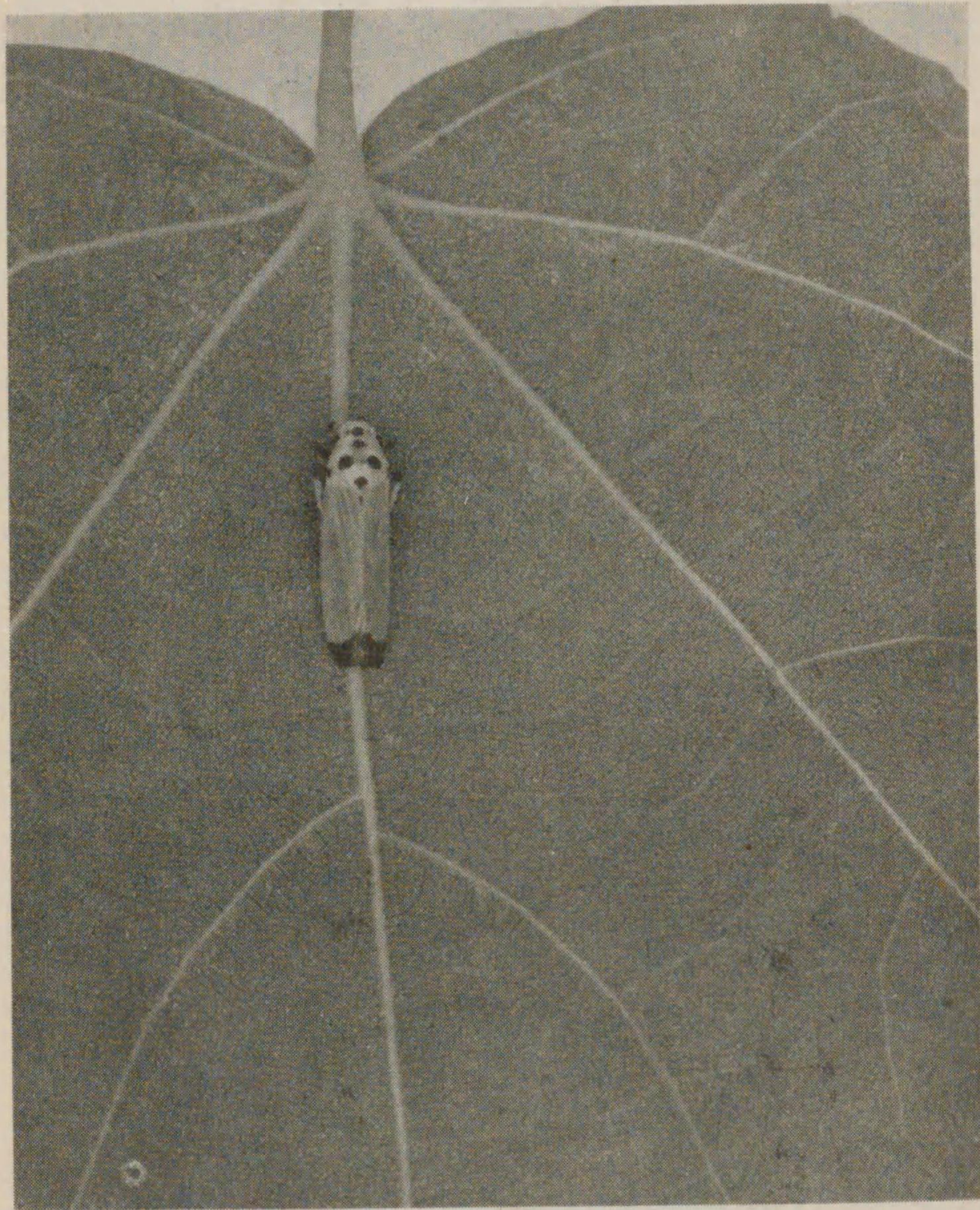
臺灣には内地のものとは違ふ型が二つある。一つは内地種に似て少しく大型のもの（山地に産する）、も一つは黒點が小型のもので平地に普通のもの。

此のヨコバヒは殆ど一年中姿が見られるもので、成蟲態で冬を越し、翌春産卵する。

【寫眞】 芙蓉の葉裏に止つて居るツマガロオホヨコバヒ。

ヨコバヒの類は亂獲採集で最も多く集めることが出来る。草原、樹枝等場所に依て夫々違つた種類が獲られるから注意を要する。

標本は粘着重裝何れにても良い。



75 打ち落とし採集

樹の下に蝙蝠傘を擴げて枝を叩くと色々なものが落ちこんで来る。甲蟲、カメムシ、ツノゼミ、ヨコバヒ等は斯うして澤山に捕れるもので、これも例に依て吸蟲管の力を借りて急速に逃げられぬ内に吸つてしまふのである。

パラソルの廢物に白い布を張つて柄を途中から折り曲げる様にすれば立派な採集傘が出来る。寫眞の傘も廢物利用で作つたもの。甲蟲専門の學者は別に網等持たず、此のやり方ばかりで採集して居る。

傘にはいつた昆蟲は第一に飛び易い蠅類から、ヨコバヒ、カメムシの順で吸ひ込み、最後に甲蟲に移るのである。打ち落とす最中いつでも使へる様に吸蟲管のゴム管を口にくはへて居なければならぬ。

嚴寒の候潤葉常綠樹を叩くと随分珍らしいものがはいつて来るものである。

打ち落とし採集をビーティング (Beating) と云ふ。

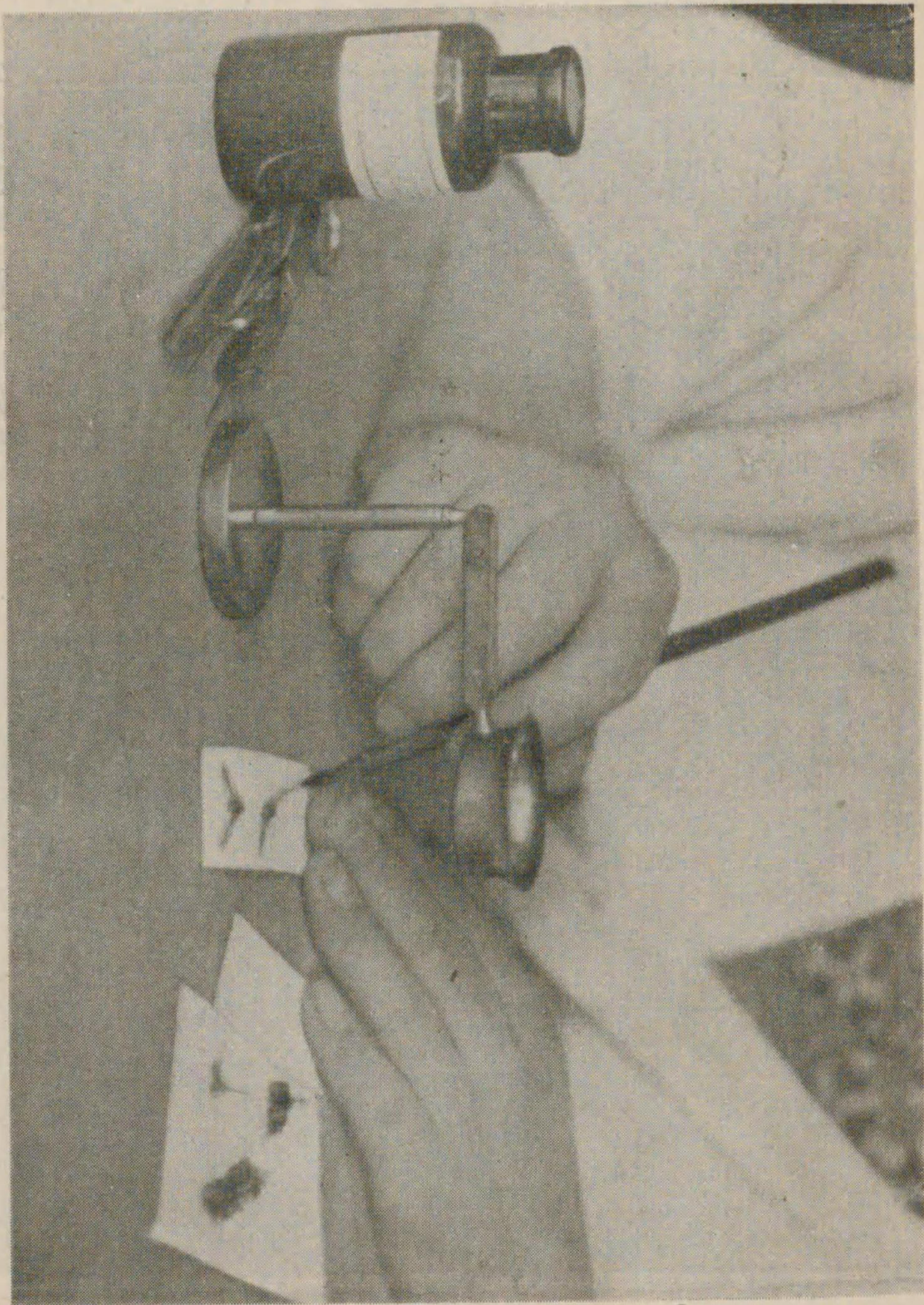


針に刺すことの出来ない様な小形の昆虫はタラカンドゴムで臺紙に貼るのが最も簡単である。粘着するには白い厚手の紙を適當の大きさに切つて、筆でタラカンドゴムを塗り、それに小蟲を貼り付けるのである。此の時に肢を出して翅を擴げる時は立派な標本になるが、成るべく毛筆で作業をするのであつて、展翅の時の様に針を用ひて翅を動かす時は破れるから注意しなければならぬ。(一五六圖右)

展翅せずに貼る場合には、長さ十二耗、幅六耗位の小さな臺紙を澤山作り、その一方に針を刺して平均臺の一番高い孔で針脚を一定する。これを澤山並べて刺して置き、針の刺してない方にタラカンドゴムをつけて置き、一匹宛小昆虫を載せて行くのである。このやり方は専門家の方法であつて、最も簡単であるから、一時に多數の採集品を得た場合短時間に處理することが出来る。臺紙の代りに厚い透明のセルロイド板を用ひれば非常に綺麗である。(一五五圖左)

【寫眞】 ヒラタアブの粘着標本を作つて居る處。

蜂の類は捕つてすぐには肢や翅が剛直して居るのでやり難い。翌日か翌々日標本にするのがいい。針を刺して展翅する時にもその傾向がある。



77 昆虫針・重装式標本

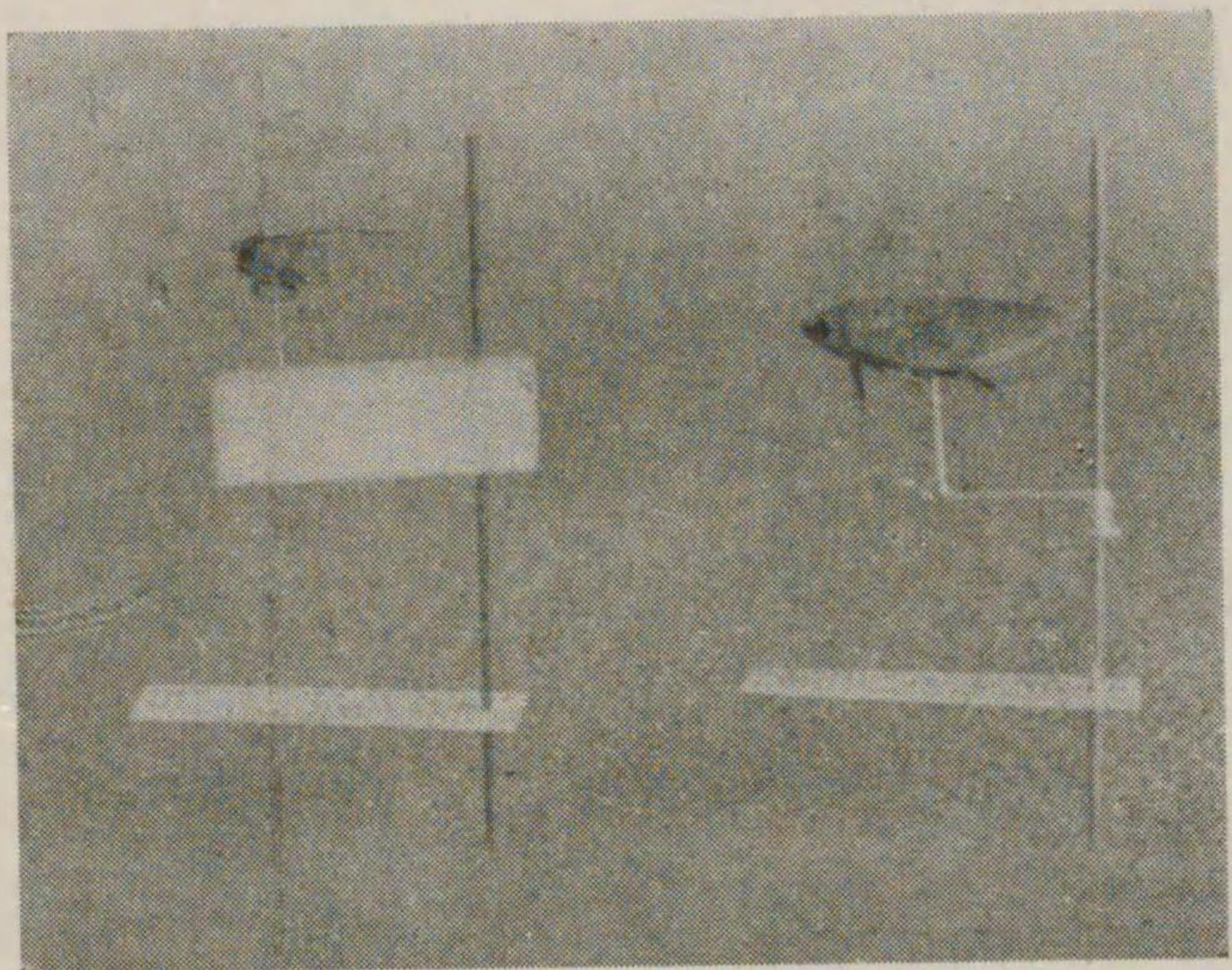
昆虫標本に無くてならぬものゝ一つに昆虫針がある。多くの人は短い留針を用ひるが、これは太く短かいので役に立たない。専門家は長四纏程の専用の針を用ひるのであつて、これは〇號から七號迄あり、號を重ねるに従つて太くなるもので、イヘバヘ位のは〇號、シジミテフ一號、キテフ二號、ヒラドシテフ三號、ゴマダラテフ四號、クロアゲハ五號、エビガラスズメ六號、カブトムシ七號位に使ひ分けるのであるが、これ程迄にしなくとも、二、三、五位があれば充分間に合ふ。

是等の針は何れも舶來で高價（百本七〇—九〇錢）の爲に著者は同じ太さと長さのものを、より以上腰の強い材料で作らせて愛用して居るが、價格は約三分ノ一で出来る。國産品愛用の折柄大いに御すゝめしたい。

小形の昆虫は普通の昆虫針に刺すことが出来ないで、或るものは前に述べた様に粘着式にするが、中にはそれが出来ないものもある。小形の蝶や蛾の類、又は體の下面を見ることが必要なウンカ、蠅等は細い毛の様な針又は針金で、胸の下面から背面へ抜けない様に刺し、一方を山吹速草、ヒマハリ又はモロコシの髓等を長方形に切つた臺に刺して、一端を普通の昆虫針で刺すのである。此のかはりにダブルピンと稱するものを用ひれば至極簡單に能率があがる。

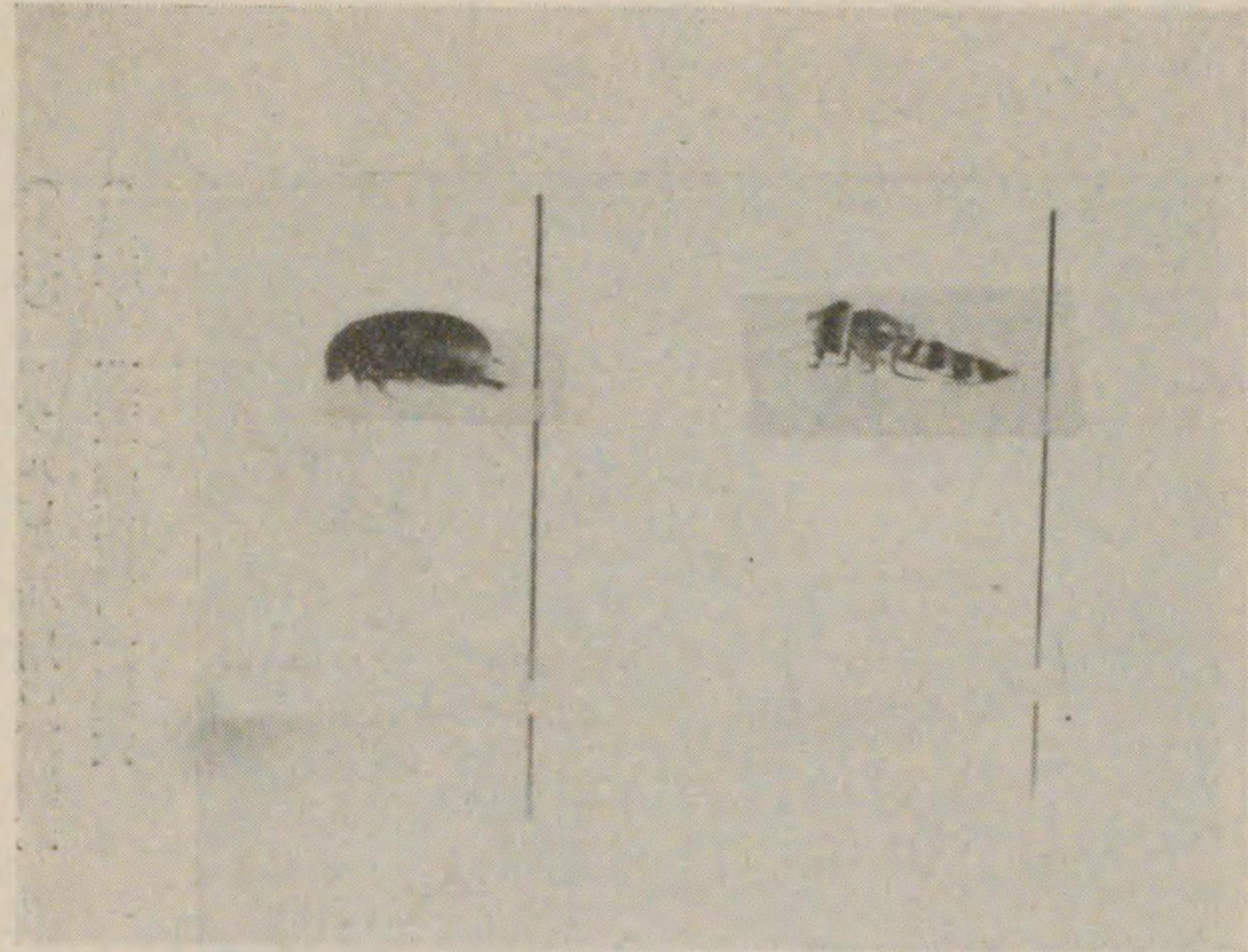
(上右) ダブルピン使用の重装式

(上左) 蓮草髓使用の重装式



(下) 蓮草髓と四角に切つた髓



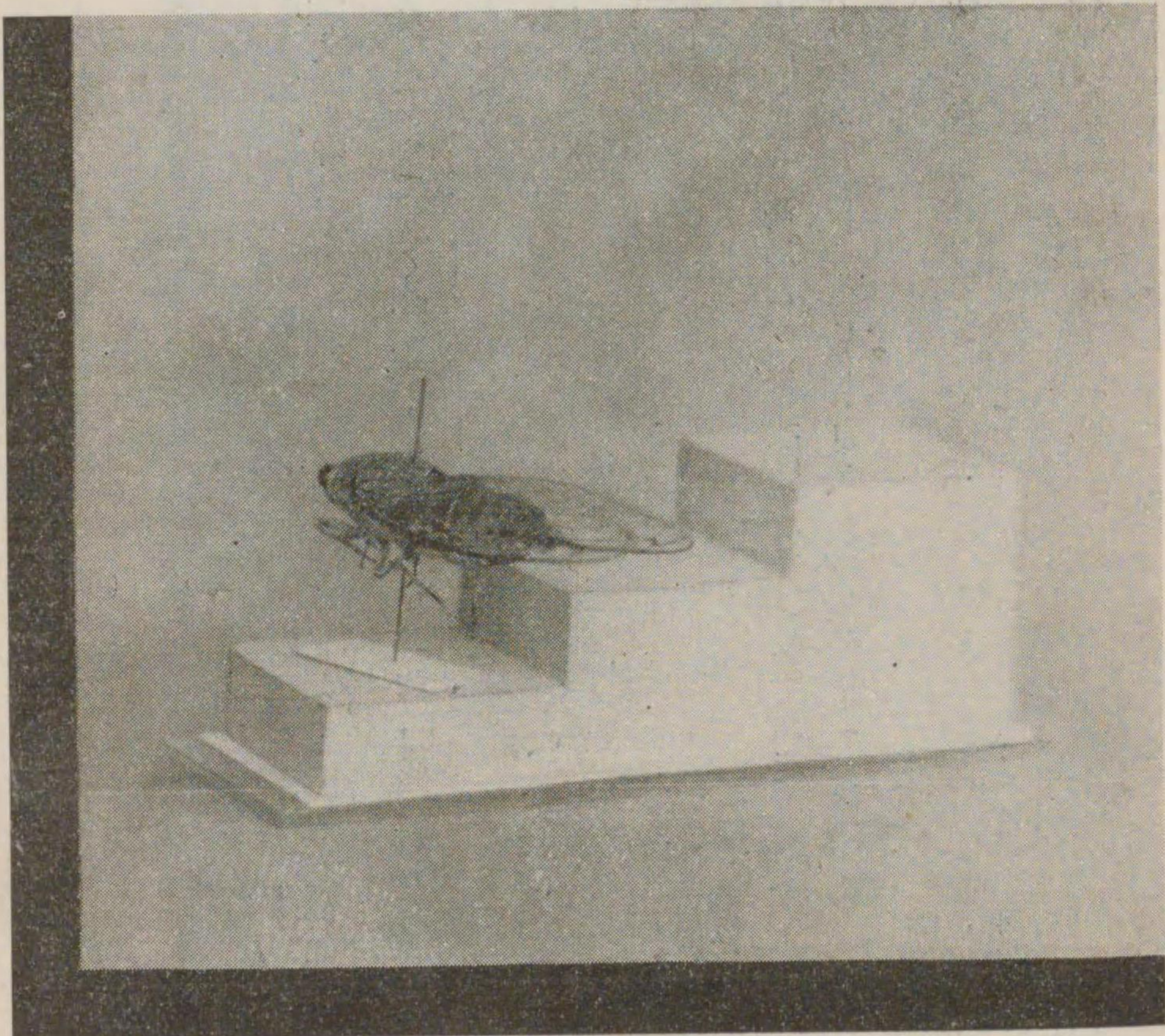
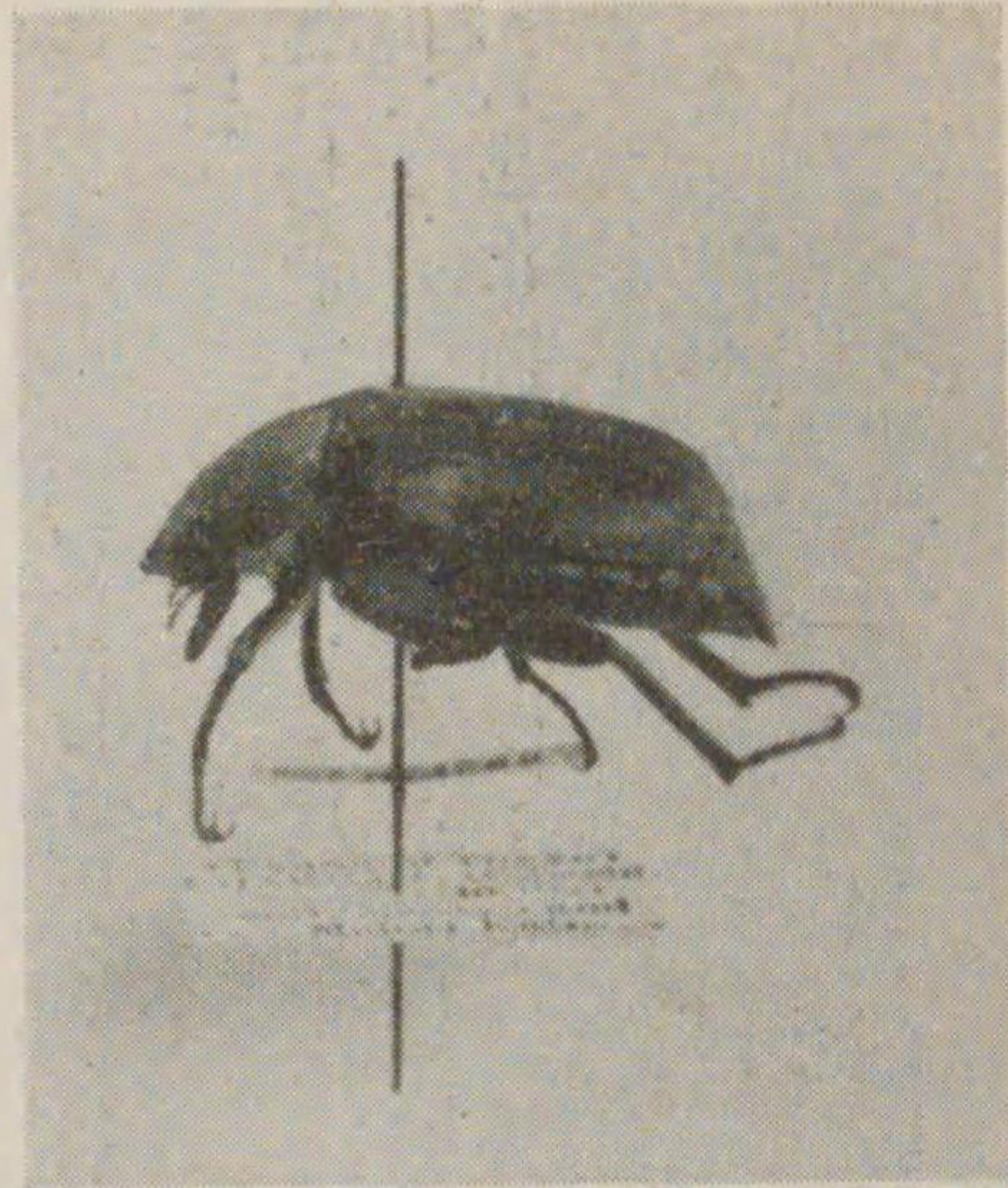


針に刺した臺紙の高さやラベルの高さが一定して居ると箱に並べた時に非常に美しいものである。これに反して亂雑なものであると、折角の珍蟲も決して目立たないものである。

此の平均臺は厚さ一糶の板を三段に重ねて底に硝子板を貼つたもので、各階段の中央に細い孔をあけてある。

一番高い處は臺紙の高さ、最下段は採集ラベルの位置、中央は補助である。

〔寫眞〕 (上) 粘着標本、臺紙と採集ラベルの附け方。(左頁上) 採集ラベルをつけた甲蟲標本 (同下) 採集ラベルのつけ方。



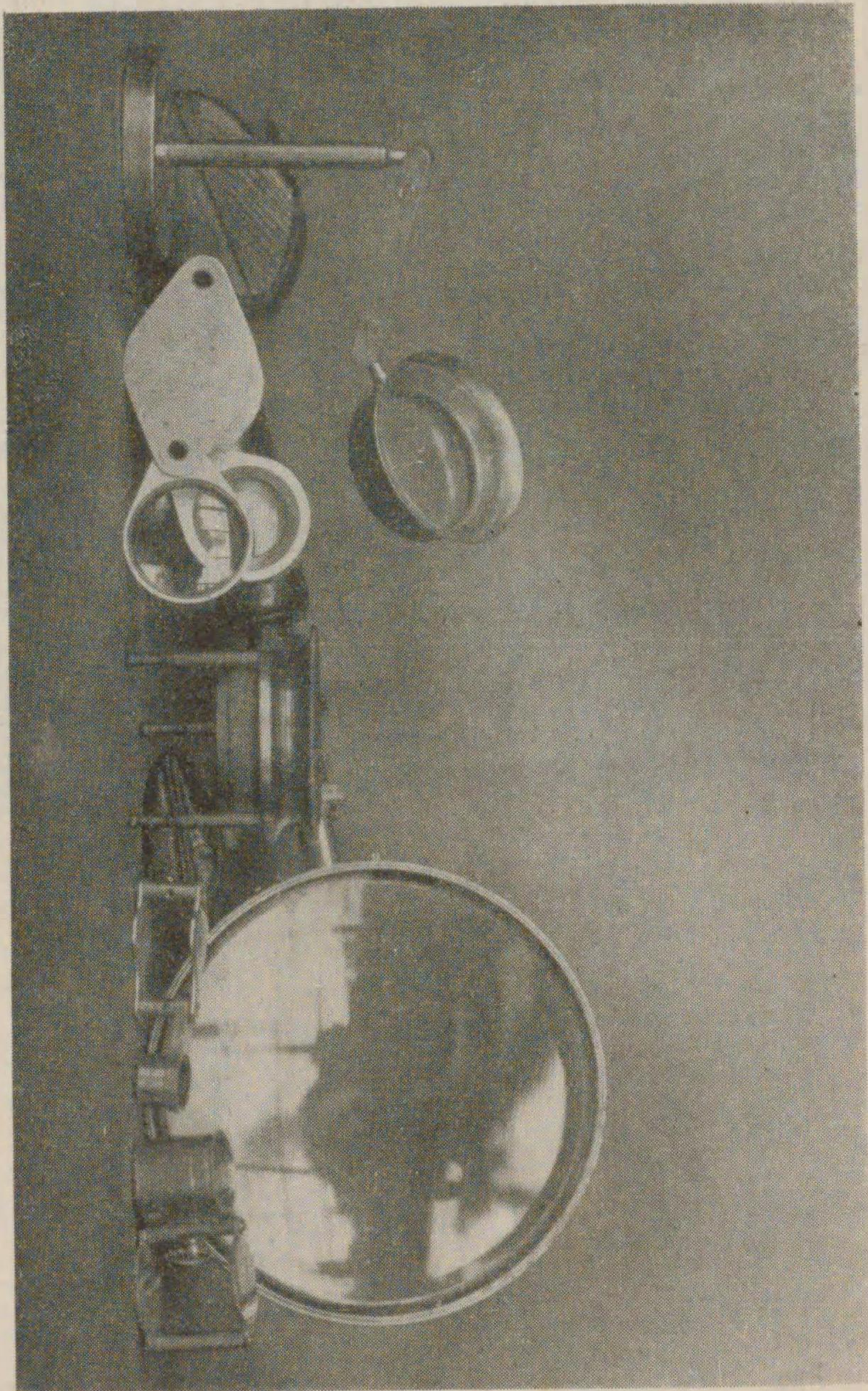
79 擴 大 鏡

俗に「蟲めがね」と云ふ。我々は獨逸語をそのままルーペと呼んでゐる。これは小形の昆蟲を見るに無くてはならないもので、是非一箇は具へて置く必要がある。倍率も三、四倍から廿倍位までが手頃で、携帶用、研究用の兩者がある。

ルーペを求むる時に品物を覗いて見て周圍に色の附く様なものは粗悪品であるから、その様なものでないものを選びなければならない。

【寫眞】

左より標本製作用のルーペ。小蟲標本を製作する時これで覗き乍らやる。次は三倍及び四倍（一緒にすれば七倍）、その左後方はサツク、その右は三脚ルーペ、次は携帶用二〇倍ルーペ、後方大形ルーペ、標本箱の上から見るに便利、右端十倍ルーペ。



80 小蛾用展翅板

旅行中に獲た小蛾は直ちに展翅しないと後でどうにもならなくなるので、此の様な展翅板でその都度展翅して持ち歸るのである。これには微針又は代用の細線を用ひ、標本は出来てから重装式とする。

菊判の書籍位な大きさに作つて蓋をつけて置けば持ち運びに甚だ便利である。

【寫眞】 小蛾用携帯展翅板。

蓮草の代用となるもの

重装式標本を作る時、蓮草が手に入らない場合には次の様な代用品がある。

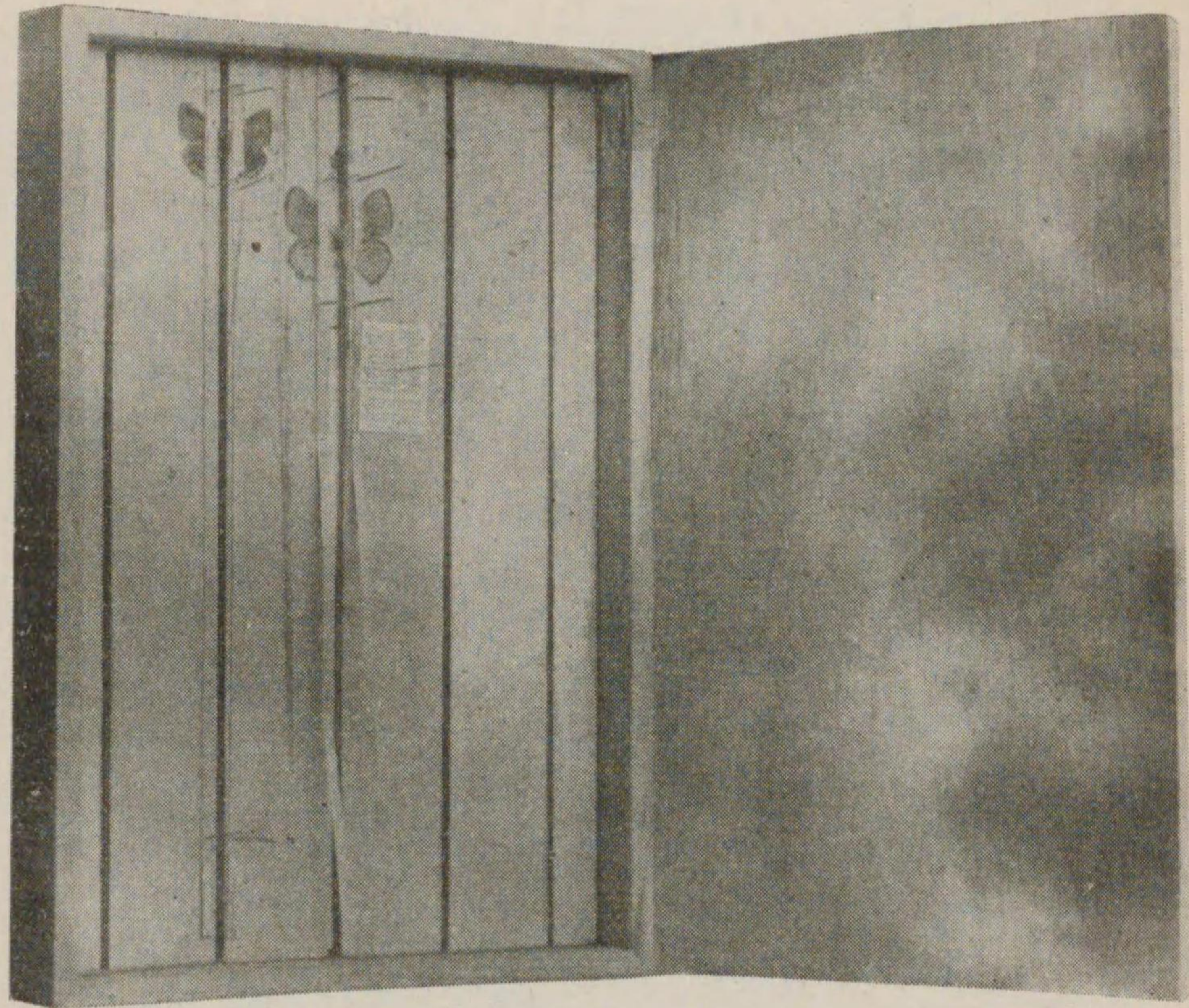
山吹の髓―圓柱状、適當の長さ（一糎位）に切つて用ひる。（以下總て安全かみそりの刃で切る）

菊芋の髓―角形に切つて用ふ。

タウモロコシ、モロコシ等の莖―皮を剥して角形に切つて用ひる。多少色のついて居るのが缺點。

コルク―不要の塊の栓を長方形に切つて用ひる。上の面にだけ白い紙を貼る方が美しい。

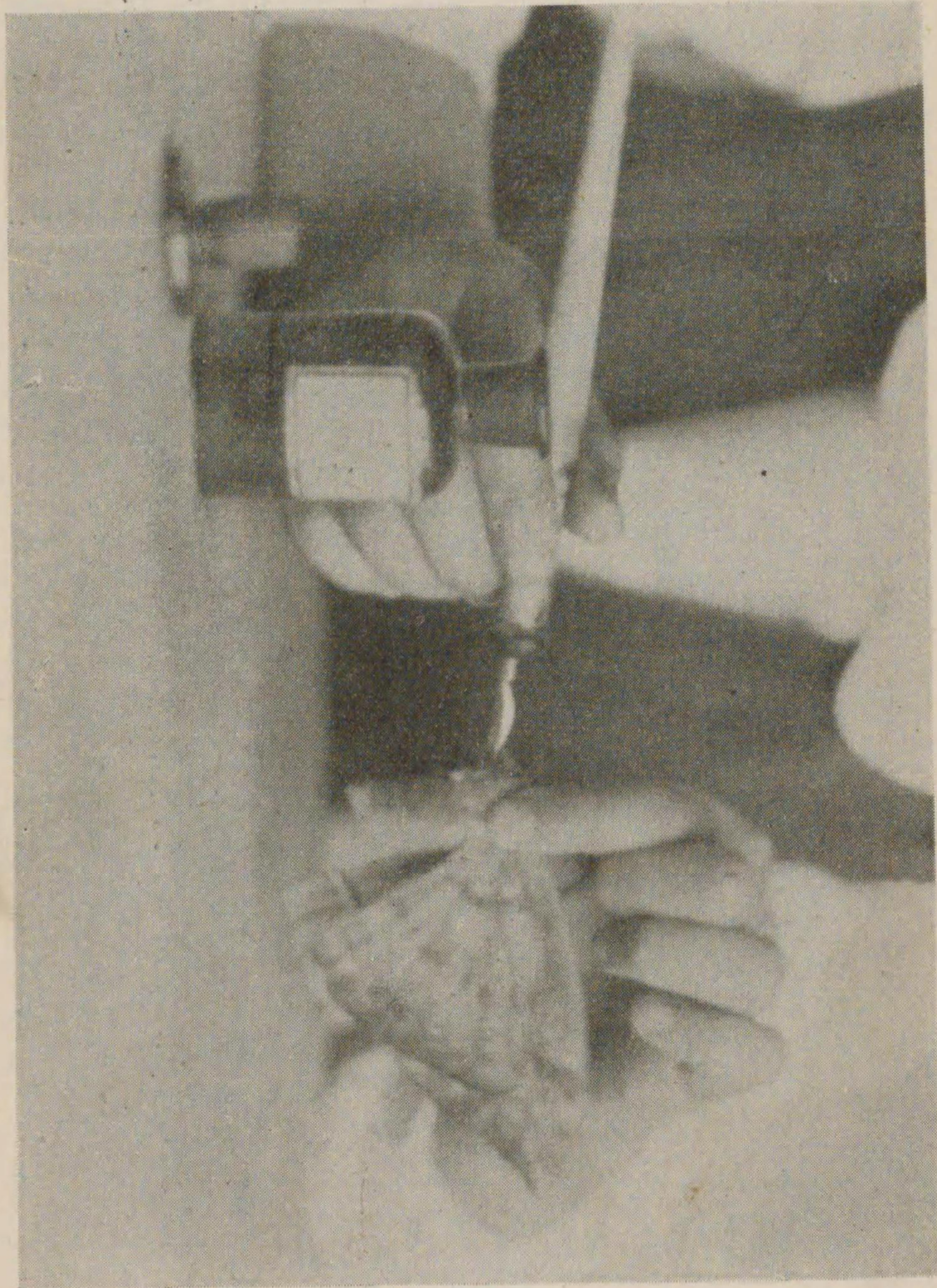
コルク以外は充分乾燥してから用ひないと針に銹を生ずる恐れがある。



81 大きな昆蟲の殺し方

カプトムシの様な大きな昆蟲は毒塚に入れると中を掻き廻して他の昆蟲を目茶目茶にしてしまふから、採つてすぐ胸面に揮發油を塗るか手拭の袋にでも入れて生きたまゝ持ち歸り熱湯をかければ良い。

大きな蛾も亦中々死なないで困るものだが、寫眞の様に胸の處を持つて少し強く壓へ、ペン先にフォルマリンをつけて挿し込み、胸を壓した指を緩めると液が中に吸ひ込まれて直ちに死んでしまふ。フォルマリンで殺したものはすぐに展翅しないと固くなるので再びやれなくなる。採集旅行の際にはアルコールがいゝが、これは液が體に浸み互つて汚くなるので注意して操作せねばならぬ。



風薫る初夏の朝早く、庭先に出て見ると、無花果の花に美しい小さな蠅が止つて居た。全體金色に輝く可愛らしいアシナガキンバヘだ。朝日を受けて翅は更に虹の様な美しい色を反射してゐた。

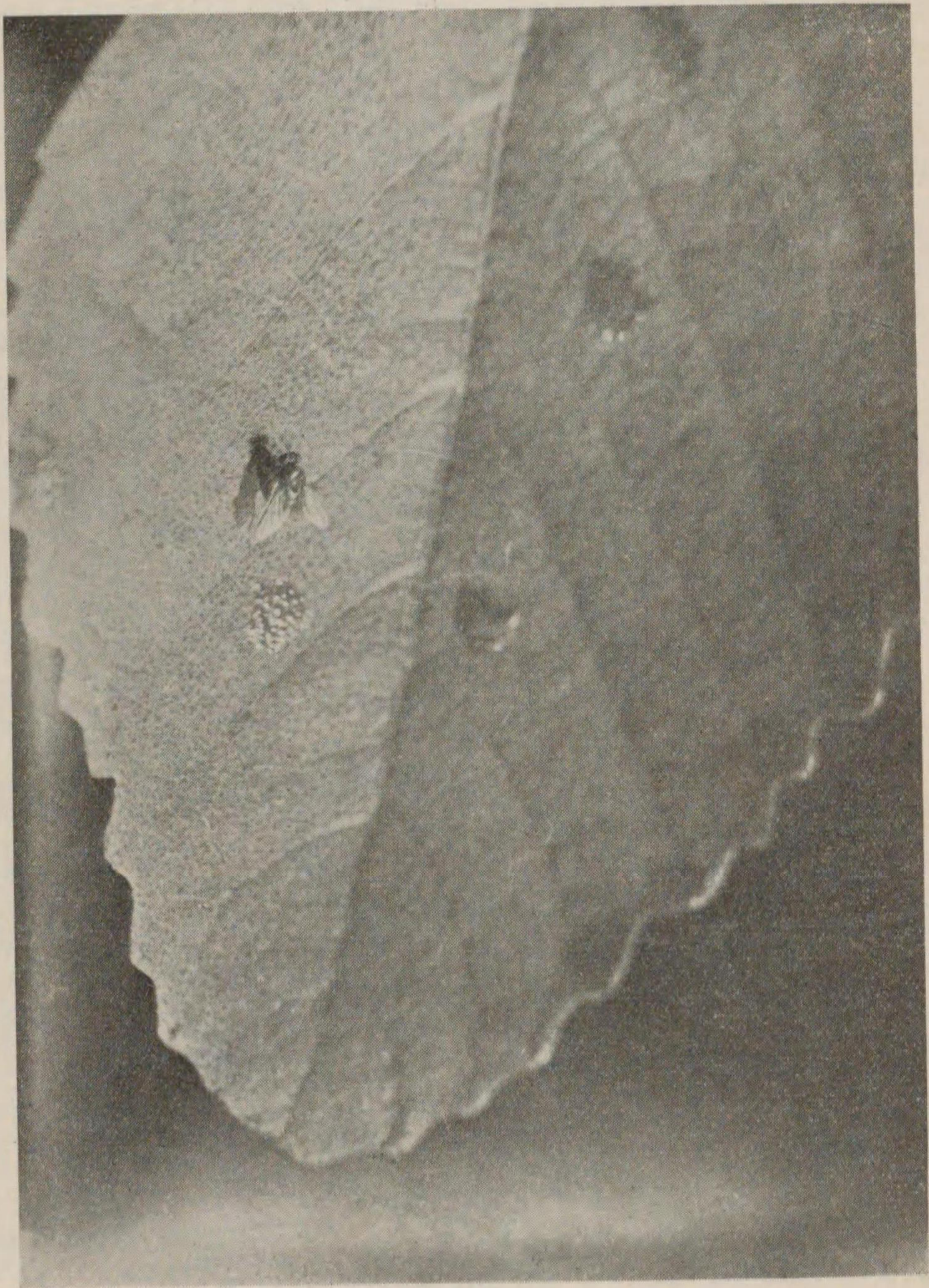
他の植木を見ると矢張り葉の上に二つ三つ位止つたり飛んだりしてゐる。中には金色に近いものもあるし、もつと強い緑色をしたものもあつた。

【寫眞】 無花果の葉に憩ふアシナガキンバヘ。その後方及び處々光つて居るのは水滴。

小形の蠅類は中々活潑で捕獲し難いものである。此の場合には別に絹で小さい捕蟲網を作つて採集するのがいい。又標本には重裝式が最適であるが、粘着してもいい。

學名 (その三)

亞種=多くの場合一の種であり乍ら地方的に相異のあるものを亞種 (Subspecies) として區別するこ
とが多い。たとへばモンキアゲハの基本型は *Papilio helenus* Linnaeus と稱し、日本内地のものはこ
れと比較して *Papilio helenus* L. subsp. *micronicollens* Butler と云ひ、これより小型の臺灣に産す
るものは *Papilio helenus* L. subsp. *fortunius* Fruhstorfer と名附けられて居る。此の様に別亞種を有す
る基本型は基亞種として種名の次に基亞種名を附記される。即ち *Papilio helenus helenus* Linnaeus 他
の亞種は *Papilio helenus micronicollens* Butler; *Papilio helenus fortunius* Fruhstorfer と記す。subsp. の
文字及び基本型に命名した人の姓は通常省略する。

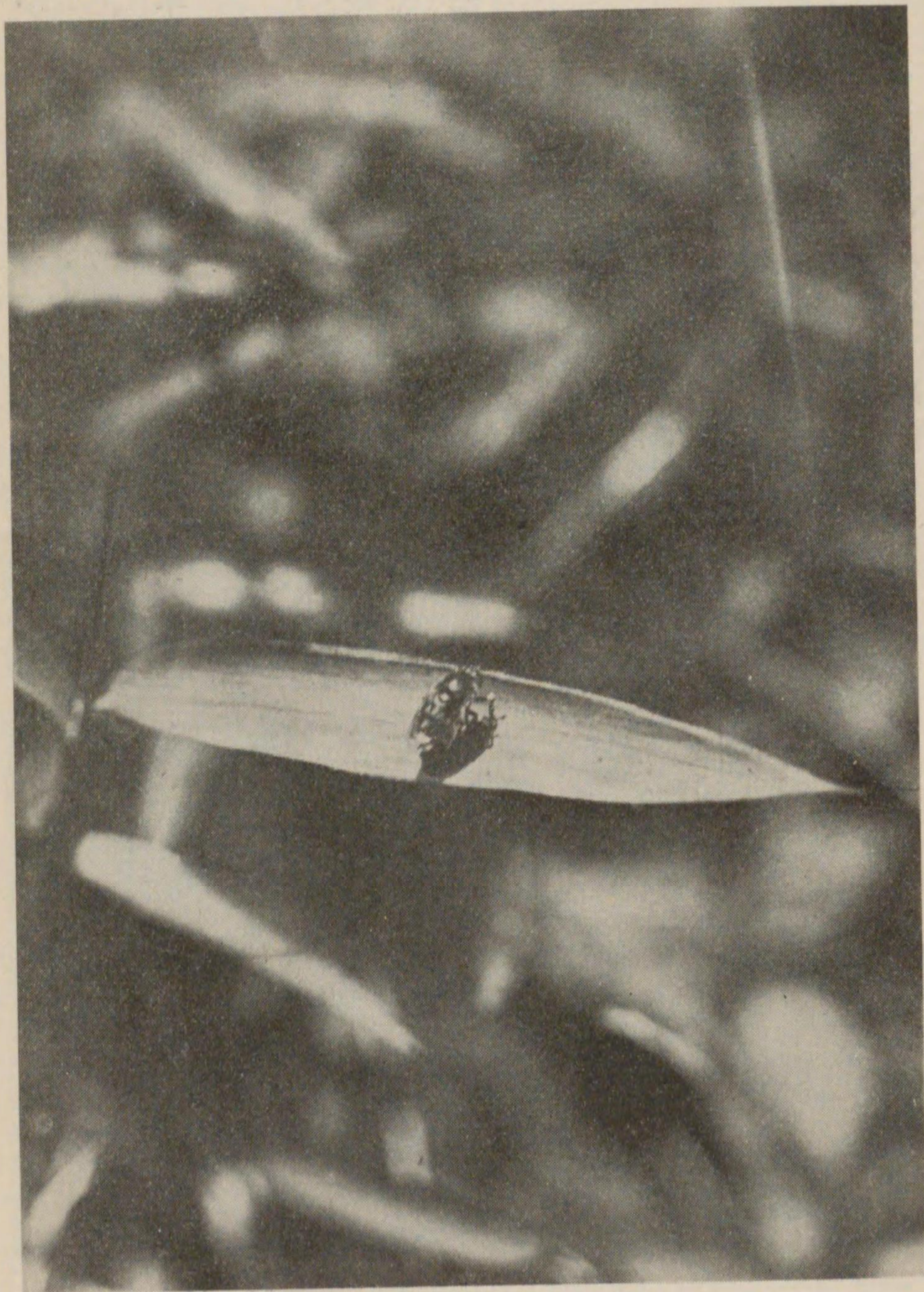


幼蟲が蟻の巢に寄生するので此の名がある。花虻の一種で、春から夏にかけて日當りのいゝ叢等に採集出来る。日本に産するものは四五種ある様である。

寫眞はアリノスアブ。體がもつと大形で幅廣く、金褐色をしたものをキンアリノスアブと云ふ。

花虻の類

花虻の類はその名の如く花に多いもので、色々な花上で採集出来る。平地に産するものにはオホハナアブ、ハナアブ、ノラハナアブ、アヲハナアブ、クロハナアブ、アシブトハナアブ、シマアシブトハナアブ、オモナガハナアブ等が普通で、山地に行くとフタガタハナアブ、ハナバチモドキハナアブ、ミケモモブトハナアブ等一見マルハナバチの様な見事な種類が捕れる。



早春ハンノキの葉に、綿をかぶつた様な真白な幼蟲がついてゐるのを見ることがある。これはミツクリハバチの幼蟲で、五月頃同じ處を訪れると、もう幼蟲はゐないで、その附近を飛び廻つてゐる親を見ることが出来る。

【寫眞】 ハンノキの葉を食つて居るミツクリハバチの幼蟲。

ハバチの幼蟲は一般に裸で、體を輪の様に曲げるものが多い。鱗翅目の幼蟲に一見似て居るが、腹脚の数が非常に多いので直ちに區別が出来る。
ハバチは五六月の頃が最も豊富に採集出来る。

學 名 (その四)

變種 II 一つの種の内に色とか斑紋とかの著しく異なるものが存在することがある。これが固定して居る場合には變種 (Variety) として區別される。ミンミンゼミ *Oncotympna maculicollis* Motschulsky は綠色に黒紋のあるのが基本型であるが中に體が黄緑褐色無紋のものがある。これは變種で *Oncotympna maculicollis* Motschulsky var. *mikado* Kato と云ふ。種名を二つ續けて書くのは亞種の時だけで變種にはその必要がない。



採集用具 捕蟲網、採集傘、蟬竿、雜囊、毒蟻、毒管、酒精管、移植鏝(糞蟲を掘る爲)、アセチレンランプ、夜間採集用白布、生蟲收容管、採集箱、ピンセット類。

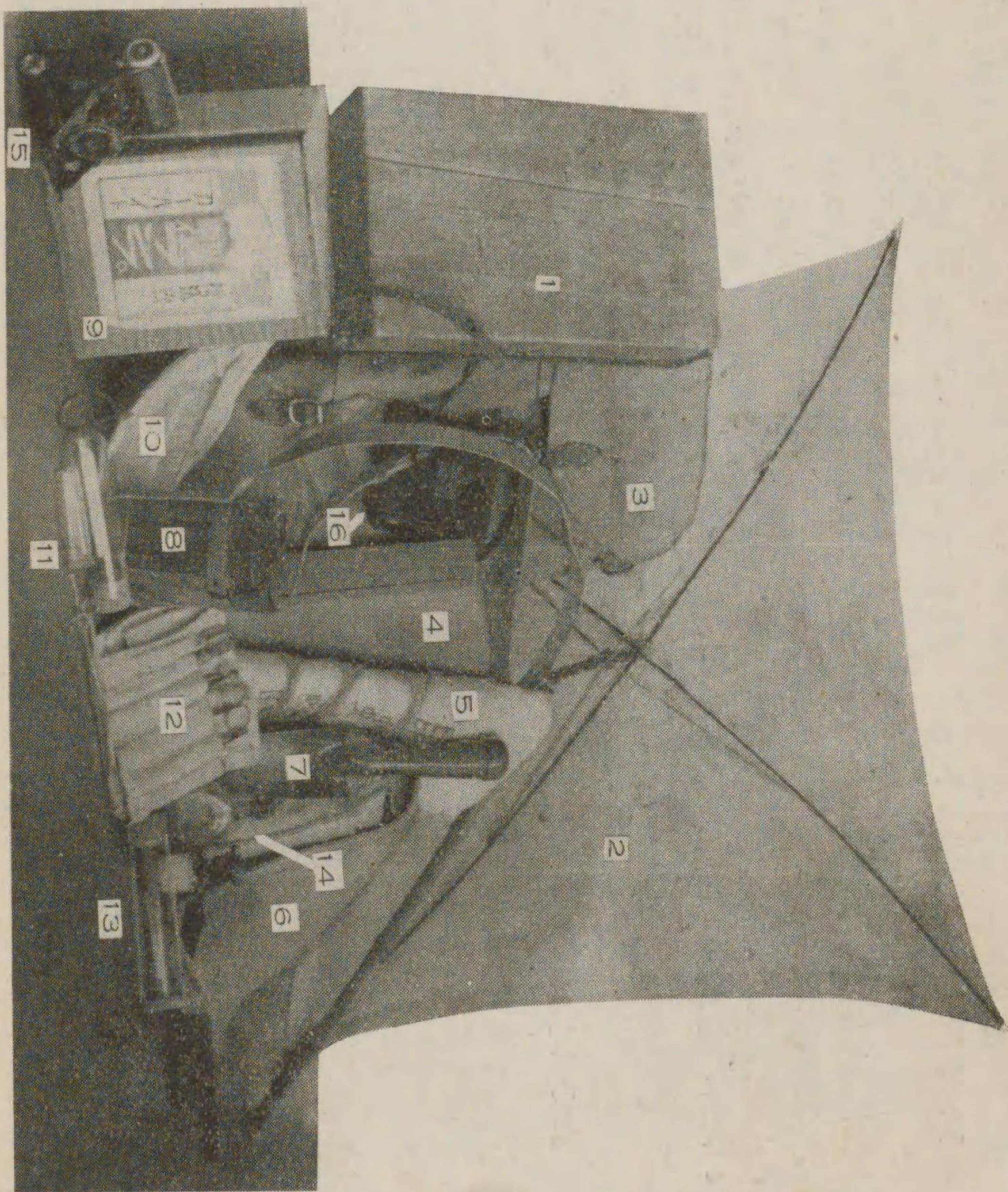
整理用具 小蛾用展翅板、採集品を入れる箱、蜻蛉の蕊にする草、解剖鋏、ナイフ、フォルマリン、アルコール、揮發油、トリモチ、注射器又はペン先、留針、昆蟲針。

其の他 手帖、鉛筆、カメラ、地圖、手拭(ぬぐい)、塵紙、齒ブラシ、デルマトール(傷藥)、繃帶、脱脂綿其の他手廻品。

餘り澤山持つて行くことは徒に活動の自由を防げられて、却て無益と知るべし。

【寫眞】 採集旅行の準備。

- (1) 採集箱 (2) 採集傘 (3) リュクサツク (4) 小蛾用展翅板 (5) 夜間採集用白布 (6) 雜囊 (7) 移植鏝 (8) 毒蟻 (9) アセチレンランプ (10) 受網 (11) 毒管、酒精管 (12) ピンセット、鋏等 (13) 生蟲收容管 (14) 藥品 (15) カメラ (16) 同サツク



森林の下草が繁茂する處には昆蟲が非常に多い。花には色々なハナアブ、ヒラタアブの類が見られ、ハナカミキリ等も多い。日光、上高地等はその代表的の場所であらう。

樹の間を洩れて陽光の射して居る處にはハバチ、蝶等が集る。

此の様な場所は亂獲採集が一番で、これに依て思はぬ獲物に狂喜するであらう。

但し杉林の中は殆ど見込が無いと思はなければならぬ

【寫眞】

徳本峠から上高地に至る途中の森林中にて。太い樹の幹にコムラサキが美しい翅を輝かせて止つてゐる。

學 名 (その五)

型II此の型(Forma)と云ふ意味は色々な場合に使はれるが、蝶の季節的變化等の様な場合に用ひるのが適當であると思ふ。この場合變種とする人もあるが、出現時期に依る型の變化であるから變種ではない。サカハチテフは春型を基本型として命名され *Ascinia burejana* Bremer なる學名を有するが、夏型は殆ど別種の様な色彩となり、*Ascinia burejana* forma *fallax* Janson と云ふ。此の場合夏型が基本型にされたのであつたならば春型が何とか名附けられたであらう。

雌雄全く色彩を異にする場合でも同一の種名で取扱はれるのであるが、臺灣産のナガサキアゲハの様に雌にだけ尾のあるのと無いものと二型を有する場合には、前者を別の型として區別される。



雄の腹の先には缺はさまがついて居て、いつでもそれを持ち舉げて居るのでシリアゲムシと云ふ。従来益蟲の仲間に入れられて居たが、死んだ昆蟲を食つて居るので益もなければ害もない蟲である。

初夏の頃から發生して林や森の下草中に多い。種類も澤山ある。

【寫眞】 シリアゲムシが飛んで来て葉の上によつた瞬間を撮る。

此の蟲は食肉性である爲に腹部が腐り易いから、蜻蛉の様に細い蕊を刺すがいゝ。展翅の翅の位置はX型である。後翅の前縁を一直線にすると上り過ぎる。

學 名 (その六)

異常型II (Aberrant form) これは固定した型ではなく、極端に云へば個體的の變化である。一寸とした變化に一々名前をつけるには當らないと思ふが、蝶等は相當に異常型として區別されて居る。前に記した種々の型と異り、唯一匹だけの事もある。一般に斑紋の變化の場合が多い。

茲に注意したいのは原種と云ふ文字が屢々用ひられて居るが、これは最初に命名された型であつて、眞の意味での原種ではなく、最初に記載された型であるから『基本型』と稱する方が適當であると思ふ。

